
妖しい旋律

月猫百歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖しい旋律

【Nコード】

N0349T

【作者名】

月猫百歩

【あらすじ】

あの忌まわしい出来事から年月は経ち、大学の進学と共に上京することになった紗枝。「決して忘れるな」紅い鬼の言葉を守り続けていたが、旅立つその日に、自分を心配してくれる姉の説得に負けて「忘れる」と言ってしまう――

再び籠の中で飼われる紗枝は、果たして正気を保っていられるのだろうか。

序ノ怪

わたしを離れた鬼は言った。

――決して忘れるなよ――

――決してナ――

黒い波に吞まれながら聞こえた鬼の紅い声。肺に水が流れ込むなか、遠くなる妖しい紅が見えた。気付けば光の元に戻ったわたし。妖のいない世界。朝がくる平穏な場所。

わたしは元の世界に戻ったのだ。

それなのになぜだろう。日向にいるはずなのに、常にある陰りは。日常の輝きに見え隠れする影の存在は。

闇を奥底に閉じこめたまま、わたしは日常の平穏にまどろんでいた。朝日を浴びて目を覚まし、昼間は学校で友達と勉強。夕方は部活に打ち込み、夜は今日の出来事を思い出しながら眠る。

そんな日常。そんな毎日。すでに当たり前となつた、人としての生活をわたしは過ごしていたのだ。

迎えにくる妖は現れない。

わたしが人々と笑い過ごしても、心の底で怯え過ごしていても、紅い鬼は一向に姿を現さなかった。

でも。それでも油断してはいけなかったんだ。
簡単に口に出すべきではなかったんだ。

「忘れる」だなんて、言つべきではなかったんだ。

一ノ怪

窓の向こうに流れる春の景色。

暖かな日差しに花たちがより明るい姿を華やかにさせ、わたしの気分も同じように明るくさせてくれる。

「気分はどう？ 紗枝」

「なにが？」

「なにがって、あんたねえ」

車内に流れるお気に入りの音楽に合わせ、動いていた指が止まる。車のハンドルを握り直し、お姉ちゃんがわたしに横目で呆れた視線を送ってきた。

「これから上京するんだから。緊張するとか、なんかないの？」

「ん〜。なんだかまだ実感なくて」

「もうなに寝ぼけてるのよ！ そんなんで大学通えるの？」

そんなこと言っただけ。口をとがらせて運転席を見れば、お姉ちゃんも長い前髪を片手でかき分けているところだった。そんなに気になるならピンで留めればいいのに。隠れていた耳に光るピアスが見えたところで、わたしはシートにもたれ掛かった。

「あのさ、紗枝」

「なに？」

「あのことまだ気にしてる？」

軽い感じを装ったのか遠慮しているのか。さきほどの口調とは違って、妙に優しくわたしに声をかけてくる。

「あのことって？」

なんとなくお姉ちゃんが何の事を言っているのか分かってはいたけれど、わたしは知らないふりをした。

お姉ちゃんは少し迷ったあと、今度ははっきりと見て分かるくらい、難しい顔をしながらわたしに言った。

「その……光子ちゃんのことよ」

やっぱり。

目を閉じてから大きく息を吸う。そして吐き出すとともに言った。

「大丈夫。もう大丈夫よ、お姉ちゃん。心配しないで」

気持ちのざわつきを押さえ込んで、いつもどおり微笑んで見せた。いまではすっかり、作り笑いも板に付いた。

「そう……」

それを境に、お姉ちゃんもわたしも何も話さない。わたしはその無言の空気を特に気にせず、ぼんやりながれる風景を眺めて音楽を聞いていた。

流れている曲は全部お姉ちゃんお気に入りの音楽ばかり。わたし

も東京に行ってから、なにか新作のCDでも借りて自分の好きな曲でも集めようかな。

「ねえ紗枝」

「……なに？」

赤信号で止まると同時に、お姉ちゃんはわたしをじっとみてひどく改まった顔をした。

「どうしたの？」

不安になってわたしもお姉ちゃんの顔を見返す。

「あのさ。まだ気にしているようなら、もう忘れたら？」

「え？」

「ううん。むしろ忘れるって私と約束して頂戴」

「どうしたの突然」

お姉ちゃんのいつになく真剣な口調に驚いて、まじまじとその堅い表情をしている顔を見つめる。

「お母さん達まだ紗枝の事心配してるんだよ。高校だって最初行かないって騒いで、すごく迷惑かけてたでしょ？　なんでって聞いても、教えてくれないし」

「う、うん……」

「まったく。頭の良い兄貴たちに感謝しなさいよ」

信号が青に変わって、お姉ちゃんはいささか乱暴にアクセルを踏んだ。途端にわたしの体が背もたれに埋もれる。

わたしはこの世界に戻ってきたばかりの頃、あの鬼が迎えにくるんだと思って高校進学を拒んでいた。鬼に連れて行かれるのに受験するなんて無駄だと。

しかし鬼のことなんて知らない兄たちの、強い説得と協力で、わたしはスタートするには遅すぎる試験勉強を始めたのだった。

兄たちのスパルタ式の勉強が功を奏したのか、奇跡的に高校試験に合格することはできたのだが、入学後に返された試験結果の点数はどれもぎりぎりで、とてもじゃないけれど見れたものではなかった。

「ずっとこのままじゃ良くないと思うのよ。だから、せめてこっちに帰ってくるまでは、あのことは忘れてほしいの」

イライラしているのか、お姉ちゃんの言い方にはトゲがあり、たまにこちらを見る視線も突き刺さるものがあった。

「忘れる……」

本当に忘れるなんてできるの？

わたしはお姉ちゃんの横顔から逃げるように顔を背けた。窓ガラスの自分と目が合う。どこか怯えた瞳でこちらに視線を投じているわたし。未だに妖しい紅に囚われている奥底の表情。蘇る鬼の言葉。

「あんなことがあって直ぐにはさすがに無理だけれど。もう四年以上も経つのよ？ だからいい加減、あっちに行ったらあの事はもう

忘れて欲しいの。約束して」

叱りつけるようにぴしゃりと言いつ切る。

確かにこれ以上、お姉ちゃん達に心配かけられない。鬼は相変わらず現れる気配はないし、あれから不可思議なことは一度たりとも起きてはいない。

鬼はわたしのことを忘れているのだろうか。それだったら願ったりなんだけれど。だけど……

考え耽っていたところに急ブレーキがかけられる。小さく悲鳴を上げて、考え込んでいた頭も一時停止した。

「紗枝聞いているの？ お姉ちゃん真面目に話してるのよ！」

「あ、うん……ごめん」

お姉ちゃんの鬼のような剣幕に小さくなる。

忘れるなんて出来るか分からないけれど、せめて安心させるために言うのなら大丈夫よね。それにもう不安にさせたくないし、お姉ちゃんの言うようにこのまま過去に囚われていても仕方がない。

わたしは顔をあげて、強く頷いた。

「忘れる」

呟いて、厳しい顔をしたお姉ちゃんに、はつきりと向き合う。

「もうあのことは思い出さないわ。ごめんねお姉ちゃん」

つり上がった目をしていたお姉ちゃんの表情に、いつもの活発な明るさが戻ってくる。嬉しそうに笑ってわたしの頭をくしゃくしゃと撫で回すと

「よしっ。じゃあ出発！」

元気なかけ声とともに車がまた走り出した。周りの風景もゆるやかに流れ出す。

これからは新しい生活が待っているんだ。この景色ともしばらくはお別れ。よく見ておこう。

鬼はきっと、きっと私のことを忘れているだろう。だからわたしも鬼のことを忘れて、前を向かないと。

陽気な音楽を聞きながら、わたしは窓の外を眺めて暖かな風に揺れる風景を見送った。今から故郷を旅立って、これから迎える日々
に胸を躍らせていた。

しかしこの時わたしはよほど浮かっていたんだろう。

窓の外を流れる木々の暗闇から、あれほど恐れていた紅い視線が、わたしを鋭く睨んでいるのに気付いていなかったのだから。

[illegible]

「あれ？」

情けない音が鳴り、お姉ちゃんが声を上げると、大きく揺れて車が止まってしまった。何度お姉ちゃんがエンジンをかけても全く動

かない。

「だからオンボロは嫌なのよ。もう拓兄いに代わりの車よこしてもらいましょ」

「うん」

どうやらエンストしたみたいだ。我が家の車はかなり年季が入っているで仕方ないんだけど。

苛立たしげに携帯電話を手に取るお姉ちゃんの声に、わたしも頷いて車から降りた。

あ、ここは……。

見上げればあの山道。あの土砂崩れで潰れてしまったお社に続いていた階段。今はお社も新しく建てられ、澄み切った青空と新緑に囲まれている。不穏で不気味な雰囲気は微塵も感じられない。

わたしは毎週、その新しくできたお社に花を手向け続けていた。意味がないと分かっていたけれども、どうしても何かをせずにはいられなかった。

「紗枝。忘れるのよ」

「お姉ちゃん……」

また叱りつけるような声が飛んできた。見るとお姉ちゃんが両手を腰にして、わたしに厳しい目を向けていた。

「これから東京に行って、大学生活始まるんだから物思いに耽っている暇なんてないよ!」

すっかりしなさいと、また怒った。

少し間があつてからわたしは苦笑し、山道を見上げた後、俯いた。これからは新しい生活に専念するんだ。みんなに心配をかけちゃいけない。あの事はしばらく思い出さないようにしないと。紅い鬼のことも忘れないと。

目を閉じて、そう自分に言い聞かせた。

「ねえ紗枝」

俯いているわたしに、お姉ちゃんは山道の上を指した。

「拓兄いが来るまで時間があるからさ、上に行ってみない？ どうせしばらく帰ってこないんだろっし、上から町を眺めようよ！」

新しいお社がある場所は、今はちよつとした広場になっていた。

前のように木々に囲まれているのではなく、お社の後ろには山の深緑が広がり、前には町が見渡せるように木々が伐採されていた。

おかげで陰鬱だったお社は、今はお年寄りや子供達の憩いの場になっており、お花見や紅葉の時期には人々が集まるようになった。

「そうだね。行こっか」

今まで何度も通っていた所にしばらく行けなくなるんだもの。それにまだ早朝の町の風景は見たことがない。

せつかなんだからと、わたしは頷いた。

「じゃあ上まで競争！」

「あ、待ってよお！」

駆けだしたお姉ちゃんの後を追って、わたしも木々に囲まれた山道を上り始めた。ゆるやかな坂道を駆けて、お社に続く階段を目指して走っていった。

二ノ怪

「あーもー疲れたあ」

後ろで最後の一段を上がりながら、お姉ちゃんが息苦しそうに叫んだ。

「お姉ちゃん体力無いんだから」

「十代の頃が懐かしいわあ」

お姉ちゃんには悪いけれど、たとえ十代に戻っても体力は今とそんなに変わらないと思う。まあそんなことは本人に言えるはずもないので、肩で息をしているお姉ちゃんにただ苦笑する。

「あーやっぱり清々しいわね、ここは」

「気持ち良いね」

二人して胸一杯に息を吸い込み伸びをする。少し朝早いからか、ちよつと肌寒いけれど不快感はない。新しく設置された柵の向こうに、町が柔らかな陽に照らされて輝いて見えた。

「お社もまだ綺麗ね。今度のはきちんと管理されているみたいね」

「お参りする人もいるみたいだから」

「前のはお参りするどころか、そこに行こうなんて思う人も滅多にいなかったしね」

以前のお社は朽ち果てていてどこもぼろぼろだった。台風でもくれば跡形もなく吹き飛ばされていてもおかしくはないだろう。

お姉ちゃんの隣に立ってお社を眺める。その後ろには土砂があつたなんて信じられないくらい、静かに青々とした緑が整列している。その奥には友達とさらわれた場所。今はない朽ちたお社があつた場所。

次々と嫌な記憶が頭をもたげて心に広がろうとする。思い出したくないのに、一度蓋を開けると出てくる記憶の片鱗。

わたしが残つて他の子と帰るはずだった親友。けれども自らの意志で鬼となり、闇しかない世界に残ってしまった彼女。……みつちやんは今どうしているんだろう。

「紗枝、大丈夫？　顔色悪いわよ」

「え、ああうん。平気」

慌てて笑顔を浮かべ、頭の中に沸き上がった黒いものを払いのける。

いけない。さっき思い出すのはやめようって決めたばかりなのに。すっかりしなきゃ。

「せつかなんだしお祈りしよつと。紗枝もしたら？　もう当分来れないんだし」

「そうだね」

一緒にお社の前で両手を合わせ、目を閉じる。
次ここにくるのはいつになるのかな。大学生活もどんなふうになるんだろう。勉強してバイトして、友達も作って。出来れば幸せな

恋愛もしたりして、楽しい生活を送れるようにれば良いな。

不安と期待が交差するなか新しい生活に思いを馳せた。と、そこへ春風とは違う湿った空気が頬を撫で髪が舞い上がった。ひやりとする重い風。

この感覚はどこかで……

——鈴音

目を見開く。心臓を驚掴みにされたみたいに、胸が詰まった。なに、今の。

はっと息を飲んだわたしに、横にいたお姉ちゃんが不思議そうに眉を寄せた。

「どうかした？」

「今、何か聞こえなかった？」

不安を隠しながらも聞いてみる。お姉ちゃんがあたりをきよろきよる見回すが、すぐに肩をすくめて「別に」と言った。気のせいだったのかな。

嫌な汗がじわりと手の中に滲む。と、そこに山道の下からけたたましい車のクラクションが聞こえてきた。

「あ、来た来た。結構早く着いたみたいね。紗枝行こ！」

「うん」

何度も鳴るクラクション。拓お兄ちゃんにしては珍しい。多少イライラすることがあっても、こんなに鳴らすようなことしないのにふと違和感を感じて、お姉ちゃんの後を追おうとした足を止める。いくら車のクラクションが大きいからって、ここまで聞こえるものだろうか。

「はいはい。今行っちゃえば！」

バタバタ慌ただしくお姉ちゃんが階段を駆け降りる。

「待ってお姉ちゃん！」

嫌な予感がする。すでに階段を下りて見えなくなっただお姉ちゃんを呼び止めようと、階段に向かって足を動かした。

——鈴音！

突き刺さるような鋭い声。今度は確かに聞こえた声。わたしはその場に縫い止められた。驚愕し心臓が何度も激しく跳ね上がる。ゆっくりお社へと顔を向ける。お社の観音扉がカタカタと不気味な音を鳴らして小刻みに震えている。

うそ。うそよ。

そんなハズはないわ。

きびすを返し帰ろうとした。が、すでに道はなかった。いつの間にか木々が立ちはだかり不穏にざわめいていて、階段も見渡せた町並みも無かった。あるのは暗い森が広がるばかり。

「あれ、紗枝？ …… 紗枝？！」

遠くの方で自分の名前を呼ぶ声が聞こえる。でも肝心のお姉ちゃんの姿はどこにもない。どうなっているの？ すぐ近くにいますの？

「紗枝どこにいるの！」

「お姉ちゃん！」

声が辺りにこだまして響く。前後左右を見回すと空はかげり暗雲が立ちこめ暗闇が広がる。

嫌、嫌だ。早く戻らないと。でもどうやって？

「お姉えちゃんっ！」

いよいよ恐怖にかられた私は叫んだ。

なんとかしてここから抜け出さないと手遅れになる！ 泣き出しそんな気持ちを抑えるように胸の前で両手を強く結ぶ。早く逃げないと！ そう思ったときだった。

「鈴音」

後ろからかけられた声。昔聞いた紅い声。

嘘、でしょ。

震える体でおそろおそろ振り返ると、お社の扉が今にも開きそうな音を出し始めた。よくみれば先ほど見たばかりの新しいお社ではなく、朽ち果てて今にも崩れそうなお社。そう、あの捨てられたハズのお社だった。

「逃げるつもりカナ？」

余韻を残す低い声が木々の間を縫ってあちらこちらから聞こえてくる。後ろから聞こえたのかと思えば前から、右から聞こえたのかと思えば左から。

「ち、違う……」

頭をふって否定する。

「約束を忘れたの力」

「違う！」

叫びとともにあたりが真っ暗闇になる。顔面蒼白になりながら、駆け出すように後ろに後ずさる。どんどん遠くなるお社。転びそうになるほど勢いよく後退する。が、背中に何かをぶつけ硬直した。息を荒くするわたしの背後に布地を通してなお伝わる厚い筋肉質な感触。

「なにを怯えている？」

いつまで経っても固まっている私に、背後から声をかけられた。方向の分らないばやけたものではなく、直ぐ背後で声をかけられる。

まさか……本当に……

錆びたロボットの動きで振り返るわたし。ブレる視界を押さえながら、顔を声の聞こえた方へ向ける。ゆっくりゆっくり。

先に捉えたのは暗褐色の赤い裾。腕は懷に仕舞い込んでいるのか

見えず、さらに視線を上へ移動すると、白い襟元から鳶色の鎖骨が見えた。

だめ。これ以上は見たくない。

わたしはそれ以上顔を、瞳を動かさなかった。中途半端な角度のままで顎の位置を止める。

見たくない。あの瞳だけは。あの妖しい紅だけは。

「どうした？」

布が擦れる音が鳴る。揺らめく胸元。わたしは弾けるように後退したが、腕を掴まれ手元に引き寄せられる。

よろけた所で顎に指が添えられ、強制的に上を向かされた。

「あ……」

「もう少ししおらしくするかと、俺は思ったんだがナア」

おもいつきり目を見開く。記憶の底に押し込めていた鬼が目の前にいる。角も牙も肌も模様も、そして妖しい紅の瞳も、あの時のまま。

「久しいナア 鈴音え」

鬼の顔と膝がそれぞれ笑う。笑っていないのはわたしだけ。

「な、なんで……？」

信じられないと震える声で絞りだす。

「お前を迎えにきたのさ」

「どうして？」

鬼は強く引き寄せてわたしの顎を掴み、顔を近づける。

「どうしてかって？ 俺から離れようとしたからだ」

「離れるって何を言っているの？ そもそも世界が違っじゃない！
私がこの世界のどこでいようと同じことでしょう？」

意味も無く強がってみせる。うまく呂律の回らない舌が口の中で
踊る。

「ならここを離れる事に対して何も思わなかったか？ 常闇を、俺
を忘れようとしたんじゃないの力？」

凶星だった。過去とは決別して新しい生活をスタートさせ、今ま
さに歩きだそうと決意したばかりだ。

「まあそれは無駄なコトなんだが……。お前のしようとした事は許
せんす。もう少し様子を見ても良いと思っていたが。今ここで連れ
去ってやるう」

「やめて……」

「怯えた顔が艶っぽくなっただじゃナイカ、鈴音」

「誰かつ、誰か助け——」

顎をつかむ鬼の手を払ってありったけの声で叫ぶ。そんなわたしの腰に鬼は腕を回し、熱い大きな手が口元を覆い尽くす。

「そう怖がるナ」

暴れるわたしにひっそり声を潜めて、耳元でささやく。

「これからたつぷり味わってヤルからナ」

背筋に悪寒が突き抜ける。眉間のあたりが冷え冷えして頭の芯が凍る。

紅い鬼に引きずられるようにお社の前まで連れて行かれると、扉が暗い口を開いた。そこから黒い霧が漂って溢れている。

嫌だ。戻りたくない。もうあそこには行きたくない！ 体をよじらせ両手で熱い鳶色の腕をはがそうともがくが、石のようにびくともしない。

誰か助けて！ 助けて！

わたしの心の叫びも空しく、漏れた闇が二人を包み込み中へと招き入れた。

あの朝の来ない、闇しかない場所へ再びわたしは連れ戻されたのだ。

三ノ怪

抵抗し尽くしてもう暴れる力がない。大人しくなつたわたしの口から鬼の手が外される。酸欠状態の頭はクラクラしてそのせいで視界が回り、手や足は力尽きて重く感じる。

なんて頑丈な身体なの。かなり強く叩いたりしたのに、紅い鬼は全く動じなかった。むしろそれをニヤニヤ笑って見ていたぐらいだ。

疲れきつたわたしを小脇に抱えたまま、紅い鬼は薄暗い廊下を歩いていく。明るいところから暗い場所にきたせいで、まだ目が慣れず物がはつきり見えない。どこに連れていく気なんだろう。

やがてどこかの部屋に行き着いたようだ。畳の上に降ろされ、うつすらと浮かび上がる四角い編み目に囲まれる。

もしかしてここは座敷牢？ 辺りを見回すが、部屋の端に小さな蠟燭の灯があるだけでよく見えない。

——カタン。

木と木がぶつかるような音が響き、慌ててそちらへ顔を上げる。いくつかの小窓のような四角い編み目の向こうに紅い鬼の姿があった。

もしかして、わたし閉じこめられたの？

「出し、てっ」

叫びっぱなしだったせいで声がおかしい。三回ほど深呼吸をしてから、もう一度「出して」と格子の向こうにいる鬼に訴えた。

「良いかあつ鈴音！」

鬼の怒声に肩と心臓がそれぞれ跳ねる。射殺さんばかりの紅に疲労感まで吹き飛び、全身が髪の毛が逆立った気がした。怯えて小さくなるわたしを見下ろして鬼は唸る。

「俺が一人逃がし損ねたから譲歩してお前を一時的に戻したんだ。だが三人を確実に返した事をお前、忘れていないだろうナア？」

「三人……」

あの時の、一緒に捕まった同級生達。中学の文化祭の日、たまたま一緒だった三人。たしか男子二人に他のクラスの女の子が一人。彼らは先に元の世界に無事に戻り、私たちを捜していた大人達に発見された。みんな鬼のことなど話さず、まるで忘れてしまったかのように普段の生活に戻っていた。

彼らとは前から特別仲が良いというわけではなく、他のクラスの女の子は尚更。三年生になってからクラスもバラバラになり、卒業してから接点すらなくなった。今では三人がどうしているのかさえ分からないでいる。

「あいつ等も美味そうに育ったナア」

鬼の言葉にはっとして顔を上げる。

紅い舌をちらつかせながら、顎に手を当ててニヤリ笑い

「一人は丸々太ってウマそうだ。もう一人は鬼にして配下にするのも良いナア。女はちよ〜ど、食べ頃ダ」

さーっと顔色が青ざめるのが自分でも分かった。鬼は三人をどう

しようと言っの？ まさかまた連れ去る気？

震え上がっているわたしに細い紅を向け、猫のように舌なめずりする。そしてさらに目を線のように細めると

「お前がまだ帰りたいだの言っのなら、契約を白紙にしてあの時の三人キツチリ奪うマデ」

低い、威圧感のある声でわたしに言った。

俯いて顔を強ばらせる。じわりと汗が額に浮き出る。

みんなそれぞれ今はどうしているのかは知らないけれど、わたしが紅い鬼を拒めば否応なくここに連れてこられるんだ。そしてそれからヒドい目に遭わされるんだわ。

震える手で額の汗を拭い、そのまま顔半分を覆う。そうしたところで何かが変わることはないのだけれど、わたしはその姿勢のまま固まった。

どうしよっ……

どうしたらいいの……

どれくらいの時間そのままにしていたのか、紅い鬼はウンともスンとも言わなくなっただわたしを鼻で笑い、この場から出ていこうときびすを返した。

だめ。行かせちゃいけない！ わたしはぎゅっと口を結び、手を伸ばした。

「……待ってください」

「なんだ？」

格子の間を通して自分の裾を掴んでいるわたしに、鬼が目だけをよこす。

「ごめんなさい。言うとおりにします。だから、そんなことしないで……」

裾を握りしめて、嗚咽をこらえながら「お願いです」と付け足した。

ぼとり。俯くと足下に水滴が落ちた。

鬼は口端をつり上げて笑むと、自らの裾を掴んでいるわたしの手首を優しくとった。冷えきった肌に熱い指が被される。

「お前がいゝ子にしているんなら、何もしやしないカナ」

手首から顔へ紅い指をやり、頬を伝う涙を拭った。

「お前の名を今から完全に俺が奪う。ナニ心配するな。記憶もキチンと消してヤルからナ」

「わたしじゃなくなる、の？」

紅い鬼はわたしの冷えた頬を片手で包み、親指で目元を撫でた。揺らめく紅の瞳が自分の目線に合わされる。

「お前は鈴音に戻るだけカナ」

わたしがパチパチと瞳を瞬くたびに涙が小さくはねる。乾いた唇を開け閉めしたあと、小さく頷いた。

「名前をとる前にお願いがあるんです」

「どうして欲しいンダ？」

苛立たしげに鬼は言った。わたしは気押されつつも鬼に向き直る。

「家族や友達から、わたしの記憶を抜き取ってください」

「うん？」

意味が分からんと鬼は首を傾げる。

わたしは気持ちを落ち着かせるため、深く息を吸ってからまた鬼を見上げた。

「家族や友達は以前私がいなくなったときに、とても心配してくれました。母はやつれるぐらいに」

俯いた後、もう一度鬼に視線を戻し両手を結ぶ。

「だからみんなの記憶からわたしを消してください。わたしの存在をなくして下さい。それが難しいなら、わたしが何かの理由で死んだことにして下さい。お願いします」

行方不明となれば、みんなはわたしを何年も探し続けるかもしれない。それなら死んでしまった方がみんなも諦めがつくだろう。

とても悲しいけれど、忘れられるのは寂しいけれど仕方がない。みんなをまた苦しめるわけにはいかないもの。わたしは願いが聞き入れることを祈って、鬼へ深く頭を下げた。

「ふむ」

上から呟く鬼。相手の反応が気になり、ちらり見上げた。鬼は顎に手を当ててしばらく考えと何か思いついたのか。残忍に、けれども面白そうに口を歪ませた。

「そうだなア。ただ奪うのもつまらんしナア」

不安げに見つめるわたしを一瞥すると、形の良い指でわたしの顎をあげた。

「今ならお前の記憶を奪うのは造作もナイ。それにあちらでお前を待つ者がいなくなればお前は完全に帰る道を失う」

そつと顎から指をはなし、腕を組んだ。

「そうだな、お前さんの記憶を奪うのはやめておこう」

「契約……しないんですか？」

よかった。ほっと胸をなで下ろそうとするわたしだったが、そんなわたしに鬼はぐいつと顔を近づける。

「ただし名は貰うぞ」

反応するより早く、真正面にきた妖しい紅が煌めく。途端に津波のような恍惚に飲み込まれ、よろけて膝を突いた。

「う……」

以前よりも強く、今まで経験したこともない甘い霧に包まれる。

じんと頭の奥まで霧が立ちこめ、痺れてなにも考えられない。ぼんやりとしてなんだか気持ちがいい。骨までとろけるってこんな感じなのかな。

こんな感覚が永遠に続くのかしら。でもそれでも良いと、甘い波に飲まれながらぼんやり思った。

不意に湯船から上がった時と同じ感覚を覚えた頃、ようやく正気が戻ってくる。重い脱力感と喪失感。痺れる身体。

どうしたんだろう、わたし。軽い記憶障害を起こしながら少しの間惚けていると、自分が立っていない事に気がついた。そして自分が鬼にもたれ掛かっているのに気がつき驚愕する。

「あっ！」

「どうだ？」

「……え？」

飛び離れたわたしに鬼が探るように問いかけた。
どう、って？

「名前は分かるか？」

名前？ なにを言っているの？

一瞬意味が分からないわたしだったが、ややあってからようやく理解し、混乱しながらも未だにふらふらする頭で応えようと口を開く。

名前でしょ、自分の名前。分からないわけないのに。

当然のように答えを言おうとしたのだが……。

「なんで……？」

待って。落ち着いて。きっとボケたんだわ。

だって自分の名前なのよ。ついさっきまで呼ばれていたんだから。

「……」

ごくりと生唾を飲み込み、横顔に汗が伝う。

「どうカナ？」

「うそ、嘘でしょ」

わたし、なんで、自分の名前が分からないの？

鈴音という名前は分かる。でもお母さんが、お姉ちゃんが、みんなが呼んでいたわたしの名前が分からない。なんで！？

「よしっ。これで良いだろう」

わたしの狼狽ぶりをみて鬼が満足そうに頷く。

「何をしたんですか？」

勢い良く顔をあげて、怖さも忘れて鬼に問いかける。

「何って、お前の名を奪ったんだ。他の奴らに横取りされないようにナ。記憶はそのままだろう？」

「名前を奪った？ 名前だけ？」

「ああそうだ。簡単に手に入れてはつまらんからナ。記憶は奪わずに徐々に徐々に落とした方が面白い。それに――」

わたしの首を軽く掴み、鋭い八重歯を見せつけた。

「怯えたお前がみれなくなるのは惜しい」

舐めるような鬼の視線。

「これからが楽しみだな鈴音え」

そう言つて妖しい紅を不気味に煌めかせた。

前は見せたことがない熱を含んだ眼差し。いたぶるような眼光。昔向けられなかったものを鬼は今、わたしにまっすぐ向けている。

その意味をわたしは分かっていた。紅い鬼の目から逃げるように視線を背けて身体を強ばらせる。

これからどうなるんだろう。なにをされるんだろう。うっん。そんなこと分かりたくもない。

結局鬼の視線の意味を理解出来たところで、もう震えることしかわたしには出来ない。何一つ抵う術なんて持っていないのだから。

四ノ怪

壁にゆらゆら揺れる影。薄暗かった部屋は赤々と照らされ、隅々までよく見えるぐらい明るかった。

部屋の中央には燃える鬼火。わたしは目の前で燃える衣服を前にして、紅い鬼に押さえつけられていた。

「なんてことをするの！」

鬼火の中で次第に小さくなる服。引越しの為にパーカーとジーンズという汚れても良い服だったけれど、今のわたしにとっては大事な物。元の世界との唯一の繋がり。それが今、目の前で燃え上がっている。

こんな事になるなら、片時も離さなければ良かった！

鬼が着替えると薄着の着物をわたしに寄越してきた。大人しく従い、着替え終わったところを紅い鬼にわたしの着ていた服を取り上げられ、止める間もなく燃やされたのだ。

「もう用はないダロウ？」

服は丸められた紙屑ほど小さくなり塵も残さずに燃え尽きていく。ひどい……。あんまりだわ。呆然と服と共に消えた鬼火があった場所を見つめた。放心状態のわたしに鬼は笑いかけてくる。

「お前の望み通りあちらでお前を知る者はもういない。着ていた服ももつない。鈴音、お前は二度と俺から逃げられないカナ」

[illegible]

真つ暗な部屋に真つ白な和鳥籠。昔わたしを入れていた白い鳥籠。紅い鬼同様、その骨のような格子は今も変わっていない。わたしは
その中で身体を震わせていた。

鬼がわたしを見る目。獲物を見るような瞳だった。昔はともかく、今ならその視線の意味が分かる。だからこそ怖い。

どうしたら良いんだろう。先ほどからため息が止まらない。もう家には帰れない。この世界の住人になるしか道はないんだろう。それでも鬼に遊ばれて死ぬのは嫌だ。

「憂いているのかナ？」

格子の外から声をかけられる。ぎくりとして振り返ると、黒地に紅葉が映える長襦袢を掛けた鬼が格子の向こうに立っていた。

「着るものならいくらでも俺が与えてヤル。そつ氣落ちすることないカナ」

着る物がなくなつたからわたしが落ち込んでいるの？ 本気で？ もしそうだとしたら、わたしには鬼の神経が理解できそうもないわ。

震える手を膝の上で握りあわせそこに視線を落とした。落ち着か

ない指が何度もお互いを絡ませている。

竹がしなる音が鳴り、鬼が格子の中へ入ってくる。ゆれる紅葉に思わず身構えた。紅い鬼はそれを見て、クツと八重歯を覗かせた。

「そんなふうには焦らされたら、喰いたくなるナア」

「焦らしてなんて……してないです」

面白そうに眺めてくる鬼に何とか声を絞り出して言い返す。ここで怯んだらだめだ。

折れかけている心を奮い立たせるが、やはり心許ない。いくら強がろうとしてもわたしの恐怖心は黙ってくれない。なかなか震えの止まらない自分の体に苛立ち、下唇を噛む。

「そーかあ。しかしお前はどんな味がするんだろうナア」。さて、試してみようカナ」

「え……」

不穏な気配に思わず立ち上がる。鬼はにやにや笑ってゆつたりとこちらへ歩んでくる。

いや……来ないで……。

肩に力が入り、無意識に着物の襟を握りしめる。あたりを見回すがすぐに無駄だと思い知った。

逃げるにしてもどこにも逃げ場なんてない。この籠から、この世界から、わたしに逃げ道なんてないんだ。

鬼が腕組みをとく。

少しでも離れようとしたわたしの顎を素早く掴みあげ、露わになった首筋に紅い舌をずるりと這わせた。

「いやっ」

一瞬にして背筋が凍り、鳥肌が立つ。
嫌だっ。気持ち悪いっ。

たまらなくなり、手で鬼の胸を押すがすぐに押し返される。背中に鬼の手が添えられそのまま格子の壁に押しつけられる。

「やめてっ」

「ほう鈴音。ずいぶんイイ声で鳴くようになったじゃナイカ」

見下され、鼻で笑われる。喜々として細められた紅が残虐性を帯びて不気味に光った。鋭い牙が覗く端正な唇が、肌に触れるか触れないかのところを口から胸元にかけてゆっくりなぞられる。

鎖骨に鬼の髪が触れる。吐息がかかる。鬼の勿体ぶった行為にますます恐怖心を煽られ、息をするのもつかの間忘れてしまう。

怖いつ。誰か助けて。

そんなことを思いながら、知らず知らずのうちに紅葉の胸元を恐怖から握りしめた。

「お前にはもう俺しかいない。抗うだけ無駄カナ」

自分の心に答えるように、わざわざ耳元にそつと唇を近づけて低く囁いた。舌で耳の輪郭をなぞり、そのまま甘噛みしてくる。

「お願いだからやめてっ」

以前紅い鬼はわたしにこんなことはしなかった。少なくともそういう目で見えていなかった。でも今は完全に自分の欲望をぶつける対象とすることは明らかだ。

「俺を忘れようとしたことを後悔したか？」

鬼が背中に回した手でわたしの腰を掴み、乱暴に横へ引く。

「だがもう遅い」

畳の上に投げ出されたわたしにまたがり、紅い鬼が首筋をむさぼった。鬼の真つ赤な舌が這い回るたびに背筋がぞわりとする。

「いやっ離して」

鬼の身体をしつこく押し返すが意味はない。ただ紅葉の着物が乱れるだけだった。

「喜べよ鈴音。また俺に飼われるんだからナァ」

顎を掴まれて強制的に視線を合わされば、深い三日月が牙を覗かせて笑っていた。

震えるわたしに紅い鬼は肌着の中までは触れようとしなない。でもそれはより自分が楽しむためなのだろう。ただ身体を肌着の上からまさぐり、露わになった肌にひたすら舌を這わしてくる。

わたしは目を閉じて、ひたすら泣き叫んだ。

.....

「飼われている実感が湧いてきた力ナ？」

どれくらい時間が経ったか分からない。気がついたら、わたしはただぎゅっと両目を閉じて自身の襟を掴み続けていた。鬼はわたしから身体を離し、自分が羽織っていた長襦袢をわたしに投げた。感触の良い布地が自分に覆い被さる。

「楽になりたかったらいつでも言えよ鈴音。記憶を消してやるからナ。そうしたら思う存分恍惚に浸らせてやろう」

身体の線に沿って鬼が芋虫のように身体を丸めているわたしを撫でる。その間もわたしは身体に力を入れ続けた。もうなにも考えられず、そうしているのがやっとだった。

「さあて。これからお前が帰ってきた祝いでもする力ア」

そう言つて勢いよく立ち上がり、うんと伸びをした。鬼が首を回したようで小気味良い音が聞こえてくる。

わたしはそつと目を開いた。薄暗い壁に紅い鬼の影が映る。

「鈴音。準備が整い次第迎えに来てヤルから、その間大人しく待つておけよ」

壁の影が屈むように動く。すると頭に大きな手が置かれ、くしゃくしゃ髪を撫で回された。わたしはそれを振り払う気が起こらず、

呆然とされるがまま影を見続けた。

「じゃあナ鈴音。楽しみにしていれば良いかな」

畳を踏む音が遠くなる。格子のしなる音が聞こえ、わたしの意識も静かに遠のいていった。

[illegible]

籠の中。鬼が去った後にいるのは肌着姿の自分。このままではいつか鬼に全て奪われ、いつしか自我を忘れて自分も物の怪になってしまうだろう。

鬼は怖い。でも鬼に従うのはイヤだ。鬼の仲間になるのはもつとイヤだ。

あの紅い鬼の言う通り助けはこない。自分を守るのは自分だけ。……元々覚悟していたはずだった。いつかは鬼が連れ戻しにくるんだとついこの間まで信じていたんだから。それが緩んだところを連れ去られただけのことなのに。

じわりと目尻に涙が溢れる。未だに震える指でそれを拭うと、いくつもの言葉で自分を奮い立たせ、しっかりと聞きせよと言いかせる。

畳の上に力なく置かれた自分の青白い手。それを弱音や絶望を握りつぶすかのようにぐっと握りしめた。

きつと何か良い方法が必ずあるはずだわ。絶望するのはまだ早い。

よく考えれば何かあるはず。

あるはずよ……。

五ノ怪

深く息を吐けば、少し気持ちも落ち着いてきた。冷たい指先をさすりながら閉じていた瞼を開く。

相変わらず疲労感はまだ残っているけれど、震えはやっと収まった。ちらり籠の入り口を確認するが鬼の姿はない。まだ迎えには来ないようで、少しだけ緊張が解ける。

そういえばお祝いがどうのって言っていたけれど、具体的に何をするのか気になる。……儀式的なものじゃなければ良いけれど。

薄着のせいか寒い。腕をさすろうとしたが、先ほどまさぐられた感触が蘇って身震いする。

わたし、どうなるんだろう。

あの紅い鬼からは逃げられない。でも何か考えなきゃ。じゃないと……

ああ、だめ！ 弱気になっちゃいけないわ！ また不安に押しつぶされそうになる自分を叱咤し、首をぶんぶん左右に振る。

大丈夫。必ず良い案が浮かぶはずだわ。それに食べられたり、殺されなかっただけマシだと思わないと。

……でも。

それでもあんなことは二度とごめんだわ。

本当にもうだめかと思った。とても怖かった。

目頭が熱くなるのを我慢して大きく息を吸い込み、天井を仰いだ。

初めて来たときはわたし、どうしていただっけ。こうして泣き
 そうな気持ちを押さえつけて、強がっていたんだっただかな。

わたしはこれから紅い鬼と、この世界と、どうやって付き合っていけばいいんだろう。考えるだけ考えても無駄なのかな。流されるしか方法はないのかな。

結局わたしはなにも思い浮かぶことなく、ただ籠の中で溜息ばかり吐いていた。

[illegible]

空氣が動いた氣配がすると、紅い鬼が籠の入り口を開けこちらを覗き込む。闇に浮かび上がる紅に、わたしは怯えた表情をしまい込み背筋を伸ばした。毅然としないと。

しかしその気持ちとは裏腹に、両の手が震えだす。わたしはそれを隠すように握り合わせ、顔を上げた。

意外そうに、けれども笑みながらわたしの前に紅い鬼が立った。

「泣いていても仕方ないですから」

澄まして答えるも、内心声が震えないよう堪えていた。今度こそ冷静でないと。でなければわたしが怖がれば怖がるほど、紅い鬼のペースに持つて行かれてしまう。

「それはつまらんナア」

隣に乱暴に腰掛け、わたしの肩を抱き寄せる。びくつと肩が跳ねるがすぐに平静を装った。怯んじやだめよ、わたしっ。

紅の瞳がまた舐めるように見つめてくる。そんな気色悪い目で見ないでほしい。居心地が悪くて距離をとろうと正座していた足を崩すが、鬼はそれでも肩を離さない。

まさかこのままさっきの続きなんてことは、ない……よね？ それはずがにマズいわ。

「鬼さん。お酒は飲まれないんですか？」

とつさに鬼が酒好きだと言うことを思い出し、話題を振ってみる。このまま黙っていてもいい方向にいきそうもない。

お願いだから食いついて！ と心の中で両手をきつく結ぶ。

「酒……かぁ」

紅い鬼が一瞬、わたしを視線から外した。わたしは希望の糸口がみえた気がして、すかさず紅い鬼に口を開いた。

「お酌しますから、飲みませんか？ お酒」

「ほお、鈴音。ずいぶん可愛いことをいうようになったナア。それじゃあ酌をしてもらおうか」

ぺろりと紅い舌が鋭い牙の間を縫って出る。鬼は立ち上がり、わたしの腕をとって立つよう促した。そして足下の長襦袢を拾い上げてわたしの肩に羽織らせる。

とりあえず今は喰われる心配はないみたい。

鬼に促されるまま大人しく従い、籠の出入り口に向かつて歩きながら、鬼に見えないようこっそり安堵の息を吐いた。

[illegible]

なにこれ……。

だだっ広い大広間。きらびやかな襖に囲まれたその場所で、派手な着物を着込んだ魑魅魍魎が和楽器を奏で、料理を運ぶ。畳の上に直に置かれているお皿には、極彩色の料理。それが部下と思われる妖怪たちの前に整列している。

こんなに大人数の妖怪が揃っているなんて聞いてない……。

現実味があまりにもない光景に立ち尽くす。

こんなところでお酌なんてしたくない。生きて帰れそうにないわ。ううん、それ以前に今現在でさえ生きた心地がしない。

久しぶりに見た妖怪たちで完全に後込みしているわたしの腕を、
紅い鬼がぐいぐい引つ張って大広間に入っていく。騒いでいた妖怪
たちが紅い鬼の姿を確認すると、手について頭を下げた。ちょうど
時代劇でお殿様が御成になるシーンと重なる。

まさか生の殿様サイドでこの場面を見ることになるなんて思わな
かったわ。呑気にもそんなことを心中呟いてしまう自分に呆れた。
もしかしたらこの場で自分がこの宴のメインディッシュにされてし
まうかもしれないのに、何を考えているんだろう。

紅い鬼は一段上に置かれた肘掛けに座ると、呆氣にとられている
わたしを乱暴に横へ座らせた。おかげで盛大に尻餅をつく。……お
尻が痛い。

「さてお前等。今日はめでたい。俺の飼っていた雀が戻ってきた」

鬼が自慢げに言ってわたしの頭をぼんぼん叩く。

ちよつと痛いっ！ 嫌がろうとしたわたしだったが、たくさんの
魑魅魍魎の視線が一気に集まり、瞬時に固まる。一つ目二つ目三つ
目と、様々な数の目玉がそれぞれ不気味に光ってわたしを凝視する。
ただでさえ薄着の着物の上に、鬼の長襦袢を羽織っているだけの無
防備な格好。恐怖に恥ずかしさも合わさって俯いた。

「今宵は無礼講。好きなだけ騒げ！」

紅い鬼の声を合図に、妖怪たちが歓声を上げて立ち上がる。あつ
と言う間に広間が騒々しくなった。各々手にお酒を持ち、食事をか
き込み始める。和楽器の演奏者も軽快な音色を奏で始めた。

わたしは落ち着かないでいながらも、一部の妖怪たちが騒いでい

るのを目にして渋い顔をした。すでに右側の子鬼と狸は箸で皿をこ
れでもかというぐらい叩いて、奥から二番目の河童と一つ目坊が座
布団を投げあっている。無礼講にしても最初っから羽目を外すのは
どうかと思う。なんて光景なんだろう。

「おい鈴音」

「え……ひゃっ」

頬に冷えたものが押しつけられ、飛び上がる。真横を見れば鬼が
わたしにキンキンに冷えた酒瓶を突きつけていた。

「酌。してくれるんだロウ？」

鬼を見、酒を見て受け取る。すごく冷たい。手がかじかみそう。
指先が冷えきる前にお酌をしまおうと、鬼の持つ盃に酒を注
いだ。紅い鬼は満足そうに満ちた酒を眺め、ぐいっと飲み干す。鳶
色の喉が動くと盃が鬼の唇から離れた。

「ああ〜うまい酒ダナア」

堪らんと唸り、口端に付いた水滴を舐めあげる。真っ赤な舌が不
思議な模様に覆われた横顔をなぞった。

なんでだろう。

気味の悪い舌。嫌いな紅い鬼の顔。なのに妖艶にみえる横顔。形
のよい眉に唇。無骨だけれども整った輪郭。

これも妖術かなにかのせいなのかしら。それとも早くもこの世界
の妖気にあてられたのかしら。紅い鬼を美しいと感じるだなんて。

不安に似た感情が沸き起こり、長襦袢を胸元に寄せる。

わたしは大丈夫なのかしら。まだ正常な感覚を持っているのかしら。そう思いながら騒ぐ妖怪たちを眺め続けた。

宴が始まってから幾らか時間が過ぎると、目の前の光景は更にすごい状態へと変わっていった。紅い鬼のお酌をしつつも、大広間で酔い騒ぐ妖怪たちにわたしは何度も口を開けては閉めてを繰り返す。

なんというか。荒れ果てたというか。

歌を歌って騒ぐ妖怪もいれば箸で皿を回したり、手掴みで料理を食べたり、そこで寝ている妖怪もいる。徳利や瓶がそこかしこに倒れて綺麗に盛られていた料理は見る影もない。

うーん。本当に滅茶苦茶だわ。テレビでサラリーマンの年末特集でこんな画をみたことあるけれど、ここまでひどい光景だったかな。無礼講にしたって限度があるでしょうに。

呆れながら眺めていたわたしの目の前に、お酒の入った盃が差し出される。

「鈴音、お前も飲め」

「えっ」

お酒を飲め？ いきなりの要求に慌てて首を左右に振って断る。

「いえ、私は飲めません。まだお酒を飲める歳ではないので無理で

す」

「ここではそんな屁理屈は通用せんゾ。飲め」

顎を掴んで無理矢理口に盃を押し当てる。

お酒のきつい香りが鼻をつき、やめてと言おうとした口に液体が流れ込んできた。少量にも関わらず、口の中が燃えるように熱くなり思わず咳き込む。

「もう、やめて下さいっ」

「鈴音は酒が弱いナァ」

もしかしてこのお酒強い？　すごく……頭がくらくらするわ。おまけに目も回る。

一口にも満たない量なのに手先まで赤く染まった。お酒が強いのか、わたしがお酒に弱いのか。目元と顔が熱くなったのを感じ、揺れる意識を必死で支える。

「ナンダ。もう酔ったの力？」

肩を抱き寄せられ、頭に鬼の胸が添えられる。反応が鈍ってはいるが、わたしだって自分の状況がどうなっているくらいは分かる。コントロールのきかない腕で精一杯鬼の胸を押して体を反らした。するりと鬼から体が離れる。

「よしてください……」

熱い指の感触が気持ち悪い。ぼやけた口調で紅い鬼に呟く。
鬼はわたしにお酒を飲ませる際に手にこぼれた滴を舐めとり、ふ

らふらになつてゐるわたしをしばらく眺めていた。

なんでそんなに見るんだろう。酔つてゐる人間が珍しいのかしら。なににしたつて決まりが悪い。……そして気持ち悪い。よ、横になりたい。

わたしが限界に達するのも秒読みになつたとき、おもむろに紅い鬼は立ち上がると何度か手を叩いて声を上げた。

「よし。宴はここまでカナ。さつさと散れ。酒は置いてけよ」

しつしと猫でも払うように手を動かす。妖怪たちは鬼の勝手な解散命令に文句も言わず、どこか調子外れな返事をするとか各自帰り支度を始めた。あちらこちらから寝ている妖怪を起こす声が飛び交う。

「お開きですか？」

それなら少し横になりたい。できればお水も飲みたい。

傍らに立つ紅い鬼を見上げて、わたしは重くなりつつある臉を擦った。

「ああ。そうダ」

すぐ目の前に紅い鬼が立つたみたいで遅い足の甲が視界に現れる。それをぼんやり眺めていたら、身体が急に浮き上がった。

え、な、なに？

自分が浮いたのか落ちたのか一瞬ワケが分からなくなるが、鬼の大きな背を見下ろす格好になつたので、自分が鬼に担がれたのだとようやく気づく。

「鬼さん……」

痺れる唇を動かすけれど言葉が続かない。なにを言おうとしたのか、忘れてしまったのだ。

だめ……起きなきゃ。

でも、眠い。すごく眠い。お水が飲みたい……。

初めてのお酒に完全に飲まれてしまったわたしは、そのままなにも言わず暴れず、大人しく鬼に担がれたまま大広間を後にした。

六ノ怪

まるでメリーゴーランドにでも乗っている感覚だわ。うーん、ふわふわするし、くるくる視界が回って見える。

下に流れていた木目調が消えた途端、ふっと急降下した気がして胸からお腹にかけて冷えたものが走った。そして頭がひんやりとした心地良い感触に包まれる。

なんだろうこれ。

うつ伏せになってその何かを掴む。四角いけど角っこが丸い。やや固めだけれども嫌な感じはしない。ああ、そっか。これは枕だわ。自分が布団か何かに横たえられたんだ。

火照った顔に冷たい枕が気持ち良い。無意識に枕を抱き寄せて顔を埋める。すぐく落ち着くわ。

ふと喉が鳴った。

そうだ。わたしお水が欲しかったんだ。お水が欲しい。

喉が渴いていたことを思い出し、枕から顔を上げる。そして——固まった。

えっと、ここはどこ？

鮮やかな暖簾に囲まれた小さな部屋。枕元に淡い明かりのついたボンボリ。いつの間にか羽を広げた蝶のように掛けられた紅葉の長襦袢。そして広い真っ白な布団に、錦糸で刺繍された掛け布団。わたしはその上に横になっていたのだ。

……もしかしてここは紅い鬼の寝室？ 鬼はどこ？

雲がかった意識で、未だに揺れている感覚が抜けない体を起こす。高い天井から水墨画と思われる絵が、派手な暖簾の上に被されている。これは鬼の趣味かしら。

見上げていた暖簾の一つがめくられ紅い手が覗いた。そこには小さなお椀が手のひらに置かれている。

「気分はどうカナ」

鬼は笑みながらわたしを見下ろして、手に持っていたお椀を差し出した。中を覗くと透き通った水。わざわざ持ってきてくれたのかしら。なんだか意外。

わたしは突き出されたお椀を怖ず怖ず受け取り、水を少しずつ口に含んだ。冷たい。渴いた喉に水が通る度、火照りも消えていく。まだ少し酔いが残っているけれど、ずいぶん良くなったわ。大きく息を吐くと、肩の力も抜けた。

「お前に酒の良さは、まだ分からないみたいだなア」

紅い鬼が横に腰掛けると、厚みのある布団が揺れて振動がわたしに伝わる。ぼうつと皺ができた布団を眺めてお椀を持ち直す。

お水のお礼、一応言った方がいいよね。

「あの……ありがとうございます。お水」

お椀を差し出して、笑い掛けた。

お礼を言うときは笑顔で。おばあちゃんからの教えだったんだけど、それがすっかり癖になってしまつて紅い鬼にまで笑つてしま

った。

苦笑いするわたしに、紅い鬼はほんの僅かに目を見開くが、手の甲でわたしの頬を撫で「ああ」と笑った。

……別に頬は触る必要ないんじゃないの？ 眉を寄せながらそつと鬼の手から顔を離れた。

ん？ あれ。ちょっと待って。

はたと気づいて部屋をきよろきよろ見回す。

布団の上にわたし。横に紅い鬼。そして二人つきり。

……。
……。

もしかしくなくても、かなり、まずい状況？

真っ赤だった顔はあつという間に青ざめた。すつくと立ち上がる。すでに酔いは完全に醒めていたけれど、緊張からか足下がふらついていた。気持ちよかったはずの布団は、今や鬼に用意された食べ物を乗せる皿にしか思えない。この場から逃げないと。一刻も早く脱出しないと。

「どうした鈴音」

はうつと変な声を出してしまう。歩きだそうとしたわたしの手首をがしり掴まれたのだ。同時に心臓も掴まれたような錯覚が起き、息苦しくなる。

「あ……いえ……。少し気分が悪いので、籠に戻ります」

硬直したまま口だけ動かす。緊張のあまりうわずった声が出る。

と、とにかく早くここから出ていかないと。
じゃないと……じゃないと……

嫌な想像にごくつと喉が鳴る。

「そうツレなくするな」

掴まれていた手首が後ろに引かれる。受け身をとる間もなく、わたしは大きく背中から鬼のほうへ倒れ込んだ。持っていたお椀は宙を舞って、乾いた音を立てながら隅に転がっていった。

紅い鬼は倒れてきたわたしをたやすく受け止め、胸の下に逞しい腕をするりと這わせた。まるで大蛇にでも巻き付かれているみたいで、瞬時に肺が苦しくなる。

「離してください!」

「そう怖がることはナイ。可愛がつてやる」

なにそれ。冗談じゃないわ!

鳶色の腕を剥がそうともがくが例の如く意味はない。暴れるわたしを、紅い鬼は耳の後ろから首筋まで舌を這わせた。ずるり嫌な感触がまたわたしの髪と神経を逆撫でた。

「いやっ」

気持ち悪さとぞくつとする妙な感覚と嫌悪感。それらがわたしのなかでせめぎ合っている。頭を振って鬼の舌から逃れようとするがしつこく追いかけてくる。

「やめて！ 離して！」

「口を閉じる鈴音」

紅い鬼が片手を離し顔に向けて伸ばす。押さえ込まれる！ わたしは目にしたその手に、恐怖からおもいきり噛みついた。

「おっと。鈴音はじゃじゃ馬だナア」

なんで？ 神経が通っていないの？ 鬼の平気な口振りに動揺してしまう。

ますます青ざめるわたしをよそに、鬼が噛み付くわたしの口から手を引こうと身じろいだ。

今だわっ。

鬼の腕が緩んだところで素早く立ち上がり抜け出すと、すぐ後ろの暖簾をめくる。が、重くて動かない。

これは出口じゃないの？ 出口はどこ？ 暖簾に視線を走らせるがどれが出口なのか分からない。紅い鬼が入ってきた暖簾じゃないとだめってこと？ そうだとしたらあれが出入り口なの？ でも肝心の暖簾は鬼の背後にあって通れない。

「そう怖がるナ。少し落ち着け」

息を弾ませて取り乱しているわたしに、鬼はゆっくり立ち上がって口角をあげた。

「来い鈴音。快樂ってやつを教えてやろっ」

さあつと血の気が引く。暖簾ぎりぎりまで下がって鬼から逃げるが、狭い空間だからそんなに距離は開かない。

「いいですつ。知りたくないです」

何度も何度も、首を左右に振る。

食べられるのも殺されるのも嫌だけれど、だからといって遊ばれるなんて！ なけなしの意地で泣くのはだけは堪えるが、もう目から涙が零れそうになっている。

「なんで、どうしてです？ わたしには興味は無かったんじゃないですか？」

「あの時はお前を可愛がつてやれる暇がなかったからナァ……。それに、今のお前なら美味そうだ」

紅い舌がちらりと覗く。

それはどっちの意味でなんだろう。どちらにしろ食べられるなんて嫌。でも、もう後ろにはさがれない。どうしたらいいの。

「俺がわざわざ飼ってやってるんだ。悪いようにはしないサ。おいで鈴音」

残酷なまでに優しく微笑み、猫なで声でわたしに甘く囁く。紅い手が幽霊のようにヒラヒラ手招きした。

「絶対イヤですつ」

どうしよう。どうしよう！

鬼の目はいつになく妖しく光っている。このままだと本当に食い尽くされる。なにか、なにか良い逃げ道は……

「知らないからそう思うだけかな。さあ来いっ」

「待つて下さい鬼さん！」

手を伸ばして捕らえようとした鬼に両手を突き出して待つたをかける。すると伸ばされた手が、信じられないことに、わたしに触れる寸前で止まった。

よ、良かった。……じゃ、なくって何か言わないと。
興味深げに見つめる鬼。わたしが何を言うのかと、楽しそうに眺めている。

何か良い言い分けはないかしら。なにか、なにか。えっと……ああ、そうだ。もうこれでいこう！ わたしは半ばやけっぱちで思いついたことを言うことに決め、顎を引いた。

「鬼さん。私を飼っているって事は私をペット……だから、私たちが人間が猫や犬を飼うのと同じって事ですよね？」

ああーなに言ってるんだろう。もっと上手い切り出し方はなかったのか！ 言ったそばから後悔してしまう。

しかし鬼はわたしの予想を裏切って満足げに笑った。

「ああそうだな。俺はお前を飼っているんだからナ」

自慢げに腕を組む。よし。いけるかもしれない。わたしは意を決してまた口を開いた。

「ということは鬼さん。私は今、鬼さんがしようとしている事の対象では無いって事ですよね？」

「うん？」

ぴくつと鬼の眉が動く。笑みが消えて真顔になった鬼に背筋が寒くなる。も、もしかして怒ったのかな？ でもだからといって主張をやめるわけにはいかないわ。黙れと言われる前に早口で訴える。

「私はあくまで鬼さんに飼われるという契約をしただけであって、その、だから、えっと、ああいう行為をする関係を結んでいるわけじゃ、ない……ですよね」

自信がなくて語尾が下がってしまった。とても屁理屈にしか聞こえないけれど、一応屁理屈だって立派な理屈なはず。祈るように胸の前で両手を結んで、びくびくしながら下から見上げるように鬼の反応を伺った。

「……なるほどナア」

鬼はふむと顎に手をやるが、すぐニヤリ笑んで

「しかしお前は犬猫でなく人間で、俺は人間でなく鬼だがナ」

うつ。そうきたか。確かにその通りですけど……。

完全に言葉に詰まってしまっ返す言葉がない。ダラダラと滝のように灯や汗を流し押し黙ってしまった。

しばらく沈黙が続く。ほんの数秒だったかもしれないけれど、わたしにとっては数分にも感じた。

「……まあ良いカナ。お前の言いたいことは分かった。それもいいだろう」

え、本当に？

鬼の言葉が信じられなくて顔を上げる。

「本当に分かってくれたんですか？」

半信半疑の眼差しを向けるわたしに、鬼はニヤリ笑んで頷いた。
なんだかあっさり通ってしまっ、思わず拍子抜けしてしてしまう。

「だったらまた新たに契約するまでカナ」

「えっ？」

契約？！と、思わず素っ頓狂な声を上げた。正直に言っ、それはなるべくしたくなかった。前にこういった事をしてくるくなく目にあつたことがなかったからだ。きつと複雑な表情を浮かべているであろうわたしに、鬼は人差し指を立てて提案した。

「お前が帰りたいと言ったら、契約完了というのはどうだ？ 鈴音がそれを口にしなければ、俺は手を出さないと約束しようカナ」

帰りたいって言わなければいい。それなら大丈夫そうだけれど、なにか引つかかる。でもこの契約を蹴ったら、鬼に襲われてしまうだろうし。

うんうんわたしは思案した後、覚悟を決めて鬼に向き直った。

「わ、分かりました。契約します」

言わなければいいんだもの。そうよ、簡単だわ。はっきり大きく頷いた。鬼はそれを満足そうに、三日月のような紅を細ませる。

「ならそれで決まりかな」

鬼はそう言っただけでわたしの腕を掴み、悲鳴を上げる暇も与えず後ろを向かせると、そのまま腕に閉じこめた。

「手は出さないって」

「犬や猫を膝に抱えないのか？ 鈴音は」

それは、しますけれど……。

何も言えなくなつて、紅い腕に拘束されながらただ身体を小さくさせた。鬼の手つきがどこか感じ悪くて、髪を撫でられる度に背筋がぞつとする。

でもこれで鬼に喰い尽くされる心配は取りあえず消えたわ。あとは帰りたいって言わなければ大丈夫。

そう安心したはずなのに、どこか不安感が拭えない。わたしは気が持ちが晴れずにもやもやしたまま、眠る時間がくるまで鬼に抱えられていた。

七ノ怪

てんでんと畳の上で鞠が跳ねる。これで何度目なんだろう。

こっそり溜息を吐きながら着物の裾をあげて駆け寄り、鞠を拾い上げて紅い鬼の元に戻る。

「どうぞ」

「それだけカナ？」

頬杖をした鬼がわたしの差し出した鞠を一瞥し、きよろり紅の瞳でわたしを見上げる。

その様子にほんの一瞬だけ下唇に力を入れる。それでも次の瞬間には笑顔を浮かべて、もう一度鬼に差し出した。

「紅の鬼様。鞠をどうぞ」

顔がひきつつているのはもう仕方がない。これがわたしが鬼に出来る精一杯の笑顔なのだ。

「そうそう。愛想は大事だぞ鈴音」

頬杖をやめて鞠を受け取り、すぐさま投げた。

大広間の向こうに転がる小さな鞠。わたしは呆然として立ち尽くす。もう言葉もでてこない。

「どうした？ 早くとってこい」

「……はい」

もうこれはイジメだわ。嫌がらせなんて生ぬるいものじゃない。れっきとしたイジメよ！

渋々取りに行きながらいつ爆発するかも分からない感情をぐっと押さえ込んだ。

落ち着くのよわたし。これを耐えれば鬼に手を出されることはないんだから。鞆を手に取り、鬼のところにまた戻る。

「どうぞ。紅の鬼様」

乱暴な物言いにならないよう努めて丁寧に言う。これが最後でありますように。もうくたくただわ。

「よし、良い子ダナ。それじゃあ飯にでもするか」

紅い鬼が鞆を後ろへ放り投げる。やっと終わった。かれこれ小一時間ぐらい鞆をとっては鬼に渡すという作業を休まず続けていたのだ。

これが現代服ならともかく、動きにくい着物のせいで余計に重労働だった。

「鈴音こい。飯にするぞ」

鬼が自分の膝を叩いてわたしを呼ぶ。わたしは内心、盛大な溜息を吐いた。額に手をやろうとしたが寸でところで我慢する。

耐えるのよ。我慢するのよ。いつものことじゃない。自分に言い聞かせながら大人しく鬼の傍らに立つ。が、やっぱり嫌だ。どうしても慣れない。

ダメかもしれないけれど言ってみよう。

「あの鬼さ……いえ鬼様。やはり同じ席でお食事を頂くのはどうかと思うのですが」

「それを決めるのは俺ダロウ？」

「でも——」

「つべこべ言っていないでさっさと来い！」

口調が厳しくなり、仕方なく鬼が本気で怒り出す前に傍に寄る。紅い鬼は当然のようにわたしを膝の上に座らせ、髪を撫で始めた。これには何度されても慣れることはなく、ぞわりと鳥肌が立った。もう嫌だと何度思ったんだろう。まさかこんな屈辱的な毎日を送るだなんて全く予想してなかった。

「そら、今日もご馳走カナ」

何匹もの赤い子鬼が豪華な朝食を運んでくる。二人分にしては多すぎる量の食事。それらが目の前に次々と並ぶ。

子鬼達は料理を運び終わると、わたしに怪訝な顔を向けながら出ていく。そんな目で見ないで欲しい。なんだか居た堪れない気持ちになる。

「腹が減っているだろう」

わたしの気持ちも知らないで鬼は手で直に餅らしき物を摘み上げると、わたしの口の前に持ってくる。

「これはうまいぞ。食え」

「……」

俯いて餅から視線を外す。口元が強くひきつり、ふるふると震えた。

食べたくない。お腹は減っているけれど食欲がない。

「鈴音っ」

叱りつけるような鬼の声。すぐ傍で妖しい紅が鋭く睨む。

やっぱりこの目だけは苦手。息が苦しくなる。諦めて重い口をこじ開け、鬼の餅を受け入れた。

「うまいだろう」

鬼が見守る中、何度も嚙んでようやく飲み込む。それから頷いて「美味しいです」とぎこちない微笑みを向ける。

「そうか。それは良かった。もっと食って体だけでも大人になれよ」満足げに笑って鬼も食べ始める。それを横目で見ながら、下に隠してある両手をぎゅっと握りしめた。

もう我慢できない。こんな屈辱的な毎日はいくさんっ。たしかに鬼に喰われる心配は消えたわ。だけど毎日毎日犬のように扱われてセクハラ紛いなことをされ続けるのはうんざり！

手のひらに指が食い込むほど強く握りしめる。

「鬼さん」

我慢できなくなつたわたしは、紅い鬼に声をかけた。せめて食事くらいは普通に食べたい。きちんと座つて鬼の手からではなく、箸を使つて食べたかつた。

鬼はちらりと目だけわたしによこす。深紅の瞳には硬い表情をしたわたしが映っている。

「わたし――」

「誰が喋つて良いと言つたカナ？」

低い声に遮られる。鬼は食べるのをやめず料理を食べているが、目だけはわたしを捉えたままだった。

「そんなに俺に従えない力？」

鬼が顔をわたしに向ければ、二つの紅がわたしを縛つた。瞬間、わたしは石にでもされたみたいに硬直する。噴火寸前だった憤りは萎縮して恐怖に変わった。

「従いにくいんなら、記憶を奪つてヤルぞ。そのほうがお前も苦しくないだろう」

片眉をつり上げて固まるわたしに言った。

なんて馬鹿なことをしたんだろ。普段軽薄にしているからといって、目の前にいる紅い鬼は恐ろしい存在に変わりないのに。

「すみません……」

謝り、頭を下げる。たとえ屈辱的だとしても、鬼に飼われている

立場を耐え抜かなければわたしは鬼から身を守れない。屈辱に耐えるか、鬼を受け入れるかのどちらかわたしには選択肢がないのだ。

鬼は黙ってむしゃむしゃ食べ続けていたが、一通り食べ終わるとわたしの着物の裾を掴んだ。

「その着物も飽きたナア。新しい物をやろうか」

着物はこの間新調したばかりなのに。起きる度に違つ着物を着せられていて、未だ同じものを着たことがない。

「いえ、この前新しい物を頂いたばかりで」

ぎろり。妖しい紅にすごまれ、言いかけていた言葉を飲み込み黙る。その言葉が聞きたいんじゃない。そう鬼の目は言っていた。

仕方ない。

目を伏せて頭を垂らし、「ありがとございます」と、わたしは中身の無いお礼を言った。

[illegible]

白い格子の向こうにまた格子。そのまた向こうには闇夜に浮かぶ
紅い月。

籠にもたれ掛かりながら、その月を眺めていた。

本来だつたら今頃大学に行つて、友達の一人でも出来ていたのかな。アパートもやっと見つけた物件だったのに。

こつんと頭を格子に軽くぶつける。月の灯りで畳にうつすらしま模様の陰が連なり、わたしにも同じように陰がかかる。

言つんじゃなかった。

忘れるなんて……言つべきじゃなかったんだ。

目元が熱いと思つたときにはわたしは泣いていた。涙が頬を伝つて流れ、裾に滴となつて落ちる。

後悔したつて遅い。今更だわ。奥歯を噛んで鼻で肺いっぱい空気を吸い込む。両手を握りあわせて息を吐くとともに、そこへ額を落とした。

いつまでこの生活が続くのかしら。一生？ 死ぬまで？ それとも永遠に？

考えてまた後悔する。恐ろしい事なんて、思い浮かべるものじゃない。自分を追いつめるだけだわ。髪をかきあげようとしたが、手に何かがぶつかる。

ああ、そうだった。忘れてた。鬼につけられた髪飾り。べっこうの雀が翡翠の豆をくわえている綺麗な髪留め。頭の後ろで長い髪を束ねている。

本当に、飼われているみたいね。鬼が投げた鞠を拾いに行つて、食べ物を鬼の手から直にもらい、毎日着せ変えられて。今度は芸でも仕込まれるのかしら。

自嘲気味に、苦笑しながら指先で涙を拭つた。

「鈴音」

呼ばれて顔を上げる。肩越しに振り返った先に、紅い鬼がいた。いつの間に籠に入ってきたの？ 鬼は疲れた表情を隠せないでいるわたしに手招きをした。

「酌をしてくれ」

今から？ 気が遠くなり頭を抱える。いつそのこと畳に倒れ込んでしまおうか。

「どうした？ 疲れたのか？」

鬼が傍らにしゃがみ込んで、わたしの前髪を撫でた。

「なにも疲れる事なんてしていない筈なんだがナア」

鬼が不思議そうに首を傾げるのを見てわたしは憤慨した。

ええ鬼さんはそうでしょうね。鬼さんは何一つ疲れることなんてしてないんですからね！

こっちは起きてからすぐに鞠拾いして、ご飯もゆっくり食べれなくて、しまいに毎晩鬼さんに抱き枕代わりにされて満足に眠れなければ、そりゃ疲れもするわよ！

……なんて。そんなことわたしに言えるはずもない。

ナーバスになっているせいか暴力的な物言いが浮かんでしまい、自己嫌悪から知らず知らずため息を吐いてしまう。

「帰りたいか？」

「え？」

突然なにを言いだすんだろう。なんの脈力もなく、そんな事を言われても眉を寄せるしかなかったけど、次の瞬間すごい不快感に襲われた。

「帰りたいのか？」

まだ言つの？ 澄まし顔にむっとして口を結ぶ。
わたしだってそこまで馬鹿じゃない。ふざけているわ。

「ええ勿論そうですが。でも叶いませんから」

絶対に帰りたいなんて言わない。でも「いいえ」とも言いたくない。誰がこんなところに居たいだなんて言うものですか。ふいっと顔を背ける。

「お前は懲りないナア」

鬼の大きな手がわたしの顎を鷲掴みにし、無理矢理視線を合わせられる。

嫌だ。見たくない。反射的に目を閉じて紅から逃れる。

「従順になったかと思えば、隙を見て噛みつく」

闇しか見えないなか、鬼の紅い言葉が響く。怖くなるけれど目は堅く閉じ続ける。

「鈴音は面白いナア。実に飽きない」

前触れもなく耳元で囁かれ飛び上がる。跳ねた肩をぐっと押さえ込まれ額と額が合わされる。

なにがしたいんだろう。身じろぐ度に鬼の角が髪に触れて頬に垂れる。

「しかしまあ、いつまでもつか」

ククつと肩を揺らして笑い

「見物だナア」

耳に吐息がかかる距離で、静かに囁いた。

いつまでもつか。正直わたしも同じ事を考えていた。

わたしの正気はいつまで持つんだろう。わたしもいつか、かつての親友のように、この常闇に魅せられて正気を失ってしまうのかしら。

恨まず憎まず落ち込まず。

そんなこと、わたしはずっとこの先続けることが出来るのか。鬼に飼われながら耐える事なんて出来るのか。目と鼻の先で笑う鬼に屈することなく、この朝の来ない世界で生きていけるのだろうか。

わたしには自信がない。どう歯を食いしばっても、終わりのない闇に耐え続ける自信なんて無かった。それに懸命に強がる心もその望みとは裏腹に、今にも紅い鬼の妖しさに負けて手折られそうだった。

「鈴音、喜べ」

額から鬼が離れるのを感じ、うつすら目を開ける。鬼はすでに立ち上がりわたしを見下ろして気味悪く笑っている。

なにを喜べって言うんだろう？ 嫌な予感を感じつつもわたしは眉を寄せて鬼を見つめ返した。

紅い鬼は腕を組むと牙を覗かせて深く笑んだ。

「お前を今から外に連れ出してやる」

八ノ怪

ススキに囲まれた場所で目の前で妖怪たちが舞を踊りお酒を浴びるように飲んでいる。わたしはそれを台の上でぼんやり眺めていた。

少し視線を移せば紅い敷物の上で角の生えた遊女が扇を翻し優雅に舞う。鬼が生みだした灯は闇夜からこの場を浮かばせ、より不気味な宴の雰囲気強くさせていた。

嫌だなあ。覚悟はしていたけれど、ここでもわたしは珍獣扱いなのね。うんざりと肩をすくめてしまう。

常闇では人間を直に見たことがない者もいるみたいで、特にこの世界で人間がいること自体珍しいようだ。好奇の眼差しがあちらこちらから向けられる。

でもだからと言って、いつもいつも見せ物扱いされるのは良い気はしない。鬼の手前わたしに触ろうとはしないけれど、こうまじまじと眺められるのは正直勘弁して欲しい。

せめてこれが必要はいいいんだけれど。

そう思いながら腰に目をやる。わたしの腰には太い紐が巻かれていて、横でいくつものとぐろを巻き、その先には鬼へと繋がっていた。

気分は繋がれた犬。しかも目の前には高価そうなお椀が二つ。中にお団子と水がそれぞれ入っていて、もちろん箸なんてついていない。ようするに手で直に食べるって事でしょう。

ああもうつ。これなら以前みたいに籠に入れられていた方がずっとマシかもしれないわ。本当のところはどっちが良いのか分かりかねるけど、いい加減この状況に耐え切れなくなりそうで、知らず知

らずの内に眉間に皺を寄せた。

「鬼様あ、お会いしたかったわあ」

聞こえた声に顔を上げる。わたしの斜め前に一段高く設けられた座席。そこで蜘蛛の足を連想させるかんざしを、見事に結び上げている黒髪に挿した遊女が鬼に微笑んでいる。さっきの媚びた声はとうやら彼女みたいだ。

細い小さな顎につり上がった目。妖しい口元。いかにも気が強くて弱いものいびりが大好きなお局様！ と言った感じの女性だ。そして――それを睨むのはいつか見た蒼い美しい女性が一人。鬼の向こう側で群青に輝く鱗を着物の下から垂らしながら、忌々しげに花魁に冷たい視線をよこしている。

女郎蜘蛛と青女。二人の美しい妖が鬼を間に挟んで、紅い鬼様にお酌するという、たいへん名誉な役を取り合っていたのだった。

もちろんわたしは彼女たちをみて、露骨に嫌な顔なんてしない。冷やかな笑顔で見守るだけ。恐ろしい女の戦いに参加なんてしたくないし、火の粉が降りかかるのも御免だった。

「貪欲の鬼様。なぜあのような臭い人間なぞ手元に置いているのです。鳴き声ならわたくしの方が良い声で鳴きますわ」

こちらを冷たい目で睨む花魁姿の女郎蜘蛛。白魚の手で紅い鬼の肩をしきりに撫でている。

別に好きで飼われているわけじゃない。わたしを睨む前に鬼を説得でも誘惑でも何でもして、わたしを放すよう言うて欲しいくらいだわ。まったく。

正直にいうと、以前この世界に来たときに蜘蛛の妖怪に襲われたことがあったので、彼女に対しては見かけた時からあまり良い印象は持てなかった。先ほどからちらちら見下すような目で見てくれば尚更だわ。

「声ならわたくしの唄を是非」

「ちょっと青女。邪魔しないで頂戴」

鬼にお酌をしようとした下半身蛇の女性を花魁がぎつと鋭く睨んだ。その一瞬、花魁の顔に鬼婆のような醜さが垣間見えた気がした。怒ると本性が見えるのは、妖怪も人も変わらないということなのかしら。

ちらつと青い女性に目を移す。美しい長い髪を後ろに流し、花魁とは違う蒼い手でお酌をする様は優雅そのもの。垂れる蒼い鱗も海原のように澄んで綺麗だった。

青女さんには一度だけ会ったことがある。話したことはないから詳細は知らないけれど、紅い鬼に惚れ込んでいるということ確か、今も変わらず紅い鬼しか見ていない。現にわたしの存在など気にもとめていない。

あのセクハラ鬼のどこがいいのかしら。今になってもわたしには理解できそうにないわ。

顔をしかめて吐息を漏らす。これじゃあ外に連れ出されても意味が無いじゃない。鬼さんは美人二人に挟まれてご満悦みたいだけど、わたしは蜘蛛の花魁に睨まれるわ、他の妖怪からは興味深げにじろじろ見られるわ。……良いことなんてまったく無い！

鬼から見えないことを良いことに、わたしは隠さず溜息を吐いた。早く籠に戻って眠りたい。ゆっくり一人で布団に入りたい。うな垂

れながら重い瞼をこすった。

そのとき紅い鬼の笑い声が耳に入った。なにがそんなに面白いんだろつと半眼で見据える。

「いやいや。人間を飼うのもナカナカ面白いぞ。まあ中には鬼になる奴もいるみたいだがナァ」

聞こえた言葉にぎょつとして目を見開いた。気持ちがざわざわとして嫌なものが瞬時に広がり、眠気も吹き飛ぶ。

今、なんて言ったの？ 青ざめながら顔を上げれば頭の片隅に寂しげな彼女の顔がよぎる。それと同時に悲しい般若の顔も。

「人間は心も体も、醜く弱いですもの。それにしても鬼になるだなんて。喰われた方がお似合いなのに。生意気ね」

鼻先で笑う女郎蜘蛛。こちらに振り返り、肩越しにわたしを睨むとまた笑う。

「お前も早いところ、鬼様に喰われたほうが良いんじゃないの？」

「なっ……!!」

なんてことを言うの！ 喰われたほうがいいですって？ 人をなんだと思ってるのよ！

急激に心拍数があがって顔が熱くなるのを感じる。心臓が早鐘を打ちならし始めて鼓動が聞こえてくる。そんな怒り心頭なわたしをよそに、花魁の言葉に舞踊っていた遊女たちが足を止めてくすくす笑い出す。

「いけませんわお姐様。紅の鬼様が汚れてしまいます」

「あらそう。じゃあ狒狒にでも孕ませましょうか」

その場に笑い声が響く。嘲笑の声と蔑みの眼差し。それらが自分に集まった。わたしはぎゅっと口と両手を結んで悔しさに耐えた。相手は妖怪。下手に動くべきじゃない。

でも……分かつてはいるんだけど……

肩が、指先が、唇が、耐えきれない程小刻みに震える。

どうしてそんなことが言えるの？ 妖怪といえど、あなた達も同じ女でしょう？ なんてそんなことが言えるの？

「あらあら。人間さまが震えているわ」

「誰か慰めておやりよ」

「河童でも呼びましょうか？」

どつとまた笑い声が溢れた。

顎が震える。怒鳴り散らしたい気持ちを必死に押さえつける。でも、それでも高ぶった感情が治まることなんてなくって――

「なによ……」

頭に血が上り頭痛とともに耳鳴りがする。目の前がじわじわ見えなくなっていく。

好きで鬼になんてなるんじゃない。好きでここにいるんじゃない。誰がこんなところに――

「どつした鈴音」

聞こえてきた声に、はっとして顔を上げる。紅い鬼は酒を丁度飲み干したようで、盃と顔を同時に下げた。
わたしは何も考えないで鬼を見続けた。紅い鬼は舌で口の周りを拭くと、口端をにいつとつり上げて笑った。

「鈴音。家に“帰りたい”か？」

「——っ！」

瞬時に頭の中が真っ白になった。
ただ頭の中に一言、浮かぶ。

許せない！

気がつくのと、しんと静まり返ったその場で、わたしは台の上で肩で息をしながら立ち上がった。台の下にはひっくり返ったお椀が二つ。お団子が地面の上でずぶ濡れになって泥まみれになっていた。

みんな黙ってわたしをみつめていた。誰一人音も立てない。話し声も笑い声も和楽器の音も聞こえない。
わたしは俯いて奥歯を噛みしめた。

もう嫌……こんなところ……

こんな……

ふと目を上げる。わたしを見下ろす紅い鬼と目が合う。紅い鬼は無表情でこちらを見つめて、僅かに口を開けた。

——聞きたくないっ

[illegible]

そりやあ人間に対して面白くないと思っ
ているのは、仕方ないと思
いあたる部分もあるわ。元の世界から追
いやったり、居場所をな
くしたのも人間だったのかもしれないし。
でもだからって、だから
ってあんなこと……

強い力が加わり、腰が浮いて尻餅をつく。痛い。どうして転んだんだろう。

大きくため息をついて、けど、あの場所に戻りたくもなくてその場に座り込む。

本当に最低だわ。悔しくて、悲しくて、我慢しても涙が出てくる。手の甲で涙を拭いながら顔を上げる。

空を仰いでも暗闇ばかりで星なんて一つもない。ここには暗闇ばかり。唯一闇夜に輝く月も妖気に満ち満ちて、あの暖かな陽の光とはほど遠い。

帰りたい……家に……

ふいに、そんな気持ちが沸き起こった。無性に家族が恋しくて寂しい。元の世界に戻って、あの暖かい日差しを体中に浴びたい。

……もしかして鬼はこれを狙っていたっていうの？ わたしが帰りたいと漏らすために、あの場に連れてきて、あんなことを言ったの？

大きく息を吸って深く吐き出す。それからぎゅっと口を結び、前を睨みつける。

わたしは絶対に言わない。

泣くことはあっても、絶対に帰りたいだなんて口になんかしないわ。紅い鬼のものになるくらいなら、泣き暮らした方が良いもの！ そう決意して空を睨んだわたしに、生ぬるい風が吹き付けて、まるでヤジを飛ばすかのように濡れた枯れ葉を顔に被せて遠ざかる。

……もう。いつもならもう嫌だとか言っただけなんじゃないのに、その風のイタズラでさえ今のわたしには辛く感じた。じわりと涙で闇夜が滲む。

なんだか心が折れそう。

……楽になりたいよ。

以前のわたしは、いったいどうやって広がる闇を乗り越えていた

んだろう。今のわたしは、何故かひどくもろいみたい。情けなくて、情けなくて。仕方がない……

枯れ葉を払いのけると、またぼろぼろ涙がこぼれてきた。堪えても拭いても、止めどなく目から涙が溢れ出す。膝の上にくつもの水滴が落ちて暗く染まる。

帰りたい…… 帰りたい……

心の中で呪文を唱えるように呟き繰り返す。気がつくとなわたしは両手で顔を覆って膝を突き、ただ慟哭していた。

もう疲れた。鬼に抵抗するのも妖怪達からの屈辱に我慢するのも。ここでは何一つ良いことなんてないわ。耐えても耐えても、終わらないんだから。

この常闇にきてから、わたしは初めて声を出して泣いたのだった。

.....

ひとしきり泣いた頃だった。ススキが一度ざわめき、次第に静かになっていく。

沈黙が訪れてしばらく自分の泣く声しか聞こえなかったけれども、まるで流れるようにそれを縫って遠くから何かが聞こえてきた。

これはなに……？

なにか、聞こえる……。

まだ上下する胸に手を乗せ耳を澄ませて静かにしていると、徐々に音が鮮明に聞こえてきた。優しい、どこか寂しげな旋律。

誰かいるの？ わたしの背後から聞こえてくるけれど、宴とはまた違った場所から聞こえてくるみたい。

わたしは立ち上がって、来た道とは違う方向へ足を進めていった。

その妖しい旋律に、誘われながら……

九ノ怪

旋律を頼りにススキをかき分けていく。これは何の音なのかしら。弦楽器かな？ 黙々と進んでやつと開けたところになると、そこはまるで焼けた後みたいに草木が一本も生えない荒地地が広がっていた。

あ、誰かいる。

中央にそんなに背の高くない岩。そこに腰をかけて無心に琵琶を弾いている人の姿があった。

短く刈り込んだ白髪交じりの短髪。伏せられた目。顔からしてまだ若い青年に見えるけど、その表情はどこまでも穏やかで、若々しさとはまた違って見えた。

人間……のわけないよね。一体何しているんだろう。

不思議と恐怖心は無かった。何度も繰り返される音にわたしは吸い寄せられて、彼に近づいていった。

「……あなた何しているの？」

あ、しまった！ 思わず声をかけてしまった。慌てて口を塞ぐけれども、青年は聞こえなかったように目を閉じて琵琶を弾き続けている。気づいてないのかな。

それにしても不思議な音色……。

しばらくその青年と思わしき人が奏でる音に聴き入ってそのまま立ち続けていた。繰り返される旋律。どこか物悲しいものを思わせるけれど、穏やかで優しいげにも聞こえる。なにより懐かしいと思えた。

どうしてだろう。いつまでも聞いていたくなる。

気がつけば、ささくれだった感情まで消えてひどく穏やかな気持ちになっていた。さっきまで大泣きしていたのが嘘みたいに、憂いや陰りが引いていく。心の中が落ち着いていく。

「君はどこからきたんだい？」

ふいに聞こえた声にはっとし顔を上げた。音はすでにやんでいたけれど、青年は同じ姿勢——目を閉じて楽器を持った状態——をしままだった。

「あ、ごめんなさい。邪魔してしまって」

「いいや気にしないで。君はどこからきたの？」

穏やかに笑った顔。青年は気を悪くしていないみたい。良かった。わたしはほっと胸をなで下ろして青年に向き直った。

「むこうの宴から抜け出てきたの。……ちょっと嫌なことがあったから」

ちよつとどころか、もの凄く最悪に嫌なことだったけれどね。でもそんなこと初対面の彼に言っても仕方ない。わたしは青年に苦笑いした。

「そうなんだ」

青年は目を閉じたままわたしに顔を向けて苦笑する。

このひと、もしかして目が見えていない？ 青年の動作にわたしは眉を寄せた。ふと彼の手元にある弦楽器に気を取られて視線を落とす。

「それは琵琶？」

のぞき込んで、青年に聞いてみる。

「そうだよ」

穏やかにいつて青年は琵琶を撫でた。

とても男の人とは思えないほど綺麗な手。こつ、繊細というのかな。とても綺麗な線をしている。

「綺麗な音色ね」

手の代わりに撫でられた琵琶を褒める。さすがに恥ずかしくて、思ったことは言えなかった。

「ありがとう」

青年は目を伏せたまま、嬉しそうにふわり微笑んだ。

なんて優しい笑顔をするんだろう。思わずほっと息を吐いてしまふ。……このひと maybe 妖怪なのかな。

「あなたは、その、人間？」

恐る恐る尋ねてみる。見たところ人間にしか見えないけれど、それは妖怪が化けているだけなのかもしれないし、例えば人間だったとしてもこの危険な世界で一人琵琶を弾いているのは不自然過ぎる。下手したら食べられてしまうかもしれないのに。

怪訝な顔を向けるわたしに、青年はふつと寂しそうに笑うと

「さあ？　どうだろうね。実は僕も良く分からないんだ」

呆れたような、諦めたような。力のない微笑み。彼の笑顔が儚げに見えて今にも消えてしまいそうに映る。もしかして彼もかつては人間だったけれど、ここに連れてこられて人間ではなくなってしまうのかもしれない。だとしたらわたしが今した質問はとても残酷だ。

「ごめんなさい」

してはいけない事だったわ。わたしは自分の無神経さに俯いて謝った。

そんなわたしに彼は、なぜ謝るの？　と小首を傾げてくすくすと笑った。

「ところで、君はさっき泣いていたかい？」

青年が顔をほんの僅かにこちらに向けて、わたしに尋ねた。

「え……あ、うん。もしかして聞こえてた？」

ここからずいぶん離れていたのに。そんなに大きな声で泣いていたのかと思うと急に恥ずかしくなって、頬を赤く染めた。もうそんな大声で泣くような歳じゃないのに。今思い出すと、なんて見つと

も無いことをしたんだろうと思ってしまう。

「とても悲しそうな声だった」

呟いた声は透き通って悲しみを帯びていた。それは本当に相手を思いやって本人も悲しんでいるようだった。

青年の顔を眺める。目を閉じているのになぜか見つめられている気がする。どうしてだか、ないはずの眼差しが優しげに感じた。

「笑ってごらん」

「え？」

「泣かないで、笑っていた方が良い」

そう、また優しげに微笑んだ。どこまでも穏やかな懐かしい笑顔。さっきまで落ち込んでいた気持ちが、なぜだか晴れていく。

「そうね。泣いているより、笑った方が良いよね」

「うん。君もそのほうがとても愛らしい」

あ、愛らしい？ 青年のストレートな言葉にかあつと顔が熱くなつてしまい、知らず知らず頬に手をやってしまう。

褒められて嫌な気はしないけど、やっぱり照れてしまつてわたしは視線を意味なくさまよわせた。青年は言つてて恥ずかしくないのかしら。

琵琶が鳴る。音が波紋のように辺りに響けば、風のざわめきも不気味なものではなく旋律の一部として溶け込んでいく。

琵琶って不思議な音がするのね。今まで琵琶を聞いたことがなかったからか、よりそう感じる。

「いつもここで弾いているの？」

「最近はそうだね。この辺りで弾いているよ」

「不思議な音がするのね琵琶って」

青年の青白い手が優雅に動くと、また旋律が妖しい音色を帯びて流れた。

どうしてだろう。青年の奏でる琵琶の音を聞いていると、とても懐かしく感じる。まるで幼い頃に陽の光を浴びて自由に駆け回っていた日を思い出す。

目を閉じると、瞼の裏に懐かしい光景が浮かぶ。

どこまでも抜けるような真っ青な空に眩しい日差し。蝉の声とおばあちゃんの呼ぶ声が交差する。

懐かしい記憶。懐かしい香り。あれは――

余韻を残して音が止む。同時に懐かしい思い出も消えた。我に返って顔を上げると、真っ暗な闇がどこまでも広がっていた。

「今のは……」

「誰しも懐かしく思う記憶をもっている」

青年は琵琶を持ち直して、丁寧に布で包み始めた。それを呆然としながら眺める。

今の白昼夢みたいなのは青年が奏でた旋律のせいなの？　あまり

にも思い出した記憶が鮮明で、ついさっきまで田舎のおばあちゃんの家 にいた錯覚まで起きる。

「君も忘れてしまつてはダメだよ。辛くなつたら、また思い出すといい」

「そうね。ありがとう」

気持ちが暖かい。折れそうだった心がまた真つ直ぐになる。青年のおかげで気持ちが持ち直したみたい。わたしは心から彼にお礼を言つた。

「そういえば……君は妖じゃないみたいだね」

唐突な言葉にどきつとした。どうしてわかつたんだろう？ やつぱりこの青年も、なにか不思議な力が使えるのかしら。

別にやましいことなんてないのに、わたしはしどろもどりになりながら肯定の返事をした。すると青年は口元に笑みを浮かべてぽつり呟いた。

「闇に混じつて眩しい香りがしたから、もしかしてと思つてね」

「そう、なの？」

そんな匂いするのかしら？ 嗅ごうとして自分の手を鼻に持つていこうとするが、はたと気づいてやめる。何やってるの。犬じゃあるまいし。

「陽の下にいた者は、そういう匂いがするんだよ」

青年の言葉にわたしは複雑になった。
常に感じていた不安に顔を曇らせ、おもむろに口を開いた。

「ここにいと、みんな人間じゃなくなるって聞いたわ」

伺うように青年を見ると、俯いたまま彼は黙っていた。
聞いていなくても良い。わたしは言葉を続けた。

「わたしの友達も鬼になったの。彼女、辛いことが立て続けにあつてこの世界にきたんだけど、鬼にそそのかされて、彼女も鬼に……」

あの時の後ろ姿が忘れられない。最後に呟いた彼女の言葉も耳に残る。

わたしもいつか紅い鬼に魅せられて、自分から妖になりたいと思う日が来るのかしら。その考えにぞっとして腕をさすった。

鬼になんてなりたくない。元の世界に戻れないにしても、人間のままでいたい。闇に染まるだなんて嫌だ。

「君は大丈夫。光さえ忘れなければ」

「光？」

聞こえた言葉に眉を寄せて青年を見返した。
青年は頷いて真剣な顔をわたしに向ける。

「そうだよ。闇に囚われなければ妖にはならない。光を忘れなければ、まだ人でいられる。……だから、元気出して」

ふつと柔らかく青年は微笑んだ。

人でいられる。光を忘れなければ人でいられる。青年の言う意味がわたしにはよく分からなかったけれど、それでも十分元気づけられた。

「ありがとう」

わたしは青年に微笑んだ。青年もまた、わたしに目を伏せたまま微笑んでくれた。まるで木漏れ日のような笑顔に、わたしは眩しさを感じて目を細めた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「それじゃあ」

「待つて」

ゆるりと立ち上がって歩きだした青年に、わたしは近寄り引き留めた。

「いつもここで弾いているんだよね？」

「うん。そうだよ」

「もしまた来れたら、聞いて良い？」

青年の不思議な雰囲気惹かれ思わず問いかける。また会いたい。話がしたい。そんな気持ちで、わたしを青年に引き留めるように後

押ししただ。

青年は驚いた表情をして顔をあげていた。それから口元を柔らかくさせて微笑むと、うんと頷いてくれた。

良かった。わたしは見えないと分かっていたけれども、青年に笑顔に向けて手を振った。

「ありがとう。またね」

繊細な手が辺りのススキのように揺れる。そして振り返って、まるで目が見えているかのように真っ直ぐ歩きだした。

残ったのはわたしと静けさだけ。

青年はその場に懐かしさを残して、闇夜に浮かぶススキの中に消えていった。

十ノ怪

一人そこに突っ立っていると、さっきまで青年がいたなんて嘘みたい。まるでずっとそこで一人でいた気になってしまう。

でも本当にそうだとしたら、わたしはよほど病んでいるんだろう。幻覚や幻聴まで自分の身に起きているんなら、いよいよこの世界にあてられてしまったとしたしか考えられないわ。

でも……たとえ幻でも、あの青年がくれた言葉は挫けかけたわたしを奮い立たせるのに十分だった。光を忘れなければ、懐かしく思える記憶を蘇らせる事ができるのなら大丈夫なのだと。

記憶が残っていて良かった。手元にはなにも残っていないけれど、わたしには暖かな思い出がある。それだけで十分。十分だわ。

「風邪ひくゾ」

「えっ」

闇夜とは違う暗さに視界が塞がれる。わたしはたじろぎながらそれを頭からどけた。

自分の手が握っているのは小豆色の羽織。素早く背後に視線を走らせると、やはりというか。後ろには紅い鬼がいた。

腕を組んで小首を傾げているさまはわたしを馬鹿にしているとは思えない。相変わらずニヤニヤしているし。せつかく穏やかになった気持ちが台無しだ。わたしは盛大にため息を吐いた。

「ナンダ？ 溜息なんゾ吐いて」

口端をつり上げて笑っている。やっぱり腹が立つ。わたしは無言で鬼に視線を送り続けた。

話をしたくないし、あそこに戻りたくない。また笑いものにされるなんてまっぴらだわ。

鬼は身じろぐと、懷にしまっていた手をわたしに差し出した。

「帰ろうか鈴音」

誰が。

喉から出そうになった台詞をぐっと飲み込む。わたしはさっきの宴の席での事を忘れたわけじゃない。あんな卑怯で卑劣な真似、絶っ対に許さない。

「どうしたのカナ？」

ひとりひとり鬼がわたしに近づいてくる。

わたしはひどく落ち着いていた。怒ってはいる。でも悲しくもないし落ち込んでもない。恐怖もなかった。

「泣き虫なお前のことだから、また泣いているかと思っていたんだがナア」

「お生憎様。泣いてなんかいません」

顔を上げて鬼の前まで歩く。もう無理。堪忍袋の緒がブチ切れたわ！ どうせ逃げられないんなら、とことん鬼と付き合おうじゃないの！

他人の解説なんかいらなほど、自分の目が煌々としているのが分かる。腰に両手をおいて下から鬼を睨んだ。

「あくまでもお屋敷に戻るだけです。わたしが帰る場所は断じて鬼さんのお屋敷じゃありません！ 間違えないで下さい！」

言ってやったわ！ ようやく胸のつかえがとれてせいせいした。わたしは顎をあげてさらに強く紅い鬼を見据える。

「鬼さんの言いなりになると思ったのならとんだ思い違いよ！ わたしはここに残っても妖怪にならないし鬼さんのものにもなりません！ よく覚えておいて下さい！」

今まで溜まりにたまった不満をぶちまける。ビシッなんていうすきのない音が頭の中でどこまでも心地よく響いた。

でも——良かったのはそこまでだった。鬼と目があつた瞬間、わたしはその状態のまま固まってしまったのだ。

もう何度も説明したように、わたしは鬼の紅い目が苦手なのである。なのに自分から真ん前に陣取って、勇ましくわざわざ見上げるなんてことをしてしまった。自分から進んで火の中へ飛び込んだのも同然だった。

石化状態に陥っているわたしを、鬼は怪訝な顔をして首を傾げている。それはそうでしょう。わたしだって意気込んできた相手が自分と目があつた途端に石化したら戸惑うわ。

なんだか自分のした事が間抜けに思えて、変な汗をかき始めてしまふ。やっぱりわたしって馬鹿なのかも。

「ああ〜そうダナア」

鬼はうすら笑いし、紅潮しているわたしの頬を撫でた。

「またお前が腑抜けたんじゃないかと思ったが、心配無用だったみたいだナ」

心から嬉しそうに鬼は口角をあげた。そういえば鬼は活きが良いわたしがどうか言っていたっけ。わたしは熱い手から逃げるように離れ、鬼に背中を向けた。

「そんなに心配なら、もう犬のような扱いはやめて下さい。わたしは人並みの生活がしたいです」

出来れば元の世界に返してくれるのが一番良いのだけれど。でもそれはもう出来ない。ならせめて普通の生活がしたいわ。

「それは良いが、鈴音」

背中に軽い衝撃の後、胸の下で紅い腕が交差して後ろからきつく抱きしめられる。息苦しさで喘ぐわたしの肩に鬼が顎を乗つけて耳元で囁いた。

「そしたらお前が俺に言ったコトが無くなるゾ？」

さらに声を低くして、呟く。

「犬猫と同じに飼っているから手を出さない、ってナ」

あー……そうだった。わたしは鬼に飼われているから、手を出されることがないんだった。こんな大事なことを一瞬でも忘れていた

自分に呆れてしまう。

「どうする鈴音え。俺はどっちでも構わないガ」

どうするといわれても。

人並みの生活をして鬼に喰い尽くされるか。飼われて屈辱に耐えつつも身を守るか。まさに究極の二択。でもわたしが選べるのはもちろんこの一つしかない。

「今まで通りをお願いします」

もう一つは絶対に選びたくない。なにが悲しくて鬼と寝ないといけないの。それだけは断固拒否したい。わたしはうなだれて深く息を吐いた。

「そりゃあ残念ダナア。せっかく口付けの他に教えてやろうかと思っただガ」

「え？」

なにを言っているの？ 口付け？

思わず振り返りそうになったが、すぐ真横に鬼の顔があるので目をやるだけに止める。

「忘れているのカナ？」

「なにを——」

言い掛けて視界に映った鳶色の肌と朱の模様をみて、何かが頭の中で弾けた。

視界いっぱい広がった鳶色といくつもの朱の線。口の裏側に軽く歯が立った感触。浮かんだ物は一瞬だったが、過去のトラウマの衝撃はすさまじい物だった。

「思い出したの力ナ？」

「い、いやああああ！」

嫌なこと思い出した！ ああもう嫌だ！ せっかく忘れていたのに。両手で頭を抱えてぶんぶん振る。

あれは夢よ悪夢よ幻よ！ そうよ現実じゃなかったの。そうに違いないわ！

そんなことを強く言い聞かせているくせに、情けないことに何度も口元を拭う自分がいる。記憶の片隅に何重にも蓋をして、さらにお札まで貼って封印していた忌まわしい出来事だったのに、鬼の一口で全部吹き飛ばされて無駄になった気分。

頭の中で息切れしているわたしだったけど、鬼の呑気な声が聞こえてきて我に返る。

「あのお時のお前は面白かったナア」

「うるさいですよ！ 離して下さい！」

体をいささか乱暴によじって鬼の腕から離れるが、すぐさま腰を引かれてつんのめる。そうだった。腰に紐があったんだ。ちらり紐の先を辿れば鬼が踏んづけている。

「お前さん顔は女らしくなったくせに、胸はそのままダナ」

「……は？」

出し抜けにいつてきた鬼に、丸くした目を向ける。
胸……？

「まるでぬり壁力ナ」

「は？」

「おつと失敬。厚みもないんだつた。そうだな、一反木綿力ナ」

「一反……！」

ひ、ひとが気にしていることをよくもぬけぬけと！ 厚みがないですって？ そんなこと言われなくても悲しいくらいわたしがよく知ってるわよ！

「なんですか、いきなり！ 失礼ですよ！」

「まあまあ。さて既に宴も終わっている。戻るぞ鈴音」

ひどく身勝手に話を終わらせると鬼が足からどけた紐を手についた。ぐんと勢いよく腰が引かれる。バランスが崩れてよろけるが、すぐに体制を整えると紐の先を睨んだ。

「紐を解いてくれませんか？ 大変不愉快です」

「こうしなければ逃げるじゃナイカ」

ああもう。なにを言っているの。

息を吐くのと同時に呆れたように肩を落とす。

「どこに逃げるんです？ わたしに行く場所なんてないじゃないですか」

口にした直後自分の言葉が耳に反響する。なぜだか寂しさがより一層強くなった気がして、ふいに視線が落ちる。こちらに来てから精神が不安定なのかな。感情の浮き沈みが激しい。

「よしよし。それなら紐なしも考えておこうかな」

鬼は上機嫌に笑うとわたし歩くよう促してきた。わたしは背中を押されて渋々足を動かした。

.....

宴の場に戻ると誰もいなくなっていた。鬼が小さく手をなぎ払い宙に残っていた鬼火たちを移動させ、屋敷に続く道を作らせた。鬼はわたしの紐を掴みながら道を歩き、繋がれたわたしはその後にく。

黙々とある程度の距離まで歩いたとき、わたしは顔を上げて鬼の背中に声をかけた。

「鬼さん」

「ん？ なにカナ？」

気持ち少し振り返って、鬼は紅をわたしに投げた。お互いに歩みは止めないでそのまま話す。

「この世界に陽の光はないんですか？」

はあ？ と問の抜けた声が聞こえ、肩越しに眉を寄せた鳶色の顔がこちらに向く。

「あるわけないダロウ」

「まったく？」

「まったく、ダ」

やれやれとでも聞こえてきそうな鬼の背中。また後ろ姿しか見えなくなつた鬼に再度口を開く。

「前に人の闇の話をしましたよね？」

「んゝ。そんな事もあつたナア」

鬼は投げやりに言いながらぼりぼりと角の根本を搔く。本当に覚えていたのかな？ 疑わしく思いながらもまた声をかける。

「それじゃあ人の光も、ここにはないのですか？」

ぴたり鬼が足を止めて、つられてわたしも立ち止まる。

「あるかもしれんが……」

鬼はおもむろにこちらへ体を向きなおし、にいつと三つの三日月をつくると

「俺が喰つちまうからナァ」

鋭い牙から紅い舌をのぞかせた。

ああ鬼だ。わたしは心の中で漠然と呟いた。

光のない常闇。紅い月に照らされて、紅い紐で繋がるわたしと妖しい紅をもった紅い鬼。この立ち位置のように、いつまでも対極でいらればいいのに。

ざわざわと風が鳴る。その中にあの妖しい旋律が聞こえてくる。
わたしの光はいつまで輝きを失わずにいれるのだろう。

十一ノ怪

「よし。投げるぞ」

「待って下さい」

鞆を手にした紅い手に待ったをかける。幸いなことに鞆が転がる前に鬼の手は止まった。わたしは錦の鞆から目の前の鬼へと視線を移して、うんざりと肩を落とした。

「もう、それはよして下さい」

「したくないの力ナ？」

形のいい眉を片方つり上げ、首を傾げる。そんなに鞆投げが気に入っていたのかしら。少なくとも拾う役のわたしは楽しくない。わたしは疲れた表情を露わにため息をついた。

「わたしはしたくないです……鬼さんはもつとしたいんですか？」

「いんや、まったく」

「じゃあなんですよ！」

即答してきた鬼に思わず心の中で悪態をつく。今までのわたしの労力は何だったのか。はあ、どっと疲れがでる。

「鞆拾いじゃないなら、火の輪くぐりでもしてみる力？」

「その発想はどこからきたんですか！ それに着物で火の輪くぐり出来る人はそうそういないと思いますよ。少なくともわたしにはどうやっても無理です」

「そうカア。つまらんナ」

鬼はぽんと鞠を後ろへ放り投げた。それを目で追い、鞠が隅で動きを止めたところで、目の前の鳶色の顔に戻した。

「あの鬼さん。わたし」

「鈴音」

ちらつと少し鋭い視線がわたしを捉える。一瞬肩を強張らせるも、すぐにその視線の意味に気が付いて仕切りなおす。

「“紅い鬼さま”。服がほしいんですけど。ジーンズとかブラウスとか」

「……は？」

「ようするに、現代服が欲しいんです」

べつにシャツでもスカートでも現代服ならなんでも良い。この重くて機能性の低い着物は何をするのにも、大変不便だった。どんなに豪華で高い値打ちでも、生活するうえでは全くありがたいと感じなかった。帯で体を締め付けられているのも気が抜けない原因の一つだし、普段は現代服で過ごしたかった。

鬼はふむと考えてしばらく黙っていると、わたしへと顎を向けた。

「なんでそんな物が欲しい？ お前にやった物は上物だぞ」

「でも動きにくいんです、これ」

なにより重い。でもとても寒い日もあるので、そういった時はやはり我慢して幾重にも羽織らないと冷えて仕方がないのだ。常闇のお天気事情は知らないけれど、妖怪たちは寒暖の調整はどうしているんだろうか。人間とは感じ方が違うのかしら。

「普段動く必要なんてお前にはナイだろう？ ああ、鞠拾いか？ それはもうしないから安心シナ」

「えーっと、その、服もそうですけれど、籠の外を自由に動きまわりたいんですけれど……」

上目遣いで尻込みしながら言ってみた。

もしこれで紅い鬼から許可が下りればまたあのススキの場所に行つて、琵琶の青年に会うつつもりでいた。わたしは何故だかあの青年が気になって仕方がなかった。妖怪とも人間とも違う存在の青年。儚げな月みたいな青年。

彼はわたしがこの世界で、人間でいる為に必要なことを知っている気がするのだ。もっと話を聞けば、色々具体的な話がきけるかもしれない。

それに、彼自身ことももっと知れたかった。どうしてもあの憂いを帯びた笑顔が頭から離れない。何かある気がしてならなかった。

「そりゃダメだ」

にべも無く言い放った鬼に眉を寄せる。

「どうしてです？」

「お前さん、逃げ出したことが一度あるからナア」

おそらくわたしが以前、鬼さんの許可なく屋敷の外に出た時のこととをいつているのだろう。でもそれは自分から望んで出たのではなく、正確には強制的に追い出されたのだ。

「あれは逃げたんじゃないです。鬼さんだって知っているでしょう？ あれは」

話している途中なのにも関わらず、紅い手がわたしの腕をとって引いた。気づいたときには、鬼の膝の上に倒れ込んでいた。

「言ったはずだろう。逃がさんと」

耳元で囁かれて背筋がぞわりとする。起きあがろうとして頭を持ち上げるが、すぐさま押さえつけられてしまう。

「お前はこうして俺の傍にいれば良いカナ」

頭を固定したまま丹念にわたしの髪を撫でる。長い指が地肌に触れ、ゆったり離れるのを繰り返す。

「鈴音。お前はいつ闇に染まるんだろうナア。活きの良いお前さんも良いが、闇に染まった姿も見てみたいカナ」

闇に染まる。みっちゃんのようにわたしも鬼になり、人間じゃなくなる。じわり嫌な汗が背中を流れた気がした。

鬼になんてなりたくない。闇に染まりたくない。常闇に來た時点で覚悟しなければならないと、頭のどこかで分かっていたはずなんだけれど、それでも、どうしても人間でいたかった。

——光を忘れなければ大丈夫。

ふとあの懐かしい雰囲気をもった青年の言葉を思い出す。闇に囚われなければ妖にならない。光を忘れないで。妖しい旋律と共に、青年が記憶の中で微笑む。

そうよ、落ち着いて。わたしは大丈夫。楽しい思い出ならたくさんあるもの。憶測でしかないけれども、青年の言っていた光というのは、楽しい思い出のことなんだと思う。闇がマイナスの感情なら、光はプラスの感情に違いないわ。

大きく息を吸って、まるで排気ガスでも吐き出すように重い息を口から漏らした。

わたしは大丈夫。大丈夫なんだと。

「そんなにここが居心地悪い力？」

わたしの深呼吸をどう捉えたのか、鬼は訝しげに声をかけてきた。前髪があげられ、鬼の指が視界にちらつく。

「良いとは言いがたいです。もちろん衣食住は保証されていますが、こんなふうにされては……息が詰まります」

命の危険は百パーセント保証はされているわけでもないし、それに鬼さんに対しては多少言えるようにはなったものの、完全に閉塞感や安心感が得られたわけではない。

だからせめて一人で過ごしたいのだ。別に毎日でなくても良いから、たまに自由に動ける時間が欲しい。誰に気を張る必要もなくゆつくり過ごしたかった。

「そうか。息が詰まる力。ならどこか連れて行ってやろうかな」

「あの、そうじゃなくて一人で」

わたしの言葉を最後まで聞かずに手を叩いた。襖が動くとき大きな目が覗いた。

「あつ」

緑の子鬼。わたしの面倒を見てくれた懐かしい小さな姿。はつきり覚えているわけじゃないけれど、あの時の子鬼とはまた別の子鬼みたい。あの時の子鬼はまだここのお屋敷にいるんだろうか。

「出かける準備をしな。水楼までダ」

「子鬼さ――」

呼びかけようと頭をあげたわたしの口を、鬼が手で塞ぐ。

「鈴音。お前は俺以外の奴とは口を利くな」

なんで？ わたしが目で問うとキロツと鬼の目が動く。

「お前は俺とだけ話せばいい。他の奴らにも口を利くなと言ってある」

ということはい前のように話し相手もないわけね。次から次へと出来る範囲が狭まった気がして、精神的な圧迫感にげんなりしてくる。

子鬼が姿を消すと鬼の手もわたしの口から離れる。

「そう気落ちするナ。良いところに連れて行ってやるから」

「……わたし留守番してます」

「そう遠慮するナ」

にいつと深く笑んだ鬼を見て、やはり嫌な予感しか感じなかった。

.....

闇に映える屋敷。赤く灯された提灯で、ぼんやりと浮かび上がるその姿は蜃気楼にも見える。窺うように辺りに目配せすれば、建物の格子から白魚より白い手が伸びて手招きする。

艶っぽい動きをするその美しい手は、優しく見えて獲物を狡猾に狙っている捕食者のようにも見えた。

「わ、わたしここにいますっ」

妖しげなこの建物は他の人はどう思つか分からないけれど、わたしにはお化け屋敷にしか見えない。見た目は綺麗なんだけれど、漂う雰囲気異常。もうそれだけで無理だった。

屋形車の端で縮こまるわたしだったが、鬼に腕を掴まれて強制的に降ろされる。

「中で待つてます！」

「そう怖がることないカナ」

引きずられるように妖しげな光が漏れる暖簾をくぐる。その向こうにはとても広い、豪華な空間が現れた。

正面にY型の細工が施された大きな階段。漆と思われる黒光りの床。そしてクリーム色の壁に金の糸が張り巡らされ、美しい模様が玄関全体に広がっている。高い天井を見上げれば、銀の蜘蛛の巣に捕らえられている蝶が描かれていて、わたし達を悲しげに見下ろしていた。

よ、良かった。思っていたよりも怖くない。もっとじめつとして蠟燭の明かりしか無いのかと思っていたので、この明るい光景にいくらか緊張を解いた。

「まあ紅の鬼様」

安堵しているわたしの耳に聞こえた声。屋敷の奥から優雅に現れたのは……うつ、あの時の花魁。思わず顔を背けて鬼の後ろに隠れる。

「お待ちしておりましたわあ」

あの気色悪い猫撫で声。聞いててうんざりしてくる。きっと先入観さえなければ綺麗な声に聞こえるんだろうけれども、わたしにはもう聞こえただけで胸が悪くなる程嫌な声だった。

なんでよりによつてこの花魁がいるところに来たんだろう。花魁に会いたかったのなら、一人で行けばいいのに。目を上げて呆れているわたしだったが、突然肩を掴まれて花魁の前に出される。

「頼んでいたのは用意できているかな？」

え？ 頼み？ なにそれ？ びくびくしながら振り返って紅い鬼を凝視する。この花魁に何を頼んだって言うの？

怯える私をよそに、花魁は袖で口元を隠すと艶っぽく気だるげに息を吐いた。

「鬼様は残酷ですね。この屋敷に女を、よりによって人間の小娘を入れるだなんて」

ひどいと震える声を漏らし、一粒の透き通った涙を流した。その憂いた素振りに、不覚にもどきりとしてしまう。うーん。侮れない。

「泣いたお前さんも見事だなア。もっと泣かせたくなるかな」

紅い手が整った顎をあげると、舌で潤んだ瞳を舐めた。うわあ。その光景に顔を赤くして立ちすくんでしまう。

漫画とかでならこういった場面を見たことあるけれど、直に見ると衝撃がすごい。見ているこっちが恥ずかしくなってくる。

「本当にひどいお方だわ」

花魁が鬼の耳元に唇を近づけて何かを囁くと、鬼もまたなにか囁いた。なんというか、大人の世界ね。いちやつく二人を前にし、目のやり場に困って明後日の方をとりあえず向いた。

「綾、絹」

いつの間にか鬼から離れた花魁が呼ぶと、するする衣擦れの音と共に二人の少女が現れた。二人とも髪を結い上げて控えめなかんざしを挿し、それぞれ薄い桜色と薄い黄色の着物を着ている。見た目はわたしよりも下に見えけれど、何歳なんだろう。彼女達も妖なのかな。

「では鬼様」

「ああ、頼む」

ぐいつと背中を押されて前に突き出される。

「可愛がつてやってくれ」

「ええ！？ どどど、どういことですか？」

全然なにがどうなっているのか分からない。これから、というか、わたしをこの花魁たちに何させるつもりなの？

「美味そつに色付けてもらえ」

もう驚きの声も出ない。何度目かの血の引く体験をして、すぐさま回れ右。目指すは出口。

「待て」

玄関に逃げ出すわたしの襟を掴み、まるで猫みたいに首根っこを掴みあげて、女の子二人の前に再度突き出される。

「お任せ下さい」

「丁寧に仕上げますわ」

暴れる間も与えず素早くわたしを両サイドから拘束すると、少女達は紅い鬼に頭を下げる。にこやかに笑う可愛い顔は逆に不気味に映った。絶対にその笑顔の裏に何かがあるに違いない。

「お、お、お、鬼さん！ 嫌です！ わたし帰ります！ それにわたしなんて食べたからお腹壊しますよ！ 色付けたって味付けたって無駄な抵抗ですって！」

「さ、紅の鬼様。こちらへどうぞ」

わたしの心からの悲鳴を無視して、しなやかな動きで奥に鬼を誘う花魁。鬼はこちらをちらっとみて「惜しいナァ」と呟き、花魁の後についていった。

いったいなにが惜しいの？ 向けられた腹立たしい笑みに力チンときて、反射的にその背中を睨みつける。

「綾、行きましょう」

「うん」

二人はわたしの腕を掴んだまま鬼達とは逆の方向に歩き出す。

「やめて！ 離してえ！」

腕に力を込めるが、とても女の子とは思えないほどの力でわたし

の腕に腕を巻きつけてビクともしない。この子たちも妖怪なんだ。こんな可愛い顔して怪力なんてルール違反よ！

「ねえ待つてよ！ わたしをこれからどうする気？」

「それはね」

「だめよ綾。お姐様から言いつけられているでしょ」

「あ、そうだったわね」

二人ともくすくす笑い合う。わたしとは口を利かないようにあの二人から言われているのかしら。どこまで意地悪するつもりなの！懲りずに足をつっ張ったりしてみろけれど、すごい力で引きずられる。

鬼の屋敷とは違った足下に妖しげな明かりが灯っている廊下を進んでいく。そして見えた煌びやかな襖を引き、その奥にある木の引き戸の奥へと連れて行かれる。そこへまたいくつかの廊下を曲がって階段を降りた。

何度かそれを繰り返すと、湿気の多い場所に行き着いた。気のせいか、なんだか薬のような妙な匂いがして思わず顔をしかめる。

「よく煮えてるみたいね」

「色々な調合をしたみたいよ」

何の話し？ 煮えてる？ 調合？ どれも不吉なものを連想させるには十分すぎる単語だった。

やがて蜘蛛の巣が描かれた扉に行き着き、扉が開かれると視界が真っ白になった。吹雪の中に突っ込んだ錯覚が起きるけれど、寒い

どころかサウナみたいな湿気と温度で身体が包まれる。

二人に促されるままに足を進めていくと、大きな釜が見えた。中は青汁みたいに淀んでいて気泡がいくつも水面に出来ている。まるで魔女のスープだ。もしかして材料は蛙とか？ …… う、自分の想像で自爆してしまつて気分が悪くなる。

「それじゃあ始めましょう」

「ああだめよ。まず裸にしないと。着物は貪欲の鬼様の物だから、汚しちゃダメよ」

襟に手が掛けられる。これを許したらあの怪しさ爆発な釜の中に放り込まれるんだわ。恐怖心も手伝つて油断している彼女たちの手から乱暴に逃げ出す。

「嫌よ！ わたし食べても美味しくないわ！」

「あつ」

釜煮えにされるなんて嫌だ！ 熱湯かもしれないし、毒かもしれないところに放り込まれたら死んじゃう――

そう思ったが早いかな、足下がつるつと滑りわたしは盛大に転んだ。ぐらり白く霞む視界が回って衝撃と共に悲鳴をあげる。

「ここはよく滑るのに」

「人間が転ぶの、初めて見ましたわ」

勝手に呑気な声が聞こえてくる。痛みに呻いて顔を上げた途端、

あの嫌な感触がわたしを襲った。この肌に食い込むこの感覚。そう
だ。あの時と同じ。両手足が蜘蛛の鉤爪に押さえ込まれたんだ。

「早く剥いてしましましょう」

「お姐様に怒られちゃうものね」

身体が揺れると帯が外される。そして器用にわたしを押さえつけたまま次々と着者が脱がされる。その最中にも蜘蛛に襲われたときの感触が蘇って身体が震える。

彼女たちは今どんな姿をしているんだろう。視界の悪い中、二匹の妖怪がわたしの着物を剥いていく様子を思い浮かべて血の気が引いた。心臓が胸の中で跳ね回って気持ちが悪い。死にたくない。自然と頭の中に言葉が過ぎった。

「震えているわ。人間って弱いから早くしないと」

「釜も冷めちゃうわ。新鮮なうちに、ね」

鉤爪が押さえを外し、裸になったわたしを抱き起こす。彼女達の素早い動作に、恐怖に固まったわたしは抵抗する暇もなく、緑の液体が入った釜の中に放り込まれた。

十二ノ怪

言いようのない匂いがして何度もむせる。気持ちの悪さに釜から出ようとしても、その細腕から想像もつかない力で押さえつけられる。

「絹。薬草足した方が良いかしら」

「まだ大丈夫よ。新鮮なものばかりだもの」

腕を海藻みたいなものでゴシゴシ洗われ、頭も髪も同じようにされる。こんなので洗われたら綺麗になるどころか、余計に汚くなると思えない。

毒の熱湯だと思っていた釜の中は、予想と違ってやや熱い泥のようなものだった。底も浅く、半身浴をしているみたいで膝頭が顔を出している。

ぶくぶくと小さな気泡が膨れては弾けて消える。うう気持ち悪いなあ。わたしは感触と匂いが気持ち悪くて、押さえつけながらも身をよじり続けていた。

「ねえほら、人間の肌って思ったより柔らかいわ。胸も小ぶりで可愛い」

「本当ね。胸は小ぶりでも良いかもしれないわね。ありすぎても逆に嫌がる殿方もいらっしゃるみたいだし」

……胸のことはあまり言わないで欲しい。わたしの背中を擦る少女は珍しそうにわたしの胸元を覗き込んでいる。いくら同性とはい

え、そうじろじろ見られていい気はしない。知らず知らずに前屈みになって彼女達の視線から隠す。

「ねえ綾、見て。やっぱり人間の手は五本よ。あの馬鹿だぬき、間違った事を言っていたわ。あいつ六本だっって言っていたのよ」

絹という名前だと思われる少女が、わたしの右肩から指先を拭きながらふんと鼻を鳴らす。どこかの狸が人間の手が六本だと彼女に言ってみたよね。どうしてその狸は六本だと思ったのかしら。その狸も人間を見たことがないのかな。

彼女達は雑談を交えながらも懸命にわたしの身体を磨く。綾といわれた子が頭や背中、肩を入念に洗い、もう一人の絹という子が両足や両腕を洗う。

恥ずかしさよりも気持ちの悪さが勝って、わたしは大人しくされるがままになっていた。

「いいわ綾。そろそろ流しましょう」

二人がわたしから離れ拘束が解ける。そこに間髪入れず、油断しかけたわたしの頭に大量のお湯が降ってきた。

ちよっと！ 首が折れる！ あまりの量に頭から押さえ込まれ、水面に顔が埋もれてあやうく溺れそうになってしまふ。手足をばたつかせて水面からようやく顔をだし手で目元の水を拭いた。ああもう、加減して欲しいわ。

何度か瞬きをして目を見開くと、釜に入っていたあの濁った緑は消え、透き通ったお湯が釜に溢れていた。どれだけの量のお湯が注がれたのだろう。良い香りがするのは何か入っているのかしら。手ですくって顔を近づければ、花のような淡い香りが鼻をくすぐった。

女の子たちは手慣れた様子で、どこか呆然としているわたしの身体をまた洗い出した。髪や肌にまだついていて緑の塊をお湯で洗い流し、ようやく納得がいったところでわたしを釜から出した。柔らかい布で全身を拭き、肌着を着せる。

疲れた。部屋の隅にあるゴザの上でへなへなと座り込む。他人に体を洗われるのはこれっきりにしたいわ。

いつのまにか火照っている顔に何気なく手をやる。

あれ。なんだかいつもの自分の肌の感触とは違う気がする。こう、肌がスベスベしていて、手のひらに吸いつくような感じ。あの気味の悪い緑は泥パックのような効果があったのかしら。妖怪の世界にも美容ケアは存在しているのかな。

わたしが力無く眺めるなか、彼女達はてきぱきと仕度を整えると未だぐったりしているわたしを立たせ、その場から連れ出した。

.....

深紅の着物に錦系の紅葉模様が舞う。薄く化粧も施され、唇には真っ赤な色が乗せられる。髪も結び上げられて花魁ほどではないけれども、二つの赤い実がなった枝に模したかんざしが黒い髪に飾られる。

すごい豪華。自分じゃないみたい。姿見に映る着物姿の自分に目を奪われていたけれど、すぐさま支度の済んだ彼女たちに促され、再度部屋を移動した。

どうやら今いた部屋は使用人が着替えをする部屋だったらしく、飾り気のない簡素な部屋だったが、また襖を何度かくぐれば最初に来たときと同じ、豪華絢爛な空間が現れた。

漆で黒光りする床の中央に深紅の絨毯。その廊下の左右には様々な影が映る障子が続いている。猫耳がついた影、角が生えている影、よく分からない形をしている影。様々な影が身体を揺らして笑ったり、躍ったりしている。

ここはどういう場所なのかしら。旅館？ 料亭？

やんやと騒ぐ喧噪に囲まれてきよきよと屋敷の中を見回す。いくつもの部屋に、時折見かける綺麗な着物姿の女性。みんな帯を胸の下あたりで結んで妖美な雰囲気。たまに可愛らしい女の子の姿も見え、すれ違う度に驚いた顔をしてわたしを凝視するところ、やはり彼女たちも人間ではないのだろう。

前後を少女二人に挟まれながらひたすら歩いていく。

ようやく廊下の奥へたどり着いたみたいで、目の前には観音開きの扉が見えた。どこへ続いているのかしら。不安げに体を強ばらせるわたしが見守る中、前にいる少女が桐で出来た扉を開けた。

途端、湿り気を帯びた風が頬を撫でた。

「あ……」

扉の先。そこは花が咲き誇る庭と荘厳な滝。龍を連想させるような水流の下で、白く霧がかかる滝壺からは淡い光が漏れ、幻想的な雰囲気その場に散りばめていた。

建物は滝をコの字で囲んだ作りになってようで、滝の向こうに反

対側の部屋が見える。ずいぶん大きなお屋敷ね。鬼さんのお屋敷より大きく感じるけれど、実際はどうなのかしら。

階数は五階建てでわたしがいるのは三階のようだ。下の階で宴会をしているのが見えるけれど、上の階は下と違って、薄明かりでハッキリと見える影はない。上は何があるのかしら。

足を止めたわたしを綾と呼ばれている少女にそつと背中を押され、再び歩き出す。滝の音を耳にしながら進んでいくと、離れのような場所に行き着き、少女が足を止めてその観音扉を開けた。そこには他の階段とはまた違う豪華な段差が現れ、一段一段に細かく絵が施されている。

ここは他の部屋とは様子が違う。中を見回すが階段以外はなにもなく、ただ黒と紅だけで統一されたシンプルな壁があるだけ。不安を抱きながらまた少女に促されてそこを上りきる。その先には黒地に金の蜘蛛の巣が描かれた両開きの扉があった。

「さあこちらですよ」

「綾！」

「あ、そうでしたわね。ふふ」

おそらくわたしに話しかけたのをこの絹という少女がたしなめたのだろう。振り返ってわたしの後ろにいる少女に少し厳しい視線を投げた。背後の彼女はそんな悪びれた様子もなく、悪戯っぽく笑っていた。この子ってお転婆さんなのかな。

重厚な音が響いて扉が開く。尻込みするも彼女達に促されるまま扉の向こうに入る。そして部屋の様子を見るよりも、目の前の人物に

気を取られ目を丸くした。

そこにいたのはスーツ姿の人間だった。

爽やかな顔立ちで見事に着こなしている真っ黒なスーツ。袖口には市松模様の四角いボタン。深紅の敷物の上であぐらをかいて、大きな手で小さなお猪口を持っているさまはどこか妖艶だ。首に少し浮き上がる筋が妙に艶っぽかった。

なんでこんな所に人間がいるの？ とつさに影を確認するも、やはり尻尾も獣みたいな耳も角も無い。先ほどの廊下みたいに影は妖怪かもだなんて思ったんだけど、あては外れたようだ。

「人間……？」

誰に言うわけでもなく呟いたわたしに、彼はふっと笑んだ。優しくけれども、裏のありそうな危険な笑み。思わずたじろいだ。

「ではごゆっくり」

「えっ」

素早く振り返ったときには鼻先で扉が閉められてしまった。その後にはガチャリという鍵の閉まった音がする。

と、閉じ込められた？

「さあこっちに来て。ここに座りな」

「あ、待って下さい！ わたしはこの従業員じゃないんです！ 手違いみたいなのでちょっと待ってて下さい」

そうよ何かの間違いよ！ 状況もよく分からないし、まずは説明してもらわないと！

すぐさま扉に手をかけて力を込めるがビクともしない。そうだ。鍵を掛けられていたんだ。

「すみません！ 間違えてますよ！ というか、説明してください！」

バンバン思い切り扉を叩く。けれども応答なし。

まさか手違いでもなんでもなくて、本気でわたしに接客しろと言っているの？ 人間同士だから大丈夫だとかそんなノリで？ いやそれよりも、この男の人が本当に人間だという証拠もない。

どうしよう。こんなワケの分からないところで二人きりにされるなんて。

「まあまあ。落ち着いて」

男性のよく通る低い声が聞こえ、はっとして振り返る。男の人はネクタイをゆるめてわたしに微笑んだ。

「とりあえず呑もうじゃないか」

「いえ、その……」

「外は化け物ばかり。ここでゆっくりしよう。なに乱暴はしないよ。こっちにおいで」

この人は大丈夫な人なのかしら。姿は妖怪じゃないみたいだけれども、本当に正常な人間なの？ 本物？ 幽霊とかでもなく普通の

人間？

様子を伺いながら彼の傍らに怖ず怖ずと座る。ちらりと盗み見るもどこにも妖怪らしい気配はなく、目も耳も肌も、普通の人間にか見えない。

「あなたは……人間ですか？」

恐る恐る、表情を探りながら尋ねる。彼はにこりと爽やかな笑みを浮かべて頷いた。心なしかほんのり頬が赤い。酔っているのかしら？

「もちろんだよ。さあ人間同士飲もう」

「いえ。すいませんが、わたしは未成年なので飲めないんです」

「堅いことはいいからさ」

手酌で入れたお猪口をわたしに差し出して、自分も徳利に直接口をつけてぐびりと飲んだ。

「あなたは……なんでこんな所にいるのですか？ どうやって？」

「ここは地獄であり天国だよ」

地獄はともかく……天国？

わたしは訳が分からないと目で訴えた。彼はそんな私を見てニヤリと笑う。

「強欲を満たす所。快楽に延々と溺れる場所。君だって欲の一つや二つあるだろう？」

「……それがどういう意味の欲かによりますけれど」

不安に目が泳ぐ。とても居心地が悪く感じ、両手の中にあるお猪口を意味なく揺らした。彼はゆらりと体を傾け、また徳利のお酒を飲む。

「君は男と付き合ったことはあるの？ 可愛いから一人や二人は絶対にいるでしょう」

突然何を言いだすんだろう。でもまあ酔っている人の言うことなんて脈絡がなくて当たり前か。

少し間を空けてから、わたしはおもむろに首を横に振った。

「いえ、わたしは誰とも付き合ったことないです」

「え、本当に？」

「はい」

本当は高校の時に好きな人がいたけれど、紅い鬼のことがちらついて想いを告げるどころか、思いを寄せることすら躊躇っていた。そんな途半端な状態でいたらその人には彼女ができ、わたしは微妙な気持ちのまま失恋したのだった。

その後も何人かに告白されたが、やはり同じ理由で『はい』とは言えずに振ってしまい、陰で男嫌いだと囁かれて惨めな思いをした。わたしは高校時代まともな恋愛なんてひとつも出来なかった。だから大学に行ったら心機一転、好きな人が出来たら今度こそ頑張ろうと思っていたのに……。なのに……。

嫌だ。すごく嫌な気持ちを思い出しちゃった……。

じわりと心の中で闇が滲む。気持ちが沈んでいく。知らず知らずの内に視線が落ちる。

「君はこんなに可愛いのに」

気がついたとき彼はわたしの頬を撫でていた。驚いて顔を上げると、彼は妖しく微笑してわたしを見つめていた。

「ここはとても寂しい。家族もないし、友と呼べる者もない。誰もいないんだ」

「誰もいない……」

「そうさ。けれども身も心も委ねて心を解放すれば、たちまち樂園に変わる」

「樂園に？」

「そうだよ。この上ない樂園さ」

聞いているうちに、彼の声がいつの間にか頭の奥にじんと響く。

眠気とは違うなにかのせいで瞼が重い。まるで夢を見ているようで、気持ちがよくて、意識も心もふらふら揺れる。

「君だって寂しいはずだ」

膝の上にあった手がいつの間にか大きな手で覆われ、彼の口元に誘われる。音を立てて連なった指先に口付けされるとほぅっと思が

漏れ、片手に持っていたお猪口が床に転がる。

ああ、拾わないと。

「良いからこつちにおいで。怖がらないで」

お猪口に手を伸ばした手わたしを、無骨な大きな手が白いシャツに誘う。そのまま体を預け、抵抗もせず頬をシャツに押し付けると、その向こうから彼の熱が伝わってきた。掴まれていない方の手で胸に手を置けば、じんわりと熱が手の平に広がる。

「俺が寂しさから救ってやるよ」

聞こえた声に目を上げる。彼の長いまつげが頬に影を落として、この世の者とは思えない逞しくも綺麗な顔でわたしを見下ろしている。

おかしい。彼の眼が妖しい紅に見える。

下顎に指が添えられ顔を上げられると、わたしは誰に言われたわけでもないのにおもむろに目を閉じた。彼から甘く唇に触れられるのを切に願って、ただ待った。

まるで縋り付くように。

蜘蛛の巣に囚われ、逃げることを諦めた蝶のように。

「鈴音……」

夢の中で彼はわたしに甘く囁いた。
甘い、紅の声で。

十三ノ怪

焦れた唇に勿体ぶった感触がかすめる。でもそれだけでわたしは痺れることが出来た。わたしの本能が警鐘をうるさく響かせながらも、違ったところでは渴望を剥き出しにして甘さを求めている。だからわたしは顎を上げ続けた。彼にもっと欲しいと、切ないくらい唇で懇願した。

彼がくつと喉の奥で笑った気がした。目を開けて顔を伺おうとしたけれど、すぐにそれは出来なくなる。

まぶたにされた柔らかな口付け。それから額、頬と順々に唇を当てられ、その度に電撃が走って夢うつつでありながらも頭の中に雷光が走った。

とろけるような波の連続。体の力が抜けてよろめき、意識が飛びそうになる。それなのにわたしの唇は未だしつこく求め続けた。

もっと欲しい。唇に触れて欲しい。奥底で本能が自分の理性を踏みつけて求め、下敷きにされた理性は『危ない』『目を覚ませ』と悲鳴を上げている。

分かってる。分かってる。

こんなことではいけないと分かっている。でもどうしようもない程、欲しくて仕方がない。支えが欲しい。寂しさから逃れたい。全てから解放されたい。

理性と本能に挟まれ葛藤していると、心と体がばらばらになっていく気がした。

少しの間があつてから唇が触れられ、その瞬間だけ心身が繋がる。

唇に触れたのは甘いものではない違う感触。そつと目を開ければ、彼の指がわたしの唇をなぞって離れたところだった。

「これ以上はおあずけ」

「え……」

意地悪い彼の口元。どこかで見たことがある気がするけれど、記憶をたどるよりも本能が別のものをねだり、阻まれる。

「欲しいの力ナ？」

「欲し……い……？」

言いかけて、聞こえた訛に違和感を覚える。やっぱり何か引っかかる。

やかましい欲望を押さえつけて、ぼんやりする意識で彼の目を見つめる。……紅い。紅い瞳。

ん？ 紅い？

眉を寄せたわたしに男は目を細めて笑みを浮かべると、三日月のように口が裂けて、そこに八重歯を覗かせた。

わたしがきよんととして見守る中、みるみる肌を鳶色へ変えていき、顔には朱の線が走り頭から二本の角が生え、着ていたスーツは歪み霞むと格子柄の赤黒い着物に姿を変えた。

「そこまで酔うとは思わなかったナア」

「な、なに……え？」

なにがどうなっているの？ 間拔けた声を上げて、夢から覚めたばかりの寝ぼけた状態で頭が混乱してしまう。

目の前にいたスーツ姿の男性が消えて、代わりにいるのは紅い鬼。

「良い表情してたゾ、鈴音え」

「え……」

言われてきつかり十秒。ようやくはつとした時には顔から火が出ていた。ううん、それどころか首の辺りまで瞬時にして熱くなり、文字通り真っ赤に染まった。

「なな、なんで！ こんな、こんなこと！」

「なに恥じらっているンダ。すっかり酔っていたクセに」

「あ、うつ」

恥ずかしさのあまり、立ち上がって数歩後ずさる。

言い返したいのに言い返せない。こんなふうに痴情を晒さなければいけないだなんて！ 嫌悪感と罪悪感でいっぱいだわ。

顔を真っ赤にさせながらひたすら俯いた。自分がこんなに簡単に誘惑に負けたのが信じられなかった。ううん、信じたくなかった。あまりに狼狽してしまって、わたしはそのまま押し黙ってしまい、顔も上げられないし声も出せない状態になった。

もう本当に、穴があつたら入りたいくらいだ！

「さてお前さんをからかえたんだ。酌してくれ」

「お酌……」

まるで何事も無かったかのような鬼の態度に少しだけ顔を上げた。鬼は特にそれ以上わたしになにかを言ったりせず、徳利を振った。良かった。もつとからかわれるんじゃないかと思っていたから、鬼の態度に少なからず安堵して肩の力が抜ける。

「ここで飲む酒も美味しいゾ」

無邪気な子供みたいに笑顔を浮かべる鬼。そんなにお酒が好きなのかな。それにしても……

「鬼さんここでもお酒を飲むんですか。他にすることないんですか？」

まだ気恥ずかしさもあって、呆れた口調をしながらも直視できずちらりと鬼の手元に目を向ける。

「他にすること？ ナンダ。お前相手になるのか？」

「え？ 相手？」

いきなり何を言うんだろう。相手と言われてもなんの相手かも分からないんじゃない、なりようが無い。ちなみにわたしは囲碁も将棋も出来ない。上手いかどうかはともかく、オセロなら出来るけど。

あからさまに眉を寄せるわたしに鬼は意地悪く口端をあげて、まるで内緒話でもするかのように声を潜めた。

「ここがどこ分かる力？」

「うーん旅館ですか？ …… あ、料亭ですか？」

かなり広い宴会場もあったし、旅館かと思ったけれども、妖怪の料亭ならこれだけ広い料亭があってもおかしくないよね。

わたしの答えに鬼はニヤニヤ笑っている。もう、なんだっていうの。鬼はしばらくあたしを焦らす様に黙ってから、そつと囁いた。

「遊郭力ナ」

遊郭。

ああそうだったんだ。そういえば遊女もいたんだし、当たり前か。

「そうだったんですか。遊郭なんて初めてだからピンときませんでした。ここって遊郭なんですね」

「…… んん？」

なにか変なことでも言ったかしら。鬼は肩透かしでも食らったかのような表情を浮かべている。

「なんです？」

「お前、遊郭って分かる力？」

「キャバクラみたいなのところでしょう？ ほら綺麗な女の人がお酒を注いだり、お喋りする所でしたっけ。相手なんて言うから何かと思いましたよ。だってお酌ならいつもしているし、今更じゃないですか」

「……」

「違うんですか？」

ちよいちよいと鬼が指で首を傾げるわたしを呼ぶ。わたしは眉を寄せながら身を寄せると、鬼が耳元に口てを寄せ囁いた。

うん……うん。

……ん？ ……え？

「えええええ！？」

「ナンド知らなかったの力？」

「いやまさかそんな。じゃ、じゃあ、鬼さんはあの花魁とそういうこととしていたんですか！？」

「そりゃ秘密」

「変態じゃないですか！」

うわあ。大変なところに来ちゃっていたんだ。じゃあ障子の廊下で見かけたお客さん達も、そういうのが目的でここに来ているワケなのね。ううゝ鳥肌たってきた。

「で、お前相手」

「しません」

鬼の言葉を遮って即答する。

なんで鬼の相手にならなきゃいけないの。冗談じゃない。

「こんなに美味そうなのにナァ」

鬼の視線から逃げるように顔を背ける。本当に、どういっつもりでここに連れてきたの。せつかく花魁さんもいるんだし、そっちに行けばいいのに。もし変なことをしてきたら契約違反で訴えてやるんだから！ 不安を握り潰そうと心の中で精一杯強がった。

「紅の鬼様」

いきなり聞こえた声に驚いて部屋の隅に目を向けた。衝立の向こうから一人の女性が出す。

凜とした涼しげな美しさで音も立てずに衝立から姿を現し、その場に正座する。ぴんと張った背筋が物言わせぬ雰囲気を出している彼女。こういうのをクールビューティーっていうのかな。

それにしてもどこから入ってきたんだろう。扉は動いた気配はない。隠し扉でもあるのかしら。

薄い上品な紫の着物に身を包んだ彼女は、戸惑っているわたしをちらりとみて笑った。あの花魁とは違って見下すのとは違う笑み。鬼にもう一度手を突いて頭を下げると、柔らかに微笑んだ。

「瞋恚の鬼様がお呼びです」

「瞋恚？ あのジジイまだいるの力？」

「ええ。是非お話をしたいとのことで」

しんに？ 聞きなれない単語に首をかしげる。紅い鬼さんの知り合いだろうか。

「仕方ないナァ」。挨拶してくるカナ」

鬼は面倒くさそうに言っ立ち上がる。それからわたしを指差して花魁に声を掛ける。

「あとコイツを逃げ出さないよう、どこかに繋いでおいてくれるカナ？ 脱走癖があつてな」

「かしこまりました。丁重にお預かり致します」

繋ぐつて……ここでも犬扱い？ それに脱走じゃないって言うのに。

むっとしてしまっけれども抗議するワケにもいかず、わたしは口を結んで俯いた。

「じゃあナ。いゝ子にしてろよ」

ぼんぼんと大きな紅い手がわたしの頭を軽く叩く。わたしはますます眉間に皺を寄せた。

.....

三畳一間の部屋。金色の壁に深紅の格子窓。ただそれだけで他には何もない。もしあるとするなら両手足にまとわりつく白い縄だ。わたしが動きたびに絡まって動けなくなる。

時間の問題なのかな。ふと先ほどの嫌な感覚が蘇る。

あんなふうに鬼の術に魅入られた時は過去何度かあった。でもその度に今までは助けが入って免れてきた。でも今回ばかりはどうすることもできない。助けてくれる友人も、不完全な契約もない。あのまま鬼がやめないでいたら、どうなっていたんだろう。

不意にどこからか男女の笑い声が聞こえてきた。くすくすと声を抑えた囁き声。それらが嫌らしいものに聞こえて耳を塞ぎたくなる。背筋が凍る。お腹のあたりに暗くて冷たいものが広がる感覚。これが絶望というもののかな。ごくりと喉が鳴った。

そうだ、こんな時は懐かしい思い出に浸ろう。このままだと闇に吞まれてしまう。楽しいことを思い出してマイナスな感情を追い払わないと！

わたしは慌てて絶るように、過去の記憶を辿った。

なにが良いかな。

前に友達と見た映画とかショッピングも良いけど、大学の合格通知が届いて打ち上げたのが一番楽しかったな。春香は普段気が強い癖に、あの時はみんなの前で嬉し泣きしてたよね。わたしも美紀と二人でつられて泣いて、結局三人で泣いたんだっけ。

そういえばお兄ちゃんがくれた図書カード。あれももったいなかったな。こんなことになるなら使いきっていればよかった。中学を卒業した時にお姉ちゃん達から貰ったネックレスも、バックに入れ

たままだつたし。とても気に入っていたのに。

「……ふ」

懐かしい暖かい思い出。なのに思い出せば思い出すほど涙が出てくる。

これを忘れなければ大丈夫だと思っていたけれど、でも思い出すと辛い。とても寂しい。

「寂しい」

呟いて肩を落とす。誰かに縋りたい。なんでもいいから自分を奮い立たせる何か欲しい。奪われるだけの存在は嫌だ。

でもそんなものはない。わたしはなにも持っていないもの。

わたしは今、ひとりぼっちなんだ。

零れそうになる涙。気を緩めれば嗚咽が漏れてきそうな口。心もとない胸元に虚ろが蝕む。

そんな闇夜に打ちひしがれるわたしに、さわさわと柔らかい風が格子の間から滑り込んできた。

「また泣いているの？」

あの懐かしい青年の声とともに。

十四ノ怪

今聞こえた声って。

ススキの光景が広がる、そこで流れた妖しい旋律。穏やかな表情をした一人の青年。頭の中で再生された光景に顔を上げる。

「そこにいるのはもしかして、あの、琵琶の人？」

格子に向かって戸惑いつつも声をかける。

「うん。そうだよ」

やっぱりあの時の青年だ！

自分の顔が柔らんだのを感じながら格子に近づこうとしたが、縄の拘束に阻まれて近寄れない。ぎりりと両手首と両足首に縄が食い込んで痛い。

顔が見たかったのに。これじゃあ、格子の外が見えない。

「どうしたの？ そこにいるのかい？」

心配そうな声が格子の向こうから聞こえ、顔を向ける。相変わらず星のない闇夜が広がるばかりで人の姿どころか雲すら見えない。どうして彼の姿が見えないんだろう？ もしかして外からだとか、格子の位置が高いところにあって中が見えないのかもしれない。

「ごめんなさい。いま格子に近寄れないの。……でも、まさかこんなところで声をきけるだなんて」

「僕も驚いたよ」

青年の声は心なしか嬉しそうに聞こえて、わたしも胸に温かいものを感じた。声を聞けて嬉しい。素直にそんな気持ちが沸き起こって不安や寂しさが消える。

でも、ここにいてことはお客さんとしてここに来ているのかな。

「ここには——その、お客さんとして来てるの？」

訊いて良いことだったのかちょっと迷ったけれど、無性に知りたくて口をきいてしまった。なぜだか緊張して裾をぎゅっと握ってしまっ

「うっん。僕は琵琶を披露するために、ここに呼ばれたんだよ」

「そ、そうなんだ」

なんだ。良かった。お客さんとしてここにいるわけじゃないんだね。

別に彼がここでお客さんとして来ても、わたしが文句を言える立場じゃないのに、なぜだか胸を撫で下ろしてホッとしてしまった。

どうしちゃったんだろうな、わたし。

「君はどうしてここにいるの？」

不意にかけられた言葉に、少し考えてからわたしは話した。

「鬼に連れて来られたの。どうして連れてきたのかは、分からないんだけど」

そうなんだ。鬼がどうしてここに連れてきたのか、わたしもよく分からない。着飾らせるためか、花魁といちゃつくのを見せつけるためか。

でも、わたしに術をかけたのを考えれば、自分との力関係をわたしに再認識させるためだったのかもしれない。

あのススキでことがあってから、わたしは何度か鬼に噛みつくような態度をしてきた。だからお仕置きとしてあんなことをしてきたのかもしれない。わたしに自分が鬼の手の平にいる事を思い出させるために呪いをかけて、どうにでもできると警告したのかも。

……嫌だ。また思い出してきた。

鬼に化かされた時に過ぎった記憶。悲惨な高校時代の恋愛。怯えを隠して笑顔の仮面を被り続けていた日々。元の世界に戻ってもわたしの心はずっと紅い鬼に囚われ続けていた。

そこへ揺さぶりをかけられ、不安や本能から逃れようと紅い鬼に救いを求めた自分。今思い出しても罪悪感で押しつぶされそうだ。

「大丈夫？」

「あ、う、うん！ 平気！」

無意識に溜息でもついていたのかな。青年の心配する声に慌てて顔をあげて、彼から見えもしないのに微笑んだ。心配かけちゃいけないもの。

するとわたしの声に応えるように、外から琵琶の音が響いてきた。

ちょうど琵琶を鳴らして返事したみたいに。

それがちよつとおどけたような音だったから、ふふつとつい笑い声をこぼしてしまう。

「いつも琵琶を鳴らしているのね」

「鳴らしていないと、どうにも落ち着かなくて。ずっと何も無いときでも弾いてしまうんだ。……変かな？」

「ううん。わたしはその琵琶の音、大好きよ」

「そうかい？　ありがとう」

はにかんだ柔らかな声とともに琵琶も鳴る。まるで青年の感情を琵琶が代弁しているみたいで不思議だわ。そして聞いているわたしも、なぜだか心が落ち着いてくる。

「あなたは这个世界でずっと暮らしているの？　人間が珍しくないみたいけど」

青年には出会ったときに人間かと尋ねた。でも彼は寂しそうに微笑むだけで、人間かどうか応えてはくれなかった。

けれどこんな危険な常闇で一人で琵琶を弾いていたのを見た限り、わたしみたいにこの世界に来たばかりの人間だとは思えないし、かと言って他の妖怪とは違ってわたしを興味深げに接したりせずきちんと受け答えしてくれる。

わたしは青年の正体が出会った時からずっとになっていた。

「僕は自分が誰か分からないんだ」

「分からない？」

「過去の記憶もないし、名前も忘れてしまった。ただ手に持っていた琵琶を弾き続けて、今日まで過ごしてきたんだ」

「誰かにこの世界に連れてこられた、とか？」

わたしと同じなら、彼も誰かに名前を奪われて存在を囚われているのかもしれない。

「それすらも分からないんだ。……君は自分が誰か分かっているの？」

「うん。鬼と契約してこの世界に来たから」

友達を帰す代わりに、わたしはこの世界に残った。思い出すとしつこく不安が心に広がる。やっぱりこの事実は慣れないわ。

「記憶も名前もあるの？ 取られたりはしなかった？」

「名前は取られてしまったけれど、記憶は残ってるの。家族が消えたわたしを探さないように、自分のことは忘れさせてって鬼に願ったら、だったらわたしの記憶は消さないでおくって残してくれたの」

「変わった鬼様なんだね」

「うん。かなり」

ついでに意地悪で変態だけど。

「でも君は家族に忘れられてしまうのは、辛くないの？」

「辛くないって言ったら嘘になるけれど、わたしがみんなを忘れちゃうより、みんながわたしを忘れたほうがまだ良いと思うの。わたしは家族や友達を覚えていたいから」

「君は強いね」

うつん、そんな事はない。むしろ逆だと思う。覚えていたいと願うのは嘘偽りないけれど、みんなを忘れたら、わたしが人間でいることまで忘れてしまう気がして、怖かったのもあった。

……青年はどうなのだろうか。

「あなたは、昔の事はなにも覚えてないの？ まったく？」

「いいや。……ほんの少し、なんとなく覚えている部分もあるんだ。思い出せるのは皆僕をよく呼んでくれて嬉しかった事。けど気がついたら誰も僕を呼んでくれなくなつて、こちらが語りかけても聞いてくれない」

消え入りそうな寂しい声。琵琶も同じように寂しく鳴く。

「それだけ。それだけしか覚えてないんだ」

「そっか……」

余計な事を聞いてしまったかな。いい加減、考えなしに尋ねてしまっくセを直さなきゃだめね。

そんなふうにしゅんぼりして反省していると、格子の向こうにい

る青年が優しく琵琶を鳴らした。

「君が落ち込む必要なんてないよ。気落ちしないで」

「……わたしが力になれば良いんだけど」

「ほんとうに君は優しいんだね。そう言ってくれて嬉しいよ。ありがとう」

「そんな！ お礼されること言っていないし、それに、そんなふうに言われるとなんだか照れちゃうよ」

あたふたと慌てて手を振る。顔が見えなくてよかったかも。だって、今すぐくわたしの顔が赤くなってるから。自意識過剰だね。本当に、さつきからどうしちゃったんだろわたし。久しぶりに気を張らなくてすむ存在に、浮かれてしまっているからなのかな。

「せつかく時間があるんだから、何か弾き語りでもしようか？」

「うん、ぜひ聞きたい！」

青年の言葉に、素直にわたしは弾けるような返事をした。

「それじゃあ一つ、御伽話でも」

青年の繊細な指が揺れるのを思い出すと、記憶と重なるように琵琶が歌った。

「昔々……」

青年の優しく懐かしい声で語られる昔話は、わたしの心を癒していった。心が洗われるような暖かい木漏れ日のような雰囲気かわたしを包み込み、冷えきろうとしていた心を温めてくれる。

琵琶が優しく妖しい旋律を流し、青年の柔らかな声がその中を泳ぐように唄えば、闇夜に光を感じて次第に心が晴れていく。

青年はわたしから陽の匂いがすると言っていたけれど、わたしはまるでここには存在しない太陽を見るかのように、彼をまた眩しく思った。

ほんのりと頬と胸が熱くなっていく。

恐怖ではない何かに鼓動が高鳴るけれど、どこまでも穏やかで幸福感さえ感じる。

わたしは忘れようとしていた感情を、また胸に灯し始めていたのかもしれない。でもそれをはっきりと認めたのは少し後のことだった。

十五ノ怪

「待って！」

聞こえた音にわたしは叫んだ。

不意に途絶えた琵琶の音に不安が滲む。

「……鬼さんが戻ってきた。早くここから離れたほうが良いわ」

わたしは声を抑えながら格子の向こうにいる青年に囁いた。ごくりと生唾を飲み込み、青年に帰るよう促す。もし鬼に話をしていたのを感じかれたら、二人とも何されるか分からない。

「鬼さんに気づかれる前に早く行って」

間もなく桐の戸から鍵が外れる音が聞こえ、慌てて口をつぐむ。開かれた隙間からゆっくりと紅い影が覗いた。

「ああゝまったく。話が長いじじいカナ」

ぼやきながら紅い鬼がのそりと部屋に入ってくる。気づかれないかそわそわしながらも、わたしは誤魔化すように口を開いた。

「お帰りなさい。早かったですね」

ぎこちなく笑い鬼の機嫌を伺う。それがまずかったのか、鬼がやや片眉をつり上げてからわたしの顎を人差し指で上げると、目を細めた。

「どうした？」

「な、なにがですか？」

「顔が赤いようだガ」

「え……赤い、ですか？」

顔が赤くなるような事なんてあつたかな。むしろ格子の外にいる青年が鬼にばれていないか、怖くてお腹の底から冷え冷えしているんだけれども。

「なんだ風邪でもひいた力？ どれ、暖めてヤル」

鬼が指をはらうと手足を拘束していた紐が音もなく外れ、それに驚いている間に素早く紅い腕の中に囚われる。

「ちょ、ちょっと待って下さい鬼さん！」

あたふたと向き合う形で抱き寄せられて、鬼の胸に手を突いて離れようとするが、例のごとく鬼はどこ吹く風で気にもとめていない。

「まあまあ、そう恥じらうことないカナ」

「恥じらってません！」

なんでこんな時に限って誤解を招くようなことを言うの！ あの
人に聞こえていたらどうしてくれるの！

ああ、もう。してはいけないとは分かっているけれど、どうして

も格子の方を見てしまう。彼はまだ外にいるんだろうか。出来ればもう立ち去っていたら良いんだけど。

「ん？ 外がどうかした力？」

じつと格子を見ていたわたしに、鬼もそこへ視線を投げた。
ま、まずい。

「いえ、外はどうなってるのか気になっただけで」

「ん？」

「あ、いえ、その」

わたしを抱えたまま鬼が格子の外を覗き込む。
どうしよう。あんまり止めたりしたら変に思われてしまわれてしま
うし、かと言って見つかったりしても困る。

二つの紅がきょろりと動く。まだいたりしないよね。わたしも外
を見たいけれど、鬼が邪魔で格子を覗く事が出来ない。どくんどく
んと脈拍がまた駆け上がり、変な汗が額に浮かんでくる。

「……うん？ 誰かいるみたいだなア」

「っ……！」

心臓が跳ね上がる。ど、どうしよう。紅い鬼はわたしが他人と口
を利くなと言っていた。ということは、わたしが彼と話していたこ
とが知れたら大変だわ！

いや、だ、だけど。わたしが青年と喋っていたのを紅い鬼は知ら

ないハズ。訊かれてもお互いにしらを通せば危害を加えることはないとは思っけれど。

鬼がゆっくり動くと格子から離れた。それから一度わたしを抱き直し、その場にあぐらをかいた。

「あ、あの、誰かがいたんですか？」

首を回して関節を鳴らす鬼にそれとなく訪ねてみる。鬼が紅をこちらへ投げるが、すぐに閉じてあくびをした。

「いんや。別の客が通り過ぎただけカナ」

別の客。青年ではない別のお客さんだろうか。でもまさかそんなことが聞けるわけもなく、わたしはやきもきして口を真一文字に結んだ。

「お前本当に具合が悪いみたいだナア。どくどくと鼓動が聞こえてくる」

さらにきつく抱きしめられ、ふうっと耳元に吐息が掛かり思わず全身が栗立つ。

今のは偶然だろうか。また嫌がらせかと思いい様子を窺っけれど、鬼はわたしを抱えたまま何もしない。ただただ、わたしの横顔に顎を寄せるだけだ。

なんだか変な感じがする。

「……あの鬼さん。あの、どうしてわたしをここに連れてきたんですか？」

何も話そうとしない鬼に、この無言で抱き合った状態を続けることに抵抗を感じたのも手伝って、わたしは口を開いた。

「どうしてって、お前が暇そうだったからナア」

「だとしても、なんでここなんですか？」

「戸惑う反応が見たかったのさ。それに艶やかな姿もナ」

言いながらわたしの首と顎を、丹念にその長い指で撫で回し始める。なんだかヨロシクナイ流れになってきたのは気のせいかしら。居心地がさらに悪くなりわたしは身じろいだ。

「だ、だったら、もう十分堪能できたんじゃないですか？ そろそろお屋敷に戻りましょうよ」

「そう言うナ。もう少し見せてくれ」

ぐつと顎を持ち上げられ、強制的に上を向かされる。

「あ」

どくんと一際高く胸が鳴った。青年の時とは違う胸の高鳴り。紅い瞳の妖しさと狂気に魅入られて視線と共に、魂まで凍り付いた気がした。

「やはり可愛らしいナア、鈴音え」

な、なんで？ 目が反らせない！ それどころか金縛りにあったように指も動かせないし、瞬きすら出来ない！

見開いた目元に鬼が唇を落とした。突然のことに声を上げたつもりだったが、微かに口から吐息が出ただけだった。鬼はそのまま頬、首筋、鎖骨へと口づけを落としていく。

なんで？ 突然どうして？

疑問を抱きながらやめたと心の底から叫ぶ。身動きできないわたしが唯一抗議を上げているのは、どんどん速度を増す鼓動だけだ。自分の喉から耳に直接音が届けられているみたいに、すぐ傍で自分の心臓が悲鳴を上げている錯覚を起こす。

「そう言えば鈴音は男を知らないんだったナア。さぞ怖いだろう？」
紅を乗せた下唇を鬼の指がなぞる。

「お前は言いつけ通り、ついこの間まで俺を忘れなかった。あのままでいればこんな目に遭わなかったのに」

くくつと八重歯を覗かせて、正面にきた紅い鬼の顔が冷たく笑う。

「お前はどこまでも愚かで可愛い力ナ」

言うが早いのか、それとも同時か。目いっぱい妖しい紅がわたしに覆いかぶさった。

頭の中が真っ白になった。

強引に割って入る舌が、あの時と同じように歯列をなぞる。

瞬く間に蘇る記憶。びりびりと口が痺れる度に、薄れていた思い出が鮮明に戻ってくる。

怖ろしくも美しい常闇。陽気で哀しい恐ろしい妖。渴望し、さまよう魂達。魅入られて去った友。そして残る絶望。笑う鬼。

みんな忘れてしまいたかった過去。

どうして思い出させるの？ どうして引き出すの？

鬼よりも忘れたかったのに！

「な……に、するのよっ！」

叫んだと同時に身体が動いた。反射的に振り上げた右手が鬼の頬を指して飛ぶ。

「おっと」

たやすく手を捕まれ一気に引き寄せられる。驚きの声を上げる間もなく、ごつんと厚い胸板に頭の側面がぶつかり、一瞬瞼の裏に星が見えた。

「いつ痛い……」

「お前は本当に懲りないナア」

ぶつかった衝撃で頭が揺れる。いやいや、文句を言ってやらなければと顔を左右に振るが、余計に目が回ってしまい頭を抱えた。

「おお悪かったナア。そんなに強く引いたつもりは無かったんだガ」

「や、約束が違っじゃないですか！ どうしてこんな事するんです！」

頭を押さえながら鬼を見上げ、睨み付ける。

「この程度、手を出した内に入らないかな」

「前に同じ事して手を出ただけだとか言っていたじゃないですか！ それになんで昔のことを……んうつ」

問いつめようとした口を鬼の手で塞がれる。負けてたまるかと思いつく罵り言葉を並べるが、むーむーという音にしかならない。

「分かった分かった。陸言は屋敷で聞こうかな」

ば、馬っ鹿じゃないの！

声に出せない苛立ちも手伝って、全身全霊でこの言葉を心の底から発した。

なにをどうしたらそんなセリフが出るのか理解できない。わたしが鬼に対して好意的に思うことなんて微塵もないのに。

舞い戻った過去はわたしに黒い気持ちをも蘇らせた。鬼は嫌がらせをしただけなのかもしれないけれど、あの時の悔しい気持ちまで思い出させたのに気付いているんだろうか。怒りにまかせて勢いよく立ちあがり、鬼のそばから離れる。少し着くずれした着物を整え、鬼を睨むつもりで顔をあげた。

……あ。そうだ。

どっぶり不快感に浸ったところで、青年のことを思いだしちらりと格子に目をやる。さわさわと風が通り過ぎるだけで誰かいる気配も音もない。上気した頬に涼やかな空気が撫でる。

青年はもう格子の外にはいないのだろうか。

「さあて。もう少しゆっくりしていこうかと思ったんだが。屋敷に帰る力」

鬼がわたしの背に腕を伸ばし、歩くよう促す。

「押さなくてもきちんと言いますよ」

「そう力」

口をとがらせて言ったわたしに鬼はニヤニヤ笑って戸を開けた。わたしは部屋を後にしながらも、名残惜しんで最後に格子を振り返った。またいつ会えるかも分からない。そう思うだけで胸が痛んだ。

蘇った記憶の一部にいた銀色の妖。彼もまたわたしの元を去った一人。親友も去り、家族とも引き離され、昔知り合った妖怪達とも言葉を交わすこともない。

あの太陽の青年に、わたしはまた会える日が来るんだろうか。たとえ会ったとしても、彼もまた、わたしのもとを去るんだろうか。

鬼にされた口付け。

あれはわたしに何を植え付けたんだろう。

きっとそれは縁でもない、最低な物には変わりはないのだろうけれど、わたしはどこか憎くも懐かしく思えてならなかった。

十六ノ怪

はあ。気がつくとも溜息ばかり出てしまう。

頭に浮かぶのはあの琵琶の青年のことばかり。あの青年のことを考えるとなんだか胸が騒ぐ。でも、嫌な感じがしない。病気とはまた違う胸が詰まるような、とにかくぼんやりとしてしまうのだ。

「おい」

琵琶の音色に負けなくらい優しい声。穏やかな物腰。繊細な手つき。目を閉じているのに感じる優しい眼差し。懐かしい暖かい雰囲気。

「鈴音」

今度会ったらなにを話そうかな。ううん、それよりもまた会える日が来るのかな。あの時、悲しい声をしていただけ、わたしが何とかしてあの人の力になれば良いのに。

「すーずーねー」

でもそんなことしたら迷惑かな。また余計なことを言っただけで傷つけたりしたくないし。

そういういえば名前はなんていうのかしら。本当の名前じゃないとしても知りたい。また会ったとき教えてくれるかな。

「……」

なんとかして、こちらから会いに行ける方法を考えなきゃ。この間は偶然出会えたから良かったけれど、また会えるとは限らない。いつ自分がどうなるか分からないんだから、考えられるときに考えておかないと――

「ひゃっ！ なな、なにするんですか！」

傍らに座る鬼をねめつけ、舐められた首筋を手で押さえて身構える。

「イヤァ、目を開けて寝ていたみたいだから起こしてやろうかと」

「きちんと起きてます！ やめて下さい！」

もう、せっかく色々考えていたのに。だいたい起こすにしても普通、人の首を舐めたりする？ 不快感を露わに「ごし」裾で首筋を拭うが、あまり擦るなと鬼に止められて手を下ろす。

「お前ずいぶん元気が良いみたいだな。いや、悪いの力？」

「別に……普通ですけれど」

あれから幾日か経って（もちろん常闇の時間なんて分からないから、何回起床したかというのが正しいけれど）今も変わらず無駄に広い部屋で紅い鬼のお酌をしている。鬼はあまり外出をしなくなつた。お屋敷でお酒ばかり飲んでいる。

「ずいぶん呆けているようだガ……。なにかあつたんじゃない力？」

ゴクリとお酒を口にしながら横目でわたしに紅を投げる。それがどこか詰問めいた気がして、思わず顔を逸らしてしまう。

「そんなことないです。気のせいじゃないですか？」

鬼さんに知られて良い事なんてない。それに青年はこの世界で唯一わたしを人間扱いしてくれて、気を許せる特別な存在なんだから。もしばれて殺されたりなんてしたら。その考えに心臓が凍った気がして吐息が震えた。

「ああ、そうだ鈴音。こいつをヤル」

鬼が懷をさぐると、可愛らしい音が聞こえてきた。不思議に思っ
て少し覗くように腰を浮かすと、鳶色の大きな手になにか紐のよう
なものが垂れていた。

「これは何ですか？」

三つ編みにされた茜色の紐に、金の鈴が付いている。首輪な
かいら。

「何に使うんですか？」

「鈴音。ちよつとこつちに来い」

首を傾げたわたしに紅い手がひらひら手招きする。
なんだろう。近づこうと身体を動かしたが、よぎった考えに固ま
った。

「ま、まさか……」

青ざめて顔をひきつらせると、それを見た鬼がこの上なく嬉しうに笑う。

「そゝかそゝか。ヤツパリ楽しみにしていた力」

口角をあげてニヤリ笑う紅い鬼。やっぱり嫌な予感は的中した。鬼はわたしに首輪をつけるつもりなんだ！

「いゝ子だから、おいで」

「イヤです！ 絶対にイヤです！」

ぶんぶん首を左右に振って拒否する。

「良いからこっちに来ナ」

腕をとられて膝の上に座らされると、お腹の前に腕を回されて閉じこめられる。

何度も逃げようとしたこの腕が外れた試しはない。けどこのままどうぞ、となされるがままに首輪を付けられるだなんて嫌すぎる！

「よして下さい！」

わたしを捕らえている鬼の片腕から身をよじって抜け出そうとする。が、やっぱりダメ！ ぜんぜん動かない！

こうなったらせめて首輪をつけられないようにしないと。

首のそばで狙っている鬼の手を両手で掴み、これ以上近寄られまいと押し返す。

わたしは奴隷なんかじゃない！ たとえ従わないとしても首輪を

つけられるだなんて！ 力の限りぐいぐい押して紅い手を少しでも遠くにやる。

ふと、鬼の手から力が消えた。紅い腕がすんなり押す力に流され手の中の鈴が鳴る。

急にどうしたんだろう。諦めてくれたんだろうか。

そう思っただけにも押しを止めてしまったその瞬間、目にも留まらぬ早さで首に熱い片手が食い込んだ。ひゅっと思を吸う音がわたしの口から聞こえた。

「大人しくしないとっかかり爪を立てるが、良いの力？」

耳のすぐ後ろでひっそりと囁かれ、軽く爪の感触を首に覚える。わたしはさらに体を硬直させた。背筋が氷点下まで下がる。

「良い子ダ。そのままでいろ」

体から拘束が解かれるが、わたしは微動だにしなかった。久しぶりに感じた鬼の気迫。情けないことにわたしは鬼の脅しに固まってしまう、抵抗することもなくただ従った。

するり感触の良いものが首を滑り、首元で鈴が可愛く鳴いた。

「これで良いカナ」

満足そうに呟いてわたしの髪を撫でた。

恐る恐る首に手をやると、ちりと涼しい音が聞こえる。

「可愛いらしいゾ鈴音。よく似合うカナ」

鈴を触る手に紅い手が添えられる。

「これは龍神のタテガミから作られていてナア。なかなか手に入らん高価なものだ。お前のために用意した」

優しく大事そうに首筋を撫でて鬼が耳元で笑う。

「お前が望むならなんでも用意するゾ。火鼠の衣でも鳳凰の羽で出来た扇子でも。なんなら子兎でも捕らえてお前にやろう力？」

頭の芯にじんときる甘い声に、惚けるよりも恐怖のほうが勝る。

「そんなこと……しないで良いです……」

絞り出すように声を押し出す。

この紅い鬼は狂ってる。わたしの本能が盛んにわたしに訴え、応えるように体中が震えた。

「そう力。残念カナ」

鬼はまたわたしを抱きしめるとごろりと横になり、わたしの自由を奪ったまま眠りに落ちていった。

わたしはまだ呆然として眠れることなく、しばらく薄闇に広がる畳の平原をその見開いた目で眺めていた。

十七ノ怪

早く。早く寝ないと……。でも神経が高ぶってなかなか寝付けない。

悪戦苦闘しながらも、なるべくにも考えないでひたすら目を閉じ続ける。いくら時間が経過すると、わたしの努力が実ってやっとうとうとし始め、意識が遠のきだした。すうーと意識が沈んでいく。

「鈴音」

がくつ。沈んだ意識が急上昇して頭が弾けたように動いた。せ、せっかく眠れそうだったのに。

毒づいて声をかけてきた鬼に振り返ろうと体に入れたが、やめた。わたしはすごく（特に精神的に）疲れている。もうお酌なんてしてられない。このまま寝かせていただきます。

寝ぼけた頭で心中弦き、また睡魔に身を任せた。たとえ揺さぶられてもわたしは起きない。とにかく疲れているのだ。やっと眠れるんだから。

「おい鈴音」

背後からまた鬼の声が聞こえる。今からお酌なんてしたくない。寝かせて下さい。構わずわたしは寝続けた。

……ん？ 寒い？ なんだか悪寒がする。

ひやりと背中から不穏な空気を感じた。ただならぬ気配にのそり

と上体を起こす。そして目を擦って振り返った。

「――っ」

息と胸が瞬時に詰まった。かつと目を見開いて硬直する。

いつの間にか傍らに鬼さんが立って、わたしを無表情に見下ろしていたのだ。腕を組んで黙っているところをみると、怒っているのだろうか。妖しい紅がいつもより不気味に光り、いつも角をつり上げている口は真一文字に結ばれていて、なんの感情も読みとれなかった。

「どうしたんですか？」

声が震える。直感的に紅い鬼の様子はただ事じゃないと悟り、身体が萎縮する。今起きたばかりだというのに、心臓は早鐘を打っていた。

「あの、どうかしたんですか？」

「お前は理解しているか？」

質問を質問で返されて思わず顔をしかめる。鬼さんは再度低い声でまた同じ言葉を繰り返してきた。

「お前は理解しているのか？」

「何をです？」

「お前はここに残るという事を理解しているか？」

「……はい」

鬼や常闇と付き合っていけ、ということでしょう？　ほかに何かあるというのだろうか。

「鈴音」

呟いてわたしの肩を素早く掴み、それに驚いて身体をさらに固くすると、そのまま強く押してきた。

「な、何をするんです!？」

抵抗するも力の差は歴然。布団の上に押さえつけられた。

「なにを」

「お前は理解しているのか？　ここに残るということを」

強い力で肩を押さえ込まれ、苦痛に眉を寄せる。

なんでさっきから同じ質問をするんだろ。答え方が悪かったって言うの？

わたしは言いようのない不安に包まれ、だんだん恐怖を増していった。背筋が凍り付いて全身に鳥肌が立つ。

「理解しているのか？」

「して、ます……」

「本当に？」

「はい」

鬼は相変わらず無表情にわたしを見下ろし目を細めると、掴んだ肩に力を入れてきた。肌に爪が食い込んで痛い。

「嘘をつくなっ」

「嘘なんて」

「本当は解っていないくせに」

「鬼さ……」

ひゅっと口から息が出たかと思ったら、鬼が私の首を絞めていた。どうして。苦しさに鬼の手を剥がそうともがく。

やめて。離して。息が……できない……。

次第に薄れる意識。
さらに暗くなる視界。

もう、だめ。

.....

びくつと身体が跳ねて跳び起きる。ひどく汗をかいているみたい

で浴衣はしつとり肌に張り付いていた。

「生きてる……夢だったんだ」

どくどく鳴る胸に両手を結んで、深呼吸を繰り返す。

あの夢はなんだったの。どうして鬼さんはわたしの首を絞めてきたんだろう。

腕で自分を抱えて震える。殺されるかと思った。

「ん……」

聞こえた声にぎくりとするが、今の自分の状態に気がついて溜息をもらした。

そうだ。首輪をつけられた後、鬼さんの抱き枕にされたんだ。きつと締め付けられているせいであんな怖い夢を見たんだわ。

冷や汗が背中に残っているものの、どうにか気持ちは持ち直した。鬼から抜け出そうと体をよじる。が、

「……やっぱりだめね」

寝ていても解いてくれない鬼の腕。うんうん言いながらもう一度体を擦るがやはり抜け出せない。ああ、もう。

最近寝る前にお酌をすると、わたしを抱き枕にして寝ることが度々あった。なに気にこれが地味に辛い。

寝返りも出来ずに寝技をくらっているに等しい状態のわたしは、安眠なんていう言葉とは無縁で、数時間この体勢のまま鬼が起きるまで耐えなければならなかった。

わたしも寝てしまえばいいんだけど、息苦しくてそう簡単に眠れないし、同じ体勢をとり続けるので解放されるときには体がぎしぎし痛い。しかも籠に戻ってもまだ十分な睡眠をとる前に起こされてしまうので、結局睡眠不足が解消されることはなかった。

しかもこの紅い鬼。なにしようと思起さない。

わたしが叫ぼうが暴れようがすやすや寝ている。信じられない。

一度寝たらなかなか起きない人、いや、起きない鬼らしい。

諦めて体から力を抜く。深く息を吐けば不安げに鳴いていた鼓動も落ち着いてきてくれた。

青年は今頃何しているのかな。ふと、また青年のことが頭を横切る。

どこに住んでいるんだろう。名前はなんて言うんだろう。青年を知っていた人たちはどうして青年を無視するようになったんだろう。どうしても青年の悲しい顔が頭から離れない。あの表情が頭から離れられないのだ。

ああそういえば、みっちゃんも。彼女もあんな顔をしていたんだ。寂しい、悲しい顔。深く傷ついた優しい顔。そうだ。わたしはかつての親友の顔と、あの青年の顔を知らず知らずの内に重ねていたのだった。

みっちゃん今どうしているのかしら。まだあの白い夜叉みたいな鬼の所で、暮らしているのかな。彼女は幸せに過ごしているんだろうか。

あれが幸せだったのか正直わたしには分からない。

あの冷徹そうな夜叉がみっちゃんを大事にしているとは思えなかった。鬼は残酷で甘い言葉を巧みに使って、人の弱みにつけ込む。夜叉も鬼さんも、わたし達人間をだまして弄んでいるに違いない。

あの青年もそうなんじゃないかな。記憶や名前を消されてしまつたみたいだし。だとしたら名前と記憶が戻れば帰れるのかしら。

そう言えばわたしってこの世界のことなにも分らないのよね。鮮明に記憶が蘇ったこともあってある程度のこととは思いつけたけれど、それでも情報不足だわ。

自分の身を守るためにも、青年のためにもこの世界のことをもつと知らなければ。

後ろで寝息をたてている鬼さんがはたして親切に教えてくれるのか分からないけれど。聞き出すには他に方法なんて思い浮かばない。鬼さんとは話す時間はたくさんあるのだから、今度じっくり聞き込まなければ。

[illegible]

そして紅い鬼にこの世界のことを聞いたのは間違いだっただとわたしは心底後悔していた。饒舌に喋る鬼を目の前にあくびをかみ殺して、こっそり溜息を吐くの繰り返し。まだ終わらないのかしら。しびれを切らしてわたしはちらりと目を上げた。

「そこで俺は一等高価な漆塗りを選んだ。他の奴らは金銀ばかり手に取ったがあれは実は木の葉でナア」

「あの鬼さん」

「俺だけが術を見抜いて宝を持ち帰ったんだ。他の奴らのあの悔しそうな顔が見物だったカナ。そこでだな」

「鬼さん！」

少し声を張り上げて話を止めた。

鬼は小首を傾げてなんだ？ と眉を潜めた。

「それって常闇とどう関係があるんですか？ どう聞いても鬼さんの武勇伝にしか聞こえないんですけれど」

「俺の話が聞きたかったんじゃないの力？」

「違いますよ！ 常闇のことを聞きたいってもう何度も言ったじゃないですか」

イライラしていたせいもあり、怖さも忘れて強い口調で鬼に言った。

何で鬼さんの武勇伝なんか聞かなきゃいけないのよ！ もう色々聞きすぎて飽きたし！

「常闇のことと言ってもナア。お前はどこまで知ってる？」

「えっと、真つ暗で妖怪や幽霊がいて、とてつもなく広い事ぐらいしか分からないです」

「まあ大体そんなもんカナ」

大体そんなものって……。なんてアバウトな。だったら別の質問をしたほうがいいかな。

わたしは眉間に皺をよせたまま、再度口を開いた。

「じゃあ、ここでは人間はやっぱ珍しいんでしょうか？ わたしの他に人間はいないんですか？ ……見たことないですけど」

「昔に比べれば数は減った力ナ。わざわざ人の世に行って連れてくる奴も最近はいないしナア。まあ俺が知っている範囲では人間はお前だけダ」

「ここに来た人間はみんな妖怪になるんですか？」

「妖になる奴もいれば、死んじゃう奴もいる力ナ」

死んでしまう。その言葉にごくりと喉が鳴る。

でも生きていれば妖怪になったとしても、名前と記憶さえ取り戻せば帰ることは可能なのかしら。もしそうなら、例えば彼が妖怪になっているのだとしても、帰ることが出来る。

……。うまくいけば、みっちゃんも……。

また二人に会えるかわからないけれど、聞いておいて損はないハズだわ。知らない間に落ちていた視線をあげて、恐る恐る口を開いた。

「鬼さん……妖になった人達も名前や記憶が戻れば、帰れたりするんですか？」

途端にぎろりと睨まれる。肝を鷲掴みにされた気がしてきゅうつとお腹に圧迫感を感じた。

わたしが逃げる算段でもつけてると勘違いしたのかな。慌てて首を左右に振って声を絞り出す。

「ち、違いますよ！ そうじゃなくて、どういうシステムというか呪いというか仕組みなのか気になっただけで、逃げようとか考えてないです！ それに何度も言うようにわたしは鬼さんと約束したんですから、絶対に逃げたりしません」

「ほぉ」

鬼さんの目が猫のように細められて、明らかに釈然としていない。探るように視線が絡みついてくる。これは完全に腹を立てているわ。

「そんなこと聞いてどうする？」

「ただ気になっただけで、特には……」

「なら知らんで良いかな」

ふいつと顔を背けられた。

どうしよう。今現在何一つ情報が得られていない。これじゃあダメだわ。鬼さんに訊けないならほかの方法を探すしかないけど……。

「あの鬼さん」

「ナンダ」

「他の妖怪にも会ったりしてはダメですか？」

「ダメだ」

「一人で散歩もダメですか？」

「ダメだ」

「現代服が欲しいんですけど」

「ダメだ」

「……話し相手が欲しいです」

「必要ないかな」

にべもない。なさすぎる。それじゃあ何なら良いと言っただろうか。

肩を落としてうつむくと、ふいに髪を梳かれた。

「お前は俺に何も気にせず俺に飼われていれば良い」

「ずっと閉じこめるつもりですか？」

「たまに外へ出してやっているだろう」

「あんな嫌な思いしたくないです。それなら一人で散歩するか、以前お世話してくれた子鬼さんに会って話がしたいです」

「俺が代わりに話してやる。お前が楽しめる話だって聞かせてやるぞ」

さっき自分の武勇伝しか話していなかったくせに。

尖らせようとした口をなんとか押しとどめて強く結ぶ。

「まあまあ。兎に角、飯にしようカナ」

いつものように紅い手が鳴らすと、部屋に乾いた音が響いた。

結局、何も情報を得られないまま食事の時間になってしまった。
粘り強く鬼さんから情報を引き出すしかないだろう。

十八ノ怪

機嫌の良い鼻歌が後ろから聞こえてくる。するりするり何度も櫛がわたしの後ろ髪を梳く。

「鈴音の髪は見事だナア。上等な絹のようだ」

褒められて悪い気はしないけれど、鬼が言つと素直に受け取ることに對して何故だか抵抗を感じてしまう。けれどお礼を言わなければ。でないと途端に機嫌が悪くなって怖い思いをしてしまう。

「ありがとうございます」

心が籠もっていなくとも言わなければいけないお礼は、なんだか空しさを感じる。鬼さんはわたしがそう思っているのを知っているだろうか。

「さて今日はなにをしようカナ」

櫛遊びに飽きたのか、わたしを抱き寄せて頭を撫でる。その仕草に不快感を感じたものの、チャンスだと背後に神経を集中させながらおもむろに口を開いた。

「あの、ススキの場所に、行きませんか？」

「ススキ？」

どくどく鳴る心臓に落ち着いてと懇願しつつも、わたしは言葉を

続けた。

「はい。また行きたいなって思っていたんですけど」

「……ほお？ お前があそこを気に入るとは意外だなア」

鬼は髪を一房とつてくると弄び始める。

もちろんあそこに行っても、鬼さんがいたら青年に会えるわけがない。そんなこと分かってるけど、でも、少しでもチャンスがあるなら。

「ダメ……ですか？」

ちらりと振り返って様子を伺う。背後からなんの言葉も返ってこず、しきりに頭を撫でたり何度かわたしの体を抱き直す紅い鬼。ダメならダメだと言って欲しい。この無言の時間がなにより辛く怖い。

「どうしても行きたい力？」

「え？ ……は、はい」

いきなり投げられた質問に反射的に答えてしまう。確かにどうしても行きたかったけれど、あまり露骨にしまつては色々勘ぐられてしまうんじゃないかな。

落ち着かない心持ちで知らず知らずの内に目がきよるきよる動いてしまう。わたしは自身を落ち着かせようと、こっそり深呼吸を繰り返した。

「どうして行きたい？ 誰か会いたい奴でもいるのかな？」

「えっ」

心臓が跳ね上がった。それこそ口から飛び出るかと思ったくらい。

「い、いるわけ、ない、じゃないですかっ」

明らかに動揺した口調。上ずった声。これなら黙っていた方が良かったと気づいても、時既に遅し。するりと腕ごとたくましい腕に締め上げられ、思わずうめき声が口から漏れた。

「嘘はいかんナァー、鈴音え」

骨と骨が軋み合う音が自分の内側から聞こえてくる。
苦しい。痛いっ。

「俺が気づいていないとでも？」

「やめ……て……」

「鈴音は甘いナァ」

耳に軽く歯を立てられるが、それよりも内蔵が押しつぶされる感覚の方に必死で構ってられない。

「痛い……離して……」

ふっと締め付けが弱まる。そのとたん、畳の上に倒れ込んで痛さの余韻に咳き込んだ。

なんで？ どうして知っているの？ なんで分かったの？

痛みと吐き気に体が震えるなか、疑問ばかりが浮かんだ。鬼はわたしと彼が話しているのを知らないはず。なのになんで？

「お前はやはり油断ならんナア」

強引に肩を掴まれて仰向けにされ、顎を掴まれる。強制的に視線を合わせられれば、煌めく紅が飛び込んできた。

「記憶をとってやろうか？」

記憶をとる？

怯えた目で見返すと目の端で鋭い八重歯が見える。

「そうすればなんの疑問を抱くことなく俺に従う。喜んで体も心も差し出す気になるカナ」

「い、いや……」

「他の奴に見向きもしなくなる」

ぎこちなく何度も何度も首を振る。

鬼の言いなりになるなんて嫌だ。まして心身ともに捧げるだなんて。

「嫌か？ それなら大人しく」

ぎりりと顎に爪が食い込む。

「俺に従っているっ！」

怒鳴り声が頭と体の奥まで轟き響いた。まるで雷がわたしのなかを駆け巡ったみたい。

わたしは本当に落雷にあったように全身を痙攣させ、糸が切れたみたいに意識を途切れさせた。そしてまどろむ闇の中に逃げ込んだのだ。

[illegible]

柔らかな感覚に目を覚めます。

ゆっくり体を起こすと布団のうゑに寝かされ、いつものように白い格子がわたしを囲んでいた。

籠の中に戻されたんだ。

呆然としながら部屋の隅にある灯籠を眺めた。柔らかな光を灯しているのを見ると、まだ眠る時間帯ではなさそうだ。

わたしは鬼さんを怒らせてしまった。これでは青年に会うどころか、籠の外に閉じこめられたまま一生を過ごすことになるのかもしれない。

布団のうえで膝を抱えて丸くなる。

わたしは一体なにをしているんだろう。正体不明の青年に勝手に力になれればなんて思って、勝手に突っ走って。それにこの期に及んで人間でいたいなんて。悪あがきも良いところだったんだわ。

鬼さんの言うように大人しく従って、闇に染まるのを待つしかわたしには許されていないんだ。

みんなそうして人間をやめていく。わたしだって例外じゃない。

もうあの琵琶の音を聞くことはないだろう。青年のことを考えるのはやめて、ここでどう暮らしていくのかを考えなければ。人間にこだわってはいはこの世界では生きていけないのだから。

ぼんやり着物の裾から覗く自分の足の指をみつめる。特に何をする気にもなれず意味なく足先を動かした。

日の光を浴びない肌はわたしが思っている以上に青白い。いつかはまた常闇の妖気とやらにあてられて、また体のどこかしらが灰に染まるんだろう。

わたしは鬼となってこの世界で生きていかなくではならないのかな。死んでしまえば当初の約束が果たされないのだろうか？ たたえ人間のままで居られても、わたしはずっと誰と口を利けることなく、鬼のお酌をして一生を終えるのかな。

重い息を肺から追い出す。焦点の合わない視界が揺れると不意に青年の幻が見えた。無意識のうちに青年を思い出してしまっただろう。

この癖も直しておかないと。もう二度と話なんて出来ないのだから。鬼さんにしられてしまったのだから。

そう、再度深く息を吐いたところではっとして目を見開いた。

「……あつ」

勢いよく顔を上げる。

そうだ。鬼さんにバレたということは、鬼さんも青年のことを既

に知っているんじゃない。そしたら彼は鬼から何かしらの危害を加えられているのでは……。

じつとり手のひらに汗がにじんだ。

下手したら彼が殺されてしまいかもしれない。何とかしないと。ぎゅっと口と両手を、それぞれ強く結ぶ。

わたしが鬼になにをされてもいい。だからもう誰も傷ついて欲しくない。

今度こそ助けてあげたい。それがわたしの自己満足だとしても。愚かだと笑われても。

ふわりと風に揺れたように灯笼の火が揺れた。色を変えて夕闇に部屋が染まる。

鬼がくる。

紅い鬼が。

わたしは行儀良くその場に座り、背筋を伸ばした。

抗うのはよそう。けれども、これだけはなんとしてでも叶えて貰わねば。

十九ノ怪

襖が開かれて紅い影が部屋へ入ってきた。のそりとした遅い動作がよけいに不気味だった。

でも怯んでられない。言わなければならないことがあるんだから。

「鬼さんあの」

わたしが口を動かしたのと同時に、鬼が人差し指を宙で横線を描いた。何をしたんだろうと眉を寄せるが何が変わったのか分からない。

一瞬動きが止まってしまったが、すぐに我に返って口を開く。

鬼さん。

もう一度声をかけた。……つもりだった。

おかしい。口を開けても喉から声が出てこない。かすれ声も小声も、声という声は何一つ出てこない。喉を押さえて『あー』と言ってみるがやはり出ない。

声が出ない……？

今鬼さんがした動作のせいでは？

突然の出来事に軽くパニックになっていると、頭を不意に撫でられ、予想しなかった感覚に体が硬直する。

「お前の鳴き声が聞こえないのは惜しいが、よけいな話は聞きたくないからナァ」

いつの間に籠の中に入ったんだろう。ゆったりとした口振りに背筋が冷え冷えとしてくる。

それにどうということ？ わたしが青年のことを懇願すると踏んで声を出せなくさせたの？

怯えながら顔を鬼へと向けようとしたが、頭を撫でていた紅い手がわたしの顔を厚い胸板へと押しつけ、阻まれる。上等な手触りが顔を覆い、視界が真っ暗になった。

「呆けないよう外へ出していたが。やはりイキの良い雀は籠からは出さんほうが良さそうだ」

籠から出さない。鬼に耳元で囁かれ、血の気が引いて頭がくらくらした。やっぱりずっと籠から出さないつもりなんだ。

そう思った途端に、頭の端から次々と嫌な言葉が羅列する。

一生出られない。誰とも話すことなく、人知れず朽ち果てていく。死んだあとでも籠の中。二度と出られない。

体が重くなった気がして体重を自分で支えることができなくなる。知らずに鬼へ体を預ける形になったわたしの背に手が添えられる。

「まさかお前に想い人がいるとはナァ」

わたしは紫煙の匂いがする着物に埋もれながら、僅かに残った正常心でふるふる頭を振った。

「でもなあ鈴音え。俺はこれでも嫉妬深いんです。お前が他の奴を想っていると考えるだけで腹立たしくて仕方ナイ」

わたしはさつきより強く頭を左右に振って否定した。そんなんじゃない。お願いだから何もしないで。それとも既にな

にかしているの？ 怖い。彼が鬼に何かしようとしている事が怖い。わたしは恐ろしい考えに体を震わせた。

「さてさて。鈴音がいゝ子にするなら俺の考えも変わるんだが。……どうだ？」

こくん、と頷く。

「俺のそばにいるな？」

こくん。また頷く。

「お前は俺のものダナ？」

その通りです。

わたしは大きく頷いた。

「良い子ダ」

頭を押さえつけていた手が優しく髪を撫でる。

これで青年に危害が加えられることは恐らくないだろう。そして青年や籠の外に思いを馳せることもなくなる。

わたしはひたすら顔を埋め続け、溢れた涙を漆黒の布に染み込ませた。

もともと、こういう風になるハズだったんだ。鬼に喰われていなければマシだろう。

そう。今まで陽炎みたいな希望にすがろうとしていただけ。端から見ればなんて滑稽だったんだろう。無いものをひたすら求めているのだから。

これから本来の形に戻るだけ。

[illegible]

紅い月明かりが部屋の中にある籠を照らす。

そこに移るのは無表情な顔に、焦点の合わない腫れた両目。やや垂れ気味の眉。やつれた自分の、鈴音の顔。

籠の生活からどれ程経つたのだろう。起床七回まで数えてきたけれど、そろそろ感覚が麻痺して起床を数えても無駄な気がしてきた。あれからわたしは籠から出されることは無かった。そして声も奪われたまま。何かを手振りで伝えることすら禁じられた。

陽気な声に、おもむろに目をやる。格子戸をくぐっていつものように鬼が入ってきた。

乱暴に傍らに座ると手の甲で頬を撫でてくる。

「また泣いていたの力？ ほら泣くな泣くな。旨いもん喰えば気分も良くなるカナ」

口元に白い柔らかな感触が添えられる。それを両手で受け取り口の中へ運ぶ。

甘い。でもそれだけ。

美味しいはずんだけど、美味しいと思えない。

顔に影がかかるかと思うと、鳶色の手がわたしの頭に触れて離れた。鏡に目をやれば青白い顔に相反する赤い花が髪に添えられている。

「可愛いナア」鈴音は

満足そうに口端をあげてわたしの頬を撫でる。

わたしは目を伏せて首を振った。

「そんなことは無い。どこぞの姫や仙女にも負けてないカナ」

わたしは俯いて虚ろな心持ちで甘いものを噛み続けた。

人形のように大人しくしていれば良い。何も考えないで何も感じなければ、恐れることなんて何もない。与えられたものを受け入れて従えばいいんだから。

こうしていれば、いつか妖怪に変わっていても絶望する事もないでしょう。ただ流されていればいいのだから。

「やはり籠の中は退屈だろう。どうだ？ 貝合わせでもするか？」

懐から巾着を取り出すと、中を畳の上に落とした。カラカラと鳴

りながらハマグリほどの貝殻達が膝の前に広げられる。

貝の内側には鮮やかな色彩で鳥や神獣、仙女達が描かれていた。

「これと同じ図柄を合わせれば良いカナ。……どうした？」

目を上げて、小首を傾げた。

なにがどうしたのだろう？

「興味がないみたいダナ。なら根付をやろうカ。珊瑚や琥珀で作った上物があつたハズだ。そいつをお前にやろう」

貰つても嬉しくない。

視線を落として俯けば、首元の鈴が涼しげに鳴いた。

「鈴音。そう下ばかり見るな」

顎に指を添えられて上を向かされる。

鳶色の肌に朱の模様が枝のように張り巡らされている端正な顔。猫の目のように二つの紅が細められる。

「お前はちつとも笑わないナア。泣いてばかりいたら干からびてしまっぞ」

ぼんやりと紅を見返す。何も感じないのだから、鬼の目も怖くない。そのままされるがままに鬼の顔を眺め続ける。

「お前を見せびらかすのは楽しかったが、こうして一人で鈴音を堪能できるのもやはり良いナア」

ククツと喉で笑い、わたしを抱き寄せた。カシャカシャと畳の上

に広げられていた貝達が膝に押されてぶつかり合う。

「鈴音。お前がこれから先も俺の傍にいるんなら、ずっと人間のままで居させてやる。籠の中に居る限りずっとお前は人間カナ。嬉しいだろう？」

何を今更。小さく首を左右に振るわたしを鬼が抱きかかえれば、熱い首筋にわたしの冷えた顔が合わさる。力強く脈打つ首がまるで生きているみたいに動いて、鬼の言葉を振動させる。

「……鈴音は冷たいナア」

それは顔が？

それともわたし自身？

思案してもすぐさま考えるのをやめる。だって人形は考えたりしない。鬼の望むままに籠の中で着せ替えられて居ればいいのだから。

温かだろうが、冷たかろうが。

人間だろうが、人形だろうが。

もう、どうでも良い……。

籠の中のわたしにとっては、どうでも良いの……。

二十ノ怪

昔と違って子鬼が騒ぐ音も聞こえてこない。まるでこの鳥籠の部屋だけ外界からくり貫かれてしまったような気がしてくる。

布団に何も掛けずに横たわり、天井を向いているお腹の上に両手を置く。

わたしは自分が分からなくなってきた。

今自分が何をしなければいけないのか、何をしたいのか。諦めたのか諦めたくないのか。強がりなのか弱音を吐きたいのか。何も分からない。

鬼に連れ戻されてから、その場その場で感情が牙をむいてわたし自身を蝕んできた。

わたしは既に狂っているんじゃないのか。

もしかしたら常闇に戻ってきた時からおかしくなっているんじゃないのだろうか。

鬼に口付けされて戻った記憶が再生されるたびに疑問が湧き出てくる。

連れ戻されて間もなく宴が開かれた時、初めてこの世界に来た時に比べればずいぶん落ち着いていたわたし。怯えるのもそこそこに騒ぐ妖怪達に目を投げて呆れたり怒ったり。

ススキの宴の時だって、あれだけの妖怪達を前に感情を露わにしたかと思ったら年甲斐もなく大泣きして。

青年のこともみっちゃんのこと。一人勇んだかと思えば、簡単に忘れようとしたり。

戻ってきた記憶はこんなじゃなかった。

怯えながら迷って泣かないで、それでも助けられながらも、道を見据えて真っ直ぐ歩いていた。

それが今はどうだろう。今のわたしはその頃よりも不安定で自身自身が全く見えていない。考えるのも悩むのも放棄して人形に成りすがるうとしている。

でもそんなわたしに代償として与えられたのは残酷な悪夢だった。毎日毎日、懐かしかった日常たちが闇のせいで歪み、ビデオテープのように再生されて目の前に形を作る。

そう、だから今から見る夢だってまた悪夢なんだ。

.....

「ねえねえ、これ見た？」

雑誌の一部を広げてわたし達に広げてみせる美紀。新しい夏服の特集がずらりと掲載されて、もう夏なんだと教室の窓を眺める。

まだ夏本番前だというのに差し込む日光は鋭い。半袖の制服からみえる肌は油断するとすぐに焼けてしまうだろう。

「あたしさ、この水玉のワンピースが欲しいのよね！ 夏休みに叔

母さんの民宿手伝うから、お駄賃で買っ予定なんだ」

「いいなあ、働き口があつて。うちなんか毎日家事やっててもお小遣いアップしないってのに」

隣で口をとがらせて春香が背もたれに寄りかかれば、二つに結んだ髪が背中へ流れる。

懐かしい教室。懐かしい友達。そして窓辺にはあふれる太陽の光。眩しさに目を細めて窓の外を見れば抜けるような青空が広がる。

窓に近寄って日光に肌をさらすけれど、いつもならギリギリとする焼けるような熱さは全く伝わってこない。

「春香」

振り返って気だるげにしている春香に声をかける。

でも春香はわたしを見ないで机に身を乗り出す。

「そつえばさー、次の授業数学じゃない？ マジ数学嫌いなんだけど」

「ねえ春香」

「あたしも数学きらい。国語の三谷先生なら良いけど」

「春香、美紀……こっち見て。わたしが分からないの？」

交互に二人の顔を見て、懇願する。肩を揺すろうと手をかけるが、いつものようにすり抜けてしまう。

「うつそ。美術の沢村先生のほうが良いよ」

「ねえ美紀！ 春香！」

わたしは二人の前で叫んだ。

すると突然、教室の中が赤く染まり夕闇に包まれる。あれだけ眩しかった太陽は姿を変えて、物悲しいオレンジ色の光を放つ。一瞬にして時間が経過したんだろうか。

「……そろそろ帰ろつか。今日塾なんだ」

「大変だねえ。あたしこの間のテストやばかったからさ、塾に行けっとお母さんがうるさくって」

机に投げていた鞆を持って春香達が立ち上がる。

「待って！」

手を伸ばして春香の腕を掴もうと手を伸ばす。しかし、やはり煙のように彼女の腕を通り抜けてしまい掴むことができない。

「ねえ待ってよ！ 春香！ 美紀！」

教室から出ていく彼女たちに叫んで後を追う。彼女たちに続いて教室から出ようとしたが、無情にも鼻先で教室の扉が閉まった。

急いで取っ手に手をかけるが動かない。窓ガラスから廊下を眺めると、あの時と同じようにたくさんの同級生や先生達が挨拶を交わしたり、楽しげに話している。

「ねえ！ わたしここにいるよ！ 誰か！」

バンバン激しく扉を叩いているのに、誰一人わたしの方を見ようとしない。誰も気づいてくれない。

「誰か気づいて！　ねえ！　お願い……」

涙で視界が霞む。嗚咽が喉から漏れると、わたしは肩を落として目を閉じた。ポロポロと涙がこりもせず頬を伝って足下に落ちる。どうして誰も気づいてくれないの？

「鈴音ちゃん……」

背後から透き通る声が聞こえ、びくりと肩を揺らす。

「だ、誰？」

素早く振り向くとさっきまであった教室は無く、暗い暗い薄気味悪い森が広がっていた。辺りを用意深く見渡せばただ暗闇ばかりが広がり、はつきりと見えるのは自分の足下から延びる一本の砂利道だけ。まるでわたしを奥へと誘うかのように森の向こうへと続いている。

「誰か、いるの？」

恐々と聞こえた声を探して尋ねる。

「鈴音ちゃんがいるのはそっちじゃないよ」

森の奥から声が聞こえた。木々のざわめきに紛れて優しい艶っぽい声が流れる。

「こつち……こつちだよ……」

追い風が背中を押してきて、一歩踏みだそうとした足に力を入れて踏ん張る。

「そつちは違う。わたしがいる場所はそんな暗くて寂しいところじゃないわ!」

「もうそつちには戻れないんだよ。……私たちは」

くすくす笑う女の声。生暖かい風に乗ってわたしの耳元で囁く。

「おいで鈴音ちゃん。鬼様を困らせちゃダメ……悦ばせて差し上げないと。……大丈夫。怖くないよ」

「鬼を悦ばせる? 何を言ってるの?」

「それが役目でしょ……約束でしょ……」

「どういうことなの? あなたは誰なの?」

暗い森を見渡すけれど何も見えない。聞こえていた女の声も、もう耳には聞こえない。

何がどうなっているの? 早く、早く帰らないと。家に帰らないと。後ずさりながら教室の取っ手を探った。すると突然、その腕をひねりあげられわたしは苦痛に悲鳴を上げた。

「どこにいくつもりダア?」

「鬼……さん……」

振り返れば紅い鬼。

口を三日月のようにつり上げれば、いつも見てきた鋭い八重歯が薄闇に浮かび上がる。

「お前の居場所はこっちじゃないダロウ？」

鬼がわたしの首に手を添えれば、ちりんと応えるように鈴が鳴る。

「さあ帰ろうか」

「やだっ……嫌っ」

手首をとられて強く引かれる。

引きずられながら真っ暗闇の森の中へ連れていかれる。振り返れば場違いな教室のドアが、四角い光をこぼれさせ次第に小さくなっていく。

「助けて美紀！ 春香！」

闇に覆われて光が見えなくなる。前を向けば、二つの妖しい紅が猫の目のように細められていた。

「もうお前は戻れないんだゾ？ まだ駄々をコネるの力？」

「わたしは帰れるわ！ 光だって持っているもの！」

「光い？」

これ以上無いほど紅が細められた。その下から、また別の三日月がパツクリ開くとそこから見えた赤い物が何かを舐めとった。

「それならさつき喰っちまったがナア」

「え？」

紅がきょろりと何かを見て顎をやる。その先を追って顔を向ければ、その先に何かが見えた。

「あれは何？」

尋ねても返事はない。仕方なく答えてくれない鬼に背を向けて、その何かに駆け寄った。傍まで寄って目を懲らすが暗闇のせいでもうまだよく見えない。

思い切って震える手でその何かに触った。

冷たい。

それに濡れている？

眉を寄せてよく見ようと屈み込んだ。途端にわたしは目眩に襲われる。

白い肌を染める真つ赤な血。傍らに転がる二つに割れた琵琶。いつも閉じていた目は見開かれ、虚空を見つめている青年の姿。動かない彼の姿。黒い地面に深紅の血が花のように広がっている。

「い、い、嫌っ！ 嫌っ！」

うそ。
嘘よ。

信じゃない。こんなの信じないっ！

「助けて！ 誰か助けてえ！」

もうやめて！　頭がおかしくなる！　両手で頭を抱えてぎゅっと目を閉じる。上も下も分からない。どっちが左でどっちが右かも分からない。わたしはありつたけの声で叫んだ。誰に聞こえなくてもかまわない。とにかく叫び続けなにと。

助けて！

たすけて！

タ
ス
ケ
テ
！

[illegible]

「鈴音！」

名前を呼ばれてはつと深く肺に息を吸い込んだ。
薄闇の天井に浮かぶのは白い格子と二つの紅。一瞬ここがどこか分からなくて何度も目を動かした。

「悪い夢でも見たか？」

そつと額に手を置いて、眉を寄せながらわたしを見下ろす鬼。夢から覚めたんだと分かった途端に、がくがく顎が震えた。

やめて！

口だけで叫んで額に置かれた鬼の手を乱暴に払った。人形になるんだと決め込んでいたはずの心が悪夢にあっけなく崩され、久しぶった感情が沸き上がり爆発する。

乱暴に枕を引つ掴んでそこに顔を埋める。あいかわらず声なんて出ないけれどそんなことは別に良い。構わず涙を溢れさせて心を叫ばせる。

もう嫌だ！ 鬼に手を出されなくても、綺麗な着物を着られても、自由がなければ、友達も家族もいなければ意味なんて無い！

……家に、家に帰りたいよ！

鬼が傍らにいるのも忘れて泣きに泣く。今この時ならひと思いに食べられても良いと本気で思った。飼い殺し生活なんてもう耐えきれない！

喉から苦しい呼吸音が唸り、出たり入ったりを繰り返す。そして時折むせては咳込んだ。

「そう泣くな」

頭に大きな手が添えられゆったりと撫でられる。

「しかしお前を籠から出すわけにもいかないし、他の奴を会わせるのも気が進まんしナア」

ふむ、と鬼が唸る。わたしは枕からそろりと顔を出して滴のついたまつげを上げた。鬼は顎に手を当てて斜め上を睨んで考えている仕草をしている。

「物やつても喜ばん。美味しい物もダメ。どうしたものカナ……。いや、まあいい」

生暖かい舌が目元を撫で、涙を拭い取る。

「時間はあるんだ。じきに慣れる」

そう言ってわたしのあまたをぐしゃっと撫で回した。

鼻をすすりながら目を何度かぎゅっと閉じる。それから息を深く吐いて枕を胸の前に抱き寄せた。

だめ、だめ。人形に戻らないと。感情を捨てないと。

何も感じない。何も思わない。何も望まない。わたしがこの世界で出来るのはそれだけ。

心に刷り込ませるように何度も何度も自分に言い聞かす。二度と泣き叫ばないように、夢の中でも傷つかないように。

心の中にまた自分を閉じこめる。そうすれば興奮して上がった熱も意識も、波のように引いていく。かわりに虚ろが忍び込んで心に広がり覆いつくす。

こうすれば、もう大丈夫……

「鈴音」

閉じていた目を鬼の舌で無理矢理こじ開けられる。既に人形に戻ったわたしが抵抗もせずに大人しく従えば、顎に指が添えられ顔を上げられる。

「目を閉じるナ。俺を見る」

言われたとおり瞳を鬼へと向ける。

白々しく笑んだ口元とは真逆に、二つの紅は妖しくも冷たく煌めいている。鬼がそつとわたしの頬を撫でて、耳元に口を寄せてきた。

「お前が例え人形になろうが妖になろうが俺は手放さない。鈴音はずっと俺の雀よ」

わたしが抱きしめていた枕を取り上げ傍らに放ると、おもむろに感覚が鈍くなった体にのし掛かってくる。

「この先お前を味わえなくとも、傍に置き続けるサ……」

首筋に顔を埋められれば、熱い吐息が掛かる。

背中に腕を回されれば、己の身の軽さが分かる。

体に体を寄せられれば、鬼の紫煙の香りが自分に移る。

でもわたしは人形。鈴音という名前の人形。だから何も感じない。なにも思わない。

もう人間じゃない……。

わたしは心を捨てた。自分を捨てた。

鬼にならずとも闇に蝕まれて、わたしは闇の中へ堕ちていった。

序ノ怪

人間のままでいたい。妖怪になりたくない。
でも苦しい。どうすれば良いのか分からない。
恐怖に吞まれて光を思い出すこともままならない。

わたしを食べて。ひと思いに殺して。
声は戻らず紅い鬼に目で懇願するが「そしたらお前の友を代わりに食べてやる」と言われて叶わない。

鬼はわたしをどうしたいんだろう。
起きていても粗末にするわけでもなく、ただ生かす。
でも眠りにつけば呪いをかけて責め立てる。

もう見たくない。夢も現実も見たくない。

膝を抱えて籠の隅。涙はようやく枯れて溜息も出ない。あるかな
いかの呼吸を繰り返す。

いつからか籠の中で何かが動かされることも無くなった。鏡は覗
けば何が映るか怖くて触れていない。布団は夢を見るのが怖くて敷
いていない。小さな和箆筥は必要なものなんて入っていない。

もう良い。

もういらぬ。なんにもいらぬ。何も見たくない。

もう追ひ詰めで。

もう追ひかけてこないで。

もう夢を見させないで……。

一ノ怪

人形になつて幾日か。

夢の中へ逃げ込んでもそこもまた闇。狂気を孕んだ夢は姿をより現実的に変えていき、わたしを追いつめる。

これはただの悪夢じゃない。紅い鬼の嫉妬にも似た呪いが作り上げた夢。

悪夢の中では人形にすらなれない。捨てた心を押し付けられ、わたしは必死で走り逃げるだけ。現実では枯れた涙も、ここでは感情と共に垂れ流す。

自分の荒い息遣いが耳につき、裸足に湿った土がこびりつく。月の光が僅かに木々の輪郭を浮かび上がらせ、細い枝は生きているかのように手招きをする。

走る度に首の鈴があざ笑う。後ろを振り返れば闇に紛れて見える紅。……足が痛い。いつまで追いかけてくるの？

暗闇でよくみえない道無き道を手探りで走り抜ける。木の根を越えてぬかるんだ地面に足を取られても、足を動かすのをやめてはいけない。

逃げないと。戻らないと。道からずいぶん外れてしまった。早くあの砂利道に戻らないと。

急いている気持ちとは裏腹に、心臓や肺は悲鳴を上げて足は止まってくれと泣き叫んでいる。でも止まらない。止まるだなんて出来ない。

おかしい。夢の中のハズなのに。苦しさも地面の感触も、まわりつく湿気もひどく現実味を帯びている。

「あつ」

石につまづいて地面に突っ伏す。湿った土の臭いが鼻の奥をつんと突いて、疲労しきった肺に滑り込んだ。冷たい泥が、体のそこかしこに張り付いて体温を奪う。

しばらく肩を上下させて呼吸の乱れを整える。長く走っていたせいか酸欠状態になって頭がくらくらする。汗も滝のように流れて、雨にでも降られてずぶ濡れになった時と同じ。生ぬるい風が吹けば体温と一緒に意識まで持っていかれそう。

そうやっていつまでも倒れて居たかったけど、すぐさま意識が研ぎ澄まされた。鼓膜に心臓の悲鳴が聞こえ、それに紛れて紅い足音が近づいてくる。

だめ！ 立って逃げないと！

限界をとうに超えている体に鞭を打つ。力を入れて奮い立たせるも、怯えているように震えて動いてくれない。お願いだから動いて！ 追いついかれる！ それでも体は悲痛に唸るばかりでわたしの願いを叶えてはくれない。

土の上で溺れているみたいに手足をじたばたさせてもがく。少しでも遠くへ。枯れた落ち葉の海を必死で這おうと腕を伸ばした。

「立てないの力ナ？」

背後から掛けられた声。怯えて顔を強張らせても、もう遅い。襟首を掴まれて一気に後ろへ引つ張られる。

地面が急激に離れて放り投げられれば、背中に強い衝撃が一瞬にして広がり、内蔵まで打ち震える。強く当てられた木は枝を揺らし、わたしと鬼との間にまだ青い葉を数枚降らせた。

「まゝだ戻ろうとしているの力？ いい加減諦めたらどうだ？」

心臓が痛い。足が痛い。息が苦しい。背中 of 激痛に喘ぎながら木にもたれ掛かり、硬い幹の上を滑ってずるずると足を崩した。

「……痛あつ」

しゃがんで前屈みになれば、途端にびりつとした痛みが背中に走る。痛さに顔をしかめていると、上から鼻を鳴らす音が聞こえてきた。

「痛いとは結構なことダ。俺の言いつけを破った罰力ナ」

「言いつけ……」

滲む目で紅い鬼を見上げた。腕を組んで、牙が見えるくらい深く笑んでいる。でも冷たく鋭い眼差しは決して笑ってなんていなかった。

「俺は他の奴らと口を利くなと言ったハズだ。なのにお前は破ったあげく、尻尾まで振るとは。……ナア？ 鈴音え」

「鬼さんが……思っているような……仲じゃ、ないです」

ヒューという呼吸音と共に掠れた声で力無く応える。鬼が目前で腰を落とし、指でわたしの顎を持ち上げる。

「ほお？ 想い人じゃないと？」

細められた紅から逃げるように両目を閉じる。

そうだ、と返事するのが不思議と辛かった。ほんの少し会っただけけれども、恋愛とはほど遠い想いだけでも。友達とも家族とも違う気持ち。

口を何度か開け閉めするが、何も言えずに黙る。なんて返事をして良いか分からなかった。好きとは違うけれど、でも、違うとも言いきれない。わたし自身、青年に対する気持ちに自信が持てなかったのだ。

「答えんカア……」

そつと顎から指が外される。薄く目を開けば、紅い鬼はニヤリ笑んでわたしから一歩離れた。

「逃げナ」

「え？」

聞こえた声に眉を寄せる。

「さっさと行け。獲物がとまっついてはつまらん」

ずるりと赤い舌で口端を舐めあげる。

何を言っているの？ 逃げろって？ わたしは鬼の意図が分からず、戸惑いつつも、言いようのない緊張から体を震わせた。

「ナンだ逃げないのかあ？ それならたった今、骨の髄まで味わってやろう力。なあくに夢の中ダ。ここならお前を喰らっても問題はないだろうヨ」

両脇を持ち上げられ、無理やり立たされる。髪が揺れて露わになった首筋に、鬼の舌が乱暴に這いまわり胸元の襟に鶯色の手が近づいた。

「嫌っ」

伸ばされた手に、わたしは鬼を突き飛ばすとその脇を死に物狂いですり抜け、転ぶように駆けだした。

「そうこなくっちゃあナァー。よし、それじゃあ十数えてやろう力ナ」

後ろを振り返らず傷だらけの身体を引きずってひたすら森の中を走る。

自分の吐息に混じって背後から楽しげな声が響く。

「ひとあつ。ふたあつ」

もう足が痛い。背中が痛い。

顔を痛みに歪ませている間にも、高らかな紅い声が追いかけてくる。

「みいつつ。よおつつ。いつつつ」

肺が痛い。息が苦しい。

喉が締め付けられる。

「むうつつ。ななあつ。やあつつ。ここのおつ」

心臓が痛い。頭が痛い。

でもだめ。止まったらいけない。早く逃げなきゃ。早く戻らなきゃ。

「とお！」

響いてくる低い声と同時に、森が一際大きくざわめいて闇が動く。吹いてきた突風に急き立てるように背中を押されれば、あっけなく地面に倒れこんだ。

「ククツ……さーて、追いかけるとするカァ！」

狂喜じみた鬼の声。

ハッとして身体を無理矢理起こし、がくがくと軋む体を非情にも叱咤してまた駆け出す。

やめて！ もう来ないで！

追いかけて来ないで！

泣きながら走り抜ける背後で、狂ったように笑う声。無邪気な悪

意に笑う三日月。鬼の本性を露わにさせて追いかけてくる。

青年と口を利いたことが、そんなにも腹に据えかねる事だったんだらうか。ここまで狂気に歪んだ紅い鬼を見たことがない。

いつになったらこの鬼ごっこは終わるんだらう。捕まえられても立場が逆転することは決してない。

じわじわと光が削られていく。森が深くなる。帰り道が分からない。

暗い森に響く、泣き声と笑い声。

むせるような吐息が近づいてくる。軽やかな足音が背後に迫る。

——もうやめて。

なびいた髪に、鋭い爪が伸ばされる……。

.....

頭を撫でられて重い瞼を上げる。

歪んだ視界に薄暗い部屋。浅い呼吸を繰り返し、鉛のように重く感じる体は汗のせいで冷えきっている。まるでさっきまで走っていたみたいに。

また眠ってしまったんだ。眠らないように、気をつけていたのに。心臓の鼓動が耳元まで響いてうるさい。頭は割れそうに痛い。最悪な目覚めだ。

「いゝい夢が見れたか？ ……鈴音え」

耳に吐息を感じてびくりと体を震わせる。

目を上げれば笑う三日月に覗く牙。冷たく見下ろす妖しい紅。長い指が前髪を掻き上げてそのまま後ろへ滑らせる。

——鬼さん。

口を開くもやはり声は出てこない。夢の中で散々喚いていた悲鳴も泣き声も今はない。出るとするなら僅かな吐息だけ。

「鬼ゴトは楽しかったナア鈴音。また遊んでやろうか？」

やつれているであろう自分の顔に鬼の手が添えられる。夢も現も、わたしに逃げ場なんてものはない。鬼はどこまでも追いつめてくる。

白い籠の中。懐かしかった青年の声も、もう聞こえない。妖しい旋律も耳へ届かない。

ただひたすら悪夢が繰り返される。

二ノ怪

眠るのが怖い。でも起きて人形になっ
ていればなにも怖くない。
籠のはじっこで膝を抱えてさえい
れば、恐怖を感じることもないの
だから。

布団の上に押さえつけられても、
悪夢に引きずり込まうとする睡
魔にも心の底で耐え抜いた。

いくつもの闇が過ぎ去って、灯籠
の明かりの大小が繰り返すのを
見続ける。いつしか膝を抱える腕
に灰梅が染まれば、空っぽの心に
声が響く。

たとえば、灯籠の明かりが小さい
時ならこんな声。懐かしい小さ
な気持ちこそろりと覗く。

・・・・・・・・・・・・・・・・

奉公から帰ればとんだことになっ
てんなあ。まさかあのチビが帰
ってきてるだなんて聞いたときは
そりゃ驚いた。

しっかしあれは生きてるんだかなあ。
天井裏からこっそり覗いて
みたが、ありや目え開けてはいるが、
心ここにあらずってえやつだ。

ずいぶん顔立ちも大人になってつから、てつきりお手つきかと思
ったんだが、仲間から聞いた話じゃあそうじゃないらしいし。

ちよつと前までは外に連れ出されていたみたいだが、どうしてま
た籠なんぞに入れられてるんだ？ また余計なことしてぶち込まれ
たか？

なんにしろ、あんな人形みたいになっちまって。紅の鬼様はどう
するおつもりなんだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

子鬼の声に天井を見上げたくても、それすら億劫だったし、自分
の五感がまともに働いているかも疑わしい。ずっと俯いたままぼん
やり畳の編み目を見つめる。

聞こえなかった声までもが聞こえるなら、やはりわたしの耳はお
かしくなってしまったんだろう。

たとえば灯籠の明かりが大きくなる前の艶っぽい女の声。

噂好きな声がひらひら舞って優雅に羽ばたく。格子の向こうから
聞こえてくる。

・・・・・・・・・・・・・・・・

鬼様はまだあの人間を飼われているみたい。

こっそり囁けば「妖にはなっていないの？」と興味津々に皆、頭を寄せてくる。私は得意げに胸を反らして尻屋の扇で顔をあおぐと、皆を一瞥して頷いた。

「もちろんよ。ずっと貪欲の鬼様のお屋敷にいるみたい」

「そうなの？ 私見てみたいわ」

「それがね、誰にもお見せにならないらしいのよ。ここだけの話、鬼様ったらずっとその人間にご執心だそうよ」

扇子で口元を隠しながら、目を輝かせている紬に顔を寄せる。途端に隣で聞いていた緩が、口を挟んでくる。

「ねえその話本当？ だって前に絹と綾がお世話してたの、私見たことあるわよ」

「それずっと前の話じゃない。最近よ、さ・い・き・ん」

「良いなあ。私も見てみたかった」

「でももう妖怪になってるんじゃないの？ いくら鬼様に飼われているからって、ねえ」

口々に言う皆を私は見回してから、声を潜めて言った。

「まだ人間。しかも鳥籠に入れて飼われているんですって。今度お姐様が貪欲の鬼様に頼んで、見せてもらうつもりらしいわよ」

ひそひそと艶やかな唇を隠しながら囁き合う。

しばらくはこの噂話で暇を潰せそうね。暇さえなければ妙な牽制も起こらないし。またお姐様にお話をおねだりしなくちゃ。

紅を塗った唇を指先で隠して、ぽつり笑みをこぼした。

・・・・・・・・・・・・・・・・

聞こえた声のように、友達とくだらない噂で夜遅くまで盛り上がっていた時もあった。たとえしんみりする内緒話だったりしても、必ず朝がきてすべてを洗い流してくれた。

今は懐かしい友達との思い出。ほんの一瞬だけ蘇るも、すぐさま霧になって霞んでしまう。

いよいよ灯籠が明るく灯れば今度は紅い声。
ずつとずつと途切れることなく続く声。

寝ても覚めても聞こえる声。

甘い残酷な、鬼の声。

格子がしなる音が聞こえ、籠の隅で膝を抱える。重い頭はまったく働かず、酸欠のせいかクラクラする。霞む視界に紅い足が見えたら、骨ばった手が頬をなぞるように撫でた。

「鈴音」

呼ばれてのそりと顔をあげる。 たったそれだけで息が浅くなり、呼吸が僅かに苦しくなる。

「隈が出来ているじゃあないか。きちんと寝ているの力？」

浅い息を吐き出して小さく顎を引いた。

眠りたくない。夢を見たくない。それは鬼さんが一番よく知っていることなのに。

「せっかく寝入っている間でも会えるように術をかけてやったのに。お前はツレないナア」

覚めれば声出ぬ白い籠の中。眠れば泣き叫び、追い回される暗い森。どっちが不幸なんだろう。どっちがマシなんだろう。力の入らない腕で膝をさらに抱き寄せる。

「鈴音。そろそろ痣をとってやる。肩を見せてミナ」

襟元を掴んで肩を露わにする。ついこの間まで二の腕にあった灰梅は肩にまで上り、覆うように肌を染めていた。

「痣の移動が早いナア」

痣を眺めて鬼が呟く。端正な唇をそこへ寄せると口を開いて痣を吸い寄せる。鬼が顔を上げれば、肩にあった痣は跡形もなく消えて青白い肌があるだけになった。

離れた鬼がわたしの顎を掴んで片眉をつり上げる。そして冷たい視線を投げてくる。

「お前はまだ家に帰りたいと思っているの力？ それとも想い人に会いたいと願っているの力？」

想い人。青年のことか。

本当に紅い鬼が想っているような仲じゃないのに。

目を閉じて鬼の手から顎を逃がす。少しの抵抗があっただけで、鬼はそれ以上力を込めたりせず、顎を離れた。

「なあ鈴音。俺は猶予をやったハズ。常闇に来る前に時間ならたっぷりあっただろう？ それなのにまだグズグズ言うつもり力？」

厳しい口調でわたしに叱りつける。わたしはそれを、漠然として聞いていた。

「俺は約束を守ったぞ。今度はお前の番だろう？」

ぐつと強く肩を掴まれ、痛みになんだけ眉を寄せる。

なら具体的に何をすればいい？ きちんとお酌はしてきたし、帰りたいとも言っていない。他に何を望むの？

僅かに顔を上げて目で訴える。

どうして他の人と仲良くしちゃいけないの？

どうして常闇のことを知ろうとしちゃいけないの？

なけなしの感情でそう言い返したくても、声が出ない。枯れたはずの涙が小さな粒となって一筋流れる。抱えた膝にそれを押しつけ

て拭くと、諦めたようにそのまま顔を伏せた。

「鈴音。俺を見る」

言われて渋々、鈍い目元を押し上げて紅の瞳を見つめ返す。鬼の妖しさが滲み出る眼差し。視線を合わせただけで目眩がしてくる。

「違う違う鈴音。よく見るんだ」

言われて仕方なく一度目を閉じて、また鬼の眼を眺める。先ほどと変わらない紅い瞳。じっと眼を細めてより凝視する。

しばらくそうして見つめあっていると、ようやく鬼が動いて溜息を漏らした。

「……違うんだよナァ」

また深くはあと溜息をついて、角の根本をぼりぼり掻いた。何が違うというんだろう。意味が分からなくてぼんやりと鬼の顔を眺める。鬼の望むものが分からない。

「さあゝてさて。これから飯にでもする力ナ。お前さんが食べやすいヤツを作らせたんだガ」

わたしは首を振った。何もしたくない。何も食べたくない。何をするのも気が進まない。ぎゅっと自身を抱きしめて俯き、鬼から顔を背ける。もうそつとして欲しい。もうなにもしないで。

「なんだ鈴音。ソノ態度は？ なんならまた夢の続きデモみる力ア？」

ドクンと心臓が高鳴って喉へ飛び上がる。吐き気が沸き起こり思わず口元を手で覆った。ガクガク体が震え、目眩もひどくなる。

……嫌。嫌だ。もう見たくない。見たくないつ。追い回されたくない！

髪が乱れるのも気にせず、頭を激しく振る。

もう見たくない。追いかけられるのはもう嫌だ。逃げてても逃げても、追いつかれて押さえ込まれる。それから散々なじられては、わざと逃がされて追われるの繰り返し。

わたしの怯えをみてか、鬼が口を裂けさせて牙を見せつけた。

「そうダ、そうしよう。最近寝ていないんだろ？ たっぷり眠らせてやろうカナ」

この上なく嬉しそうに笑う鬼の顔。伸ばされた手が顔をすっぱり覆って呪いをかける。両手で退けようとものがくが意味はない。食欲がなく、まともに食べていないのだから尚更だった。

「おやすみ鈴音」

手足が痺れて強烈な眠気が浸透していく。ぐにやりと意識が回れば、次第に自分のまわりも暗転する。

やめて。

眠りたくない。

今までは悪夢でも良いからと夢の中へ逃げていたのに。目を覚ましている時より良いと思っていたのに。気づけば眠るのも恐ろしく感じるほど、紅い悪夢から逃げていた。

そして一度睡魔に捕らわれ夢に堕ちれば、今度は鬼から迷惑う、逃げてても逃げてても終わらない鬼遊び。

歪んだ意識で足が地面の感覚を掴めば、
またもやあの暗い森にわたしは佇んでいた。

三ノ怪

湿った空気が頬を撫でる。途方に暮れながら辺りを見回す。

暗い木々が生い茂る森の中。ずいぶん奥まで走ってきたのか、砂利道どころか拓けた道すら見あたらない。

久しぶりの夢の中。見たくもない悪夢の中。

まだ鬼さんの姿は見えないけど。とにかくここから離れた方が良さそう。じりつと慎重に足を動かしたその時。

「どうダア？ 久しいだろう？」

悲鳴も上げられないくらい驚いて、素早く振り返る。起きているときよりも、細めた眼を妖しく光らせてこちらを見つめる。

「鬼さん……」

「ずいぶん眠るのを拒否していたナア。起きている鈴音は人形みたいで可愛らしいが、ちと面白味に欠けていけないカナ」

ズサツと落ち葉を蹴って一步踏み込んでくる。わたしはそれに合わせて、一步後退する。

「いけない雀ダア」。嘘はつく、言いつけは守らない、飼い主以外のやつに簡単にさえずる」

ゆったりとした歩みと口調。それでもどす黒い気配をじわじわと漂わせ、笑っていない目を更に細める。

「俺には懐かないクセに。困った雀力ナ」

震えが止まらない。手を握り合わせるのさえままならず、膝も笑って上手く立っていられない。自身を抱きしめるように抱えて目を伏せる。

「閉じるなっ」

言ったとほぼ同時に顔を押さえつけられ、まぶたをこじ開けられる。

「人形になどさせないゾ鈴音。ここで喉が裂けるマデ鳴き続ければ
イイ！」

「離してっ」

驚掴みする手を剥がして、鬼の束縛から抜け出す。

「そんなに……そんなに他の人と話したのが、いけなかったんですか？ 本当に鬼さんだけと、は、話さなければ、ならなかったんですか？」

顎が震えて呂律が回らない。いちいち舌を噛みそうになりながら、声を抑えて紅い鬼に訴えた。

「と、常闇のこと、だって。どうして、教えてくれないんです？
ここで暮らすのなら、むしろ、知っていても良いはずなんじゃ、ないですか？」

そうだ。どう喚いたって藻掻いたって常闇で暮らすほか道はない。だっただら少しでもこの世界のことを知って、いかにして過ごしていくか学ばなければいけないはずだ。

そのへんについては鬼さんだって快く思ってくれたって良いのに。

「それを決めて良いのは俺だけかな」

「理由になっていませんっ！」

あらん限りの声で叫び返す。そうでもしていなければ、夢の中にいるにも関わらず失神してしまいそうだからだ。

やれやれとでも言いたげに紅い鬼は肩をすくめる。

「勘違いしていない力？　そもそも俺はお前を味わうために飼っているんだ。お前をほかの奴らと仲良くさせる意味なんざ、マツタケ無い」

「そんな……」

「お前を喰らわないのも約束を守っているに過ぎん。俺はお前ら人間と違って、約束は違えん」

また一歩踏み出してくる。

「ああ、だが今は夢。何があっても覚めれば元に戻る」

暗闇に紅が浮かぶ。

「……ソウ、ナニガアツテモ、ナア？」

見えた牙に、瞳に、夢の中で意識が飛びそうになる。後ろへよけて転びそうになりながら、わたしは駆けだした。

「そうダ逃げる逃げる！ 簡単に捕まえてしまつてはツマらん！ もつともつと走れ！」

鬼さんは狂つてる。話ができるとは到底思えない。もともと変だとは思つていたけれど、そんなレベルの話ではない。異常としか言いようがない。

いくつかの木の根を飛び越えて茂みをかき分け進んでいく。息も絶え絶えになつたころ、わたしは限界に達して足を止めた。辺りを見回す。

あそこなら大丈夫そうだ。

近くにあつた大きな古い木の後ろへ隠れ、草陰で息を潜める。そして紅い息づかいに怯えながら目を凝らして道らしき物がないか暗い視界に視線を走らせた。

あの砂利道をとにかく探さなければ。ただ自分が見ていた夢とは違つて鬼に塗り変えられてしまつている。道があつたとしてもあのドアがある確証はない。そもそもあつたとしても狂つた鬼さんから逃げられるのかどうかも分からない。

「はあ。それにしても……」

鬼さんはどうしてあんなにおかしくなつてしまつたんだろう。夢の中にまで現れて。

泥だらけの足を抱えて深く息を吐くと、肺と共に心までしぼんだ気になった。ぬるい風が汗ばんだ肌を撫でて、より悪寒を酷くさせる。

鬼さんがおかしくなった原因はなんだろう。

現実でわたしが人形になって無反応を決め込んだからか。それとも青年と話したことが気に入らなかったからだろうか。ううん、もしかしたら全然別のこともかもしれない。

なににしても鬼さんがあんなんじゃない、話し合いなんてできそうもない。捕まったら夢の中を良いことに何をされるのか分からない。想像しただけでも生きた心地がしないわ。でもどうにかしないと……

「さあゝてえ。どこに行った力」

思案していた頭が強制的に中断される。体を伏せて息を潜めた。今にも鳴りそうな歯を食いしばって体を小さくさせる。

「まったく何を怖がるんだ鈴音。お前が望んでいたことをしてヤロウというのに」

独り言をぶつぶつ言っているのを見たところ、まだ気づかれないみたい。すぐそばで落ち葉を踏みしめる音がする。隠れている木のむこうに鬼がいるんだろうか。

息が早くなるのを必死で堪えて両手で口を塞ぐ。自分の脈打つ音がやけに響いた。耳元で太鼓でも鳴らしているみたいだ。

「色恋がしたかったんだろうナア」

舌を舐める音がする。自身が舐められたわけでもないのに、耳に

しただけで全身が栗立った。

「それなら俺が直々に相手をしてヤルのに」

色恋？ 聞き慣れない言葉に眉を寄せてみる。えっと、恋愛がしたい…… というよりも艶っぽいことをしたいとか、そういう意味なのかしら。

だとしたら鬼さんは勘違いしている。わたしはそんなことは望んでいない。青年に対してだって一度たりとも思ったことはない。もしその勘違いが原因だとするなら、なんとかして誤解を解ければ。

でも今はこのままやり過ぎて、道を探さないと。耳を澄ませていると次第に足音が遠のいていく。わたしは低姿勢のまま、じりじりと茂みに沿ってその場を離れた。

「あ…… った……」

やっと見つけた。正直本当にあるなんて思っていなかった。薄暗い空間に浮かび上がる灰色の道。ふらふらしながら砂利道に近寄ってその先を見据えた。

どっちが正しい行き先なんだろう。前と後ろの道を交互に見比べる。

光があふれていた教室のドア。再びそこへ駆け寄ったら今度こそ、ドアはその向こうへわたしを入れてくれるのだろうか。

顔をあげて、砂利道をゆっくり歩き始める。そして何かにせき立てられるように、わたしは駆けだした。

もうごちゃごちゃ考えたくない。とにかくあそこに行かないと。考えるのはそれからだ。

両横を暗い木々が流れてわたしを見送る。時折ざわざわとヤジを飛ばしても、わたしは構わず走り続けた。

やがて見えてきた教室のドア。一度立ち止まって肩で息をしながらゆっくりそれに近寄った。

ドアは開かれてままだ。わたしが目の前に立っていても静かに入り口の隣に佇んでいる。

「わたしを入れてくれるの？」

ドアに語りかけて一歩近づく。ドアの向こうは夕暮れで朱く染まり、遠くで喧噪が聞こえるも誰の影もなかった。

「帰って……いいの？」

そつと入り口の枠に手をかける。

「鈴音ちゃん」

聞こえた声にぎくりとして振り返る。
またあの声。女の人の、澄んだ声。

「なに……？」

「逃げるの？」

どくんと心臓が大きく高鳴った。咎めた響きが確かに耳に入ったはずなんだけれど、振り返った先には誰もいない。ただ暗い森が不気味に広がるだけ。

「……誰？ なんなの？ 誰か、いるの？」

訊ねるも、返事をする者はいなかった。生ぬるい風が髪と頬をいたずらに撫でてきて、それがより恐怖心を煽る。わたしはしばらくその場に佇んで呆然とした。

逃げるの？

何度も言葉が鼓膜に反響する。

うつん。もちろん、もちろん逃げて良い訳が無い。わたしはここに残らなければいけないんだから。そう、自分で決めたんだから。ふらりふらりと、よろめきながらドアから離れる。

もうわたしがいて良い場所ではない。戻って良い場所じゃない。もう誰かが傷つくのは嫌だ。たとえ仲の良い友達でなくとも、わたしのことを忘れているとしても。

そう分かってる。わたしは分かっている。けれど……ただ……俯けばボロリと涙が滴り落ちた。

帰りたい。覚悟はしていたし、その気持ちに嘘は無かった。でもどうしても今の状況に耐えられなかった。

疲れて疲れて。すべて無かったことにして、家族のいる家に帰り

たかった。友達に会いたかった。明るい場所に戻りたかった。けれど、今は全て叶わない。

「良い子ダ」

背後から、紅い鬼の声。

肩を落として立ち尽くすわたしを、這うように鳶色の腕で腹の前を交差させ、鎖みたいに絡めとった。

「そうさ、お前のいる場所はそっちじゃナイ。ようやく分かってきたジャアない力」

きつく抱きしめられたら、吐息と共に気力まで絞り出される。夢なのに籠の中にいる時と同じように、思考がぼやけて霧がかったくる。

「おいで鈴音。ご褒美に起きたら甘あゝい水をやるからナ」

鬼がわたしの首筋に顔を埋めると同時に、わたしは意識を涙と共に闇の中へ落としていった。

四ノ怪

夢と違つて気もそぞろ。追い回されていた時には目まぐるしく回っていた頭も、今は亀ほどの遅さでしか動かない。

部屋の格子から差し込む月の光が籠の中を照らして、わたしと鬼を薄闇から浮かび上がらせていた。

「ようやく慣れてきたようだナア」

わたしを膝に抱えて鬼が満足そうに笑ったのが背中越しに分かった。わたしの頭や腕を撫でては、機嫌良く鼻歌を歌っている。

特に抵抗することもなくされるがままにしている。心なしか指先の感覚が鈍い。顔の筋肉は動くことを忘れて、代わりに無表情な能面を張り付けている。笑うこともなく鳴くこともなく、本物の人形になったようだ。

鬼はよほど機嫌が良いみたいで、いつもなら人形な態度に口元に笑みをたたえながらも鋭い視線で突き刺さしてくるのに、今はお酒を飲んでいる時と同じくらい、上機嫌でわたしをやきつく抱きしめ、毛繕いでもするかのように首筋を舐めてきた。それにも無反応な自分に心の底で絶望した。

「そのうちここが居心地良くなって、自ら外へなんて出たくなくなるナ。ここならお前が怖くて仕方がない妖怪共もないし、あざ笑う奴もいない。籠の中にいるなら上等な着物も美味しい飯もたくさんやるからナ」

籠が居心地良くなる。そうなたらどうなるんだろう。飼い慣らされて、鬼の一言一言に大きく一喜一憂して、次第に従順になっていくのかな。

自分という人格もなくなつて、ただ鬼に可愛がられて一生を終えていく。それがわたしの運命なのかしら。

ああ、だとしたら人間でいられても何の意味もないのかもしれない。籠の中にいるんだから、人間でも妖怪でも、大して変わらない気がしてきた。

暗い考えが心と頭を支配して生きるための気力が萎えていく。諦めちゃいけないと心のどこかで叫ぶ光が、今ではひどく滑稽に見える。抗うだなんて無駄だと。運命を無条件に受け入れるべきだと。頬に髪がかかると、ちりと首の鈴が鳴いた。

「鈴音は可愛いナア。そろそろ活きの良い鳴き声が聞きたい」

鬼が猫にするようにわたしの首を撫でて、耳元で何かを囁いた。

「さあ鈴音。俺を呼べ。声を聞かせてくれ」

顎をさすりながら鬼が甘く囁く。自分の胸が小さく上下するのを見ながら、わたしは口を開く気になれなくて黙っていた。

「どうした？ もう声はでるぞ？」

横から鬼がのぞき込んでくる。きょろりと訝しげな眼差しを投げて、促してきた。重い瞼で目を閉じ、わたしは知らず知らずに首を僅かだけれど左右に振っていた。

目の端で鬼が渋い顔をしたのが見える。大きく息を吸い込んでわ

たしを抱え直す。

「いいか鈴音」

鬼がみじろいでわたしを横抱きにすると、自身の胸へ顔を押しつけてひっそりと囁いた。

「籠鳥は主のみに忠誠を誓い、主が手をかざせば当然のようにソコへ留まる。だからお前も俺が呼べばスグに傍へ寄り、鳴けと言われたらサエズる。……ここでのお前の役目力ナ」

わたしの役目。それがわたしの役目か。

ほとんど意識のない状態で聞いていると、なんだか催眠術にでもかけられているみたい。遠くから鬼の優しい声が旋律のように流れて聞こえてくる。

紅い手が何度かわたしの頭を撫でる。まるで子供にでも言い聞かせるようにわたしにゆっくり語りかけてくる。

「妖にはしやしない。お前が人間がイイというならそれで良い力ナ。……だから鈴音」

長い指の節を曲げてわたしの顎を上げる。視線が上がればゆらめく紅い瞳と目があつた。

「常闇のことナド知らなくて良い。他の奴らのコトなど忘れてしまえ。籠の外のことなど気にするナ」

顎に添えられた指が開いて、わたしの顔半分を覆い尽くす。

「お前は俺にだけ鳴けば良いカナ」

・・・・・・・・・・・・・・・・

布団の上で四肢を放りだしてぼんやりと部屋を眺める。白い格子の向こうには、籠を囲む錦の着物たち。一度も袖を通したことがないものもあれば、鬼が無理矢理わたしに着せた物もある。

鬼が望むのは愛想の良い、自分にだけ懐く愛玩動物が欲しいのだろう。与えれば可愛らしく尻尾を振り、可愛がりたいときにすぐ手の届くところにいるペットが。

わたしが夢に逃げ込むのも、無愛想な人形になるのも、気に入らないのはそのせいかな。

姿見の中に映る、薄紅色に包まれて青白い顔をした自分。鏡にかけていた錦の布は鬼が外してしまった。どうしてそんなことをしたのかは、分からないけれど。

鏡の中にいるわたしは、普通の人が見たらきつと幽霊だ思っただけで、ばれてしまうくらい、生気を失った顔をしていた。

わたしはもうこの世界に染まり始めているのかしら。まだ人間でいるのだろうか。もしかしたら妖怪でも人間でもない、中途半端な存在になっているのかもしれない。

鮮明に戻った以前の記憶。あの頃のわたしは怯えていた。籠の外へ出たいと願っていた事もあったが、すぐさま出ることを渋った。外は怖ろしいんだと。

この世界を怖いと思うことがなくなった時、それはわたしが人でなくなった時なのかもしれない。だから今はもう怯えることも少なくなっている自分に対して嫌悪感を抱くようになった。

肩を落として口を僅かに開けて天井を仰いだ。それからそのままふらりと背中を倒して、畳の上に頭から倒れ込んだ。

鈍い音を立てて頭に痛みを感じた気がするけれど、どこか遠い。じんじん痛むのは自分ではない、別の人に起こったんだと思えてくる。

鬼は籠の中でいるなら人間のままにしてくれると言っていた。でも人形のままでいたら、夢を悪夢に変えて追い回してくる。

目を覚ませと言っていた。人形になるなど。従順な雀になれと。そう言っていた。

人間のままでいられて悪夢にうなされなくて済むのなら、大人しく従うしかないのだろうな。それが嫌なら妖怪にでもなつて人の姿を捨てて生きていくしかない。

でも、それでも、妖怪になつても人形になつても人間でいても、このまま籠の鳥で居続けるのなら……。

わたしはそのまま目を閉じた。瞼の裏に闇が見える。闇が自分を蝕んで浸食してくる。

籠に一人。

このまま出られないのなら、いつそのこと……。

何かに導かれるかのように腰の帯に手をかける。するする帯を解いて、ふらつきながら立ち上がる。

僅かな動作に大きく息を乱しながら帯の一方を籠の天井に投げて吊るす。そして垂れた端と端を結んで輪を作る。

いつそのこと……。

わたしはその帯を感覚のなくなった手で取り、呆然と眺めた。輪の向こうに鏡が見える。幽霊がぼんやり佇んで淀んだ目でわたしを見つめ返している。

幽霊が首を吊るだなんておかしい光景。わたしはちょっとだけ笑ったけど、鏡の幽霊は無表情のままだった。

ああ疲れた。もう疲れた。もう、どうしていいのか分からない。どうすればいいのか分からない。どうしたいのかも分からない。なにもかも分からない。

ぎゅっと輪つかを両手で握りしめる。

ごめんね。お母さんお父さん。ずっと大事に育ててくれたのに、こんなことしてしまつて。でも限界なんだ。限界なんだよ。

だってわたし……もう頑張れないよ。

頭に輪をくぐらせる。前髪がひかって額が露わになり、両耳に自分の指の節が当たった。視界には白いつま先が畳の緑に浮かんで見える。

ねえおばあちゃん。

そっちに行ったら、また手を繋いでくれるかな。そしたら今度は、わたし泣かないで着いて行くから。

わたしはゆっくり手の力を抜いた。だらりと腕が垂れる。そして次に、ゆっくりと膝の力を抜いた。

刹那に訪れる浮遊感とちょっとした解放感。
足が崩れれば、どこまでも暗闇に堕ちていった気がした――

五ノ怪

朱い夕暮れ時。懐かしい童謡が聞こえる山道に大きな影と小さな影が細く延びている。

カラスが真つ赤な空を横切り物悲しい鳴き声を頭上から響かせ、よりわたしの不安を煽らせた。

早く帰らないといけないのに。でも足が痛くてもう歩けない。気持ちばかりが焦って、思うようにならなくて。

もう嫌だよ！ ついに叫んで立ち止まり、滝のようにぼろぼろ涙を流した。

「うわーん！ 疲れたよー！ お家に帰りたいいつ！」

情けない声を上げて他人がいないことを良いことに、あらん限りの声で泣き叫んだ。わたしの声に驚いてか、鳥が何羽か茂みから羽ばたく音が聞こえた。

「あら、どうしたのお？」

ぐしゃぐしゃな顔に影がかかる。そつと指の隙間を作れば、その間から柔らかい表情が見えた。大泣きするわたしの頭に温かい手が優しく撫でる。

「おやおや。そんなに泣いて」

「だって、疲れちゃったんだ、もんっ」

おばあちゃんに宥められながら、山道の真ん中で肘まで濡らすぐ

らい泣きじゃくる。本当はその場に座り込んでしまいたかったけど、一度座ったら二度と立ち上がれないんじゃないかと思うと怖くて座れなかった。

鳴咽を漏らして鼻水と涙で地面を黒く湿らす。自分の足下だけ雨が降ったようだ。

「帰りたいけど、足が、痛いんだもん。で、でも早くお家に帰りたい、し」

「そ〜お。それじゃあ一休みしましょうね」

おばあちゃんののんびりとした言葉に慌てて顔を上げる。

「でもでも、もうすぐお日様が沈んじゃう。もう間に合わないよ！暗くなっちゃうよ！」

「ふふ。だいじょ〜ぶ」

おばあちゃんは優しく微笑むと、少し曲がった腰を草の上に下ろしてわたしを引き寄せた。

座ってる場合じゃないのに！

そんな心配をよそにおばあちゃんが良いからと傍らに促してきた。

「疲れたときは一休み。絶対に焦っちゃダメよ」

「あ、歩かないの？」

このままだと真っ暗になって、なにも見えなくなっちゃうのに。そしたら怖いお化けとか出てきて食べられちゃうかもしれないのに！小さなわたしは結局座ったものの、落ち着かなくておばあちゃん

の膝にしがみつく。

「今は疲れちゃってるから、すこしお休みしましょう。少し休んだら、また歩きましょうねえ」

鼻をすするわたしの背中をおばあちゃんがさすって、また童謡を口ずさむ。風がないから草も木も花も動かなくて、わたしと一緒に静かにおばあちゃんの歌を聞いていた。

「……もうお家に帰れないの？」

何気なく不安を呟いた。もう泣いていないけど、確かにやってくる暗闇が無性に怖くてぎゅっと膝を抱えた。

「ふふ、帰れるわよ。そんな顔をしちゃダメ」

しわしわの顔をもっとしわしわにさせて、おばあちゃんはわたしの頭をまた優しく撫でた。それから涙でびっしょり濡れた両手を乾いた両手で包んでくれる。

「いい？ 疲れたときは一休み。一休みしたら一度大きく深呼吸。それからゆっくり、また歩きましょうね」

「うーん。……それ、おばあちゃんのおまじない？」

「ふふ、そうだねえ。おばあちゃんの、おまじない」

おどけながら涙の跡が残る頬に指を軽く押し当てて、にこっと齒が抜けた笑顔を見せてくれた。

「あはは！ おばあちゃんおもしろいの！」

腫れた目が笑えばちよつとつっぱった感じがしてなんだかしみる。不思議とおばあちゃんの笑顔をみると元気になって不安も怖さもどこかにいつてしまう。わたしの中では一番強いおまじないだ。

「やっと笑ったねえ。……さてさてもう歩けるかい？」

「うんっ」

よっこいしょと呟いておばあちゃんが立ち上がる。わたしはおばあちゃんの手をぎゅっと握って、真っ赤な夕焼けを見上げた。どこまでも広くて赤い空。雲も山も道も、おばあちゃんもわたしも真っ赤っかだ。

横を見ればおばあちゃんが優しく見下ろして、またにっこり笑った。

「さあ歩きましょうねえ……」

そう眩しく笑った。

・・・・・・・・・・・・・・・・

遠くなっていく天井。すっぱり切れた帯の先に白い格子と、その向こうに緑色の小さな影がひとつ。ばやけながら目に映るすべてが驚くほどゆっくり動いている。

自分の黒髪が左右の視界を防いで青白い不健康な指先が宙を浮く

のを眺め、ようやく背中に衝撃があつたとき、いきなりすべてが元の速度に戻された。

「あ……痛う……っ」

喉から呻き声が漏れる。久しぶりに声が出たせいでむず痒く感じる。

何がどうしたって言うの？

うつすら目を開ければ、籠の天井で子鬼がなにかを喚いている。きいきいと叫んでいるけれどなにを言っているのか分からなくてわたしは眉を寄せた。

チツと舌打ちの音が聞こえ、小さな影が素早く動いて天井の一部を外し、その中に消えていく。

意識も視界も水面のように歪んで目が回る。それにしても……痛い。痛すぎる。背中も頭も痛いっ。

何度か呼吸をするも苦しい。手も足も痺れてうまく動かない。わたしの体、どうなってるんだろう。頭の回線がうまく繋がっていないのか自分が何をして何が起こったのか状況が掴めない。

じたばた藻掻いて混乱していた時だった。部屋の格子からあの旋律が聞こえてきた。荒い呼吸を繰り返しながら、ぐらぐらする頭を月の光が射し込む格子の方へ強引に向けた。

「え……」

思わず目を見開いた。その瞬間だけわたしの時間が止まった。

そこに、籠のすぐ傍に青年が佇んでいた。いつも抱えている琵琶はないのに、あの悲しげな旋律がぼやける

聴覚に漂ってくる。

青年の顔が悲しいほど歪んでいる。泣かないでと呟いているけれど言っている本人が泣きそうだ。

「無事……だったんだ……ね」

わたしは呟いて笑った。

青年が格子の中へ手を伸ばしてくる。わたしも石みたいに重い腕を上げて伸ばされた手に指先を伸ばす。袖が肘まで下がればまた咲いた灰梅のあざが覗いた。

透き通った繊細な指が震える青白い指を絡めとる。

その指はとても冷たかった。

.....

格子の向こうの青白い娘さん。泣いている娘さん。元気を出してまた琵琶を弾いてあげるから。

朧月のような儚げな光の人。

朧月……。

おぼろ……朧村……。

どうか、死なないで……。

・・・・・・・・・・・・・・・・

氷点下の冷たさに指先がかじかんだ。

脳に冷たさが伝わりと同時に、わたしの霧がかった頭も晴れていく。

体は重い。息も苦しい。でも驚くほど意識がはつきりしてくる。

白昼夢から醒めてさつと手を上げた先を見る。青年はいない。あれも白昼夢だったの？ それにしてはあまりにも現実味があった。青年に触れた指先が今も冷たくなっている。

宙に浮いたままの手を引き寄せて、片方の手でさすりながら一人ごちる。このまま横になっても仕方ない。とりあえず起きあがらないと。

のろのろ上体を起こせば胸元にだらりと帯が垂れ下がってきた。なんだろう？ 首を傾げて次の瞬間、ざっと血の気が引いた。

そうだ。わたし……！

自殺……しようとしたんだ。首を吊って。

自分のしたことに背筋が冷えた。何を考えていたんだろう！ よりによって死のうとしただなんて！

慌てて首に掛かった帯をとって畳に投げる。冷や汗がだらだらと全身に流れた。

いや、まさか。自分が自ら死を選択するだなんて思ってもいなかった。なにがあっても明るく生きてきたつもりだったのに。というか、これでも明るさだけが取り柄だったのに。

バクバク鳴る心臓が、逆に生きているんだなと実感して妙な気分になる。

おかしいおかしいとは思っていたんだけど。どんどん気分が暗さに流されていって、自分がどこからおかしくなっていたのか全く見当もつかない。

とにかくわたし、正氣に戻ったんだよね？ 意識もずつとはつきりしているし、大丈夫よね？

両手を見て、足を見て体を見る。別段、やせ細って不健康そうな肌と灰梅の痣以外異常はない。鱗も角も毛皮もない。

良かった、一応まだ人間なんだ。

安堵から盛大に息を吐いて肩の力を抜いた。どつと疲れがでてその場で大の字になる。

はあ、なんだろう……意識は戻ったのになんだか熱っぽい。背中が痛い。正氣に戻った反動なのかな。

息苦しさに喘ぎはじめたところで、ピシャーンと勢いよく襖が開かれた。あまりにも大きな音だったから驚いて体が金魚のように跳ねる。端から見れば感電でもしたのかと思われたに違いない。

乱暴に歩く音がこちらに近づいてくる。重い頭を起こすと紅い鬼が珍しく目を見開いて、口を僅かに開けて呆然とこちらを見下ろしていた。

六ノ怪

畳の上にある帯と、すっかり忘れていた籠の天井から垂れる帯の切れ端。それらを見てから、次に横たわるわたし、と鬼は順々に見つめる。

「これはどういうことダ？」

まるで独り言でも言っているかのように呟く。それから顔を歪ませてわたしの傍らに片膝を着くと、明らかに怒り心頭という感じで睨んでくる。

どういうことだと言われても……。

少なくとも自分のしたことは胸を張れることでも開き直って良いことでもない。鬼さんのせいでもあると言いたいところだけど、やっぱりした事に後ろめたくて、何も言わずに突き刺さる視線から目を逸らした。

「うん？ ……鈴音？」

鬼さんが怪訝な声を上げる。なんだろう？ 先ほどの不穏な気配を一転させて、また悪くなってきた視界に困惑気味の顔が近づいてくる。

なに？ どうしたの？ 怖くて起きあがりたくてもずしりとする身体は思っように動かない。焦るわたしに鬼さんは構わず眉を寄せ、探るように見つめてくる。

「お、鬼さん？」

不安になって口を開けば、風邪をひいた時と同じ掠れ声が零れた。ひどいガラガラ声だ。体の節々も痛いし、だるい。わたし、どうしちゃったんだろう。

「……良い。喋るナ」

一度意味ありげにきょろりと紅を動かすと、わたしの胸元に手を伸ばした。

「なにを」

わたしが言い切る前に、鬼さんは帯がないせいでやや肌けていたわたしの着物の前見頃を整え、素早く背中と両膝の裏へ腕を滑り込ませ、ゆっくり抱き上げてきた。

「ちょっと何するんですかつ」

慌てて体を反らそうとしても既に浮き上がっていた状態では危なくて、わたしはすぐに体から力を抜いた。こんな身体じゃ受身すら取れそうも無い。

鬼さんは（恐らく足で）敷いた布団の上にわたしを丁寧に降ろし、知らないうちにちょっと汗ばんだわたしの額に手を置いた。

「熱がひどいナア」

熱？ 熱があるの？ どうりで体がだるいはずだわ。
もしかして風邪でもひいたのかな。……このタイミングで。

「水飲む力？」

鬼が可愛らしい梅模様のかけ布団を被せてくる。見た目より軽い布団で包まれば、寒さがいくらか緩和してきてホツとした。

ちらりと盗み見る。目の前の鬼さんは夢と同一人物の鬼なんだろうか。あまりにも態度が変わりすぎて疑わしい。いきなりどうして親切になったんだろう。てっきり胸倉でも掴まれて怒鳴られると思っていたのに。

なにか企んでいるのかな。それともいつもの気まぐれかしら。

「どうした？ 飲むの力？ 飲まないの力？」

「変なの入ってなければ、欲しい……です」

今は恐ろしさよりも苦しさが勝る。とにかく飲み物が欲しい。すぐくち喉が乾く。それにやっぱりまだ寒い。

「そう力。分かった」

鬼が宙を手で軽くなぎ払うと灯籠の灯が小ぢんまりとしたものとなった。そのせいで薄闇の中に妖しい紅が宙に浮かんで見える。

「おい」

鬼が誰かに声をかける。何を話しているのかよく聞こえないけど、おそらく子鬼だろう。なにやらあれこれと命令しているようだ。

わたしはそれを聞きながら、熱っぽい意識とからみつく寒さに震えた。なんでこんなに寒いんだろう。それに次から次へと目まぐるしく様々なことが起こってついていけない。なにかから整理していけ

ばいいのやら。

そう言えばあの白昼夢。青年。あれは夢だったのかな。そもそもこの部屋に誰にも気づかれずに入れるはずが無いし、やっぱり夢だったのかしら。

でも、その後の夢の内容が気になる。わたしじゃなくて別の人が見たような不思議な感じ。ぼんやりとしか思い出せないけれど、あれは……。

「死のうとしたの力？」

低い通る声に我に返ると、自然とそちらへ目がいった。妖しい紅と目がかち合う。

「よく……分かりません」

わたしは力無く答えた。正直に言っただけでもしていたのか首を吊った記憶が曖昧になっている。本当に死のうとしたのかな。そんなの、信じたくない。

「はぁ〜マツタク」

呆れてわざとらしく息を吐く。わたしからしたら鬼さんのせいでもあるのにこの態度には納得がいかない。

二つの紅が横へ流れる。物音から格子越しに子鬼からお椀を受け取ったんだと推測する。

昔わたしと話してくれた子鬼はわたしのことを覚えているかな？あのかめつ面が懐かしい。もし会えるなら話がしたいけれど鬼さんはやっぱり許してはくれないんだろ？

ぼんやりそんな事を思っているわたしの背に、大きな手を添えて

鬼さんが上体を起こさせてきた。

「飲め」

鬼さんの声に素直に頷いて、お椀を両手で抱えてゆっくり喉へ通した。ほんのりと甘くて飲みやすい。じんわりと体に心地よい冷たさが染みだした。

すべて飲み終えたところで思い出したように悪寒に体を震わす。なんだろう。さっきより寒い。水を飲んだせい？ ううん、そんな寒さじゃない。なんだかどんどん寒くなってくる。

「ナンド。寒いのか？」

「とても」

わたしが返せば鬼はまた籠の外にいる子鬼に囁いた。わたしはやり取りを聞きながらまた布団に潜り込んだ。寒い。布団にくるまっているはずなのに雪の中に放り込まれたみたい。

「鈴音」

声をかけられ視線を移す。鬼さんが枕元であぐらをかいて腕を組むと、着流した着物が揺れて金糸の鳥が羽を煌めかした。

「どうして首なんぞ吊ったンダ？」

「それもよく……覚えていません」

「俺はてっきり、己の立場を理解したんだと思ったんだがナァ」

「立場って、鬼さんに従順になること、ですか？」

実際鬼さんは反抗心の消えたわたしに喜んでいた。教室のドアをくぐらなかつたわたしに分かつてきたと言つて。

「まあ聞き分けがイイに越したことはナイが。ちよいと違うかな」

「え？」

「お前は素直じゃなくてイケナイ」

はあ……よく分からない。顔に出ていたのか鬼が深く息を吐いた。

「常闇のことよりも他の奴らよりも、マズ、俺だろう？」

「鬼さん……ですか？」

「お前は俺と向き合つた力？」

ただでさえ熱のせいで頭がクラクラしているのに、さらにショートしてしまいそうになった。鬼さんと向き合う？ それってどういうこと？

わたしの反応が悪いからか、鬼さんは目を細めてさらに睨んでくる。

「俺と向き合おうともシナイのに他の奴らのところにいけば、そりゃあ心の広い俺でも面白くないかな」

「それはどういう……」

「要は、ダ。主人より先に他のヤツに懐くんじゃナイ。ということダ」

じゃあ常闇のことを訊いたときも武勇伝ばかり話していたのは、そういう意味があつてだったの？ …… いや、それはまた違うわね。ただの自慢話だったし。

とにかく逃げてばかりいないで、鬼さんともっとじっくり話し合わなければ。常闇のことと妖怪のことと、それが済んでからじゃないと話をしてもらえない。なんとかして鬼さんが納得するまで向き合わない。

意気込んだところでまた震える。ああ、もう。どうしてこんなに寒いんだろう。指先まですごく冷えてる。

「まだ寒いみたいダナ。取り合えず今は休め。弱ったお前で遊んでも面白くないカナ」

「あ、あの鬼さん」

「ナンだ？」

「鬼さんが言っていた想い人（だったかな）の話なんですけれど、わたしが鬼さんと向き合えば話を聞いてもらえますか？」

「お前はナァ」

呆れ声とともにわたしの額にベシツと一撃をお見舞いする。

「俺を前にしてソレを口にしたらダメだろうが。ダメだなあ鈴音は。ワカツテナイ」

呆れ顔を露骨にして首を振った。

「まあ良い。兎に角しばらくは、おとなあしく寝ていな。きちんと受け答えするなら夢まで追わないかな」

「もう追い回したりしないんですか？」

「言っただろう？ 受け答えするならってナ。やっぱり分かってないナア」

盛大にまた溜息をついた。

七ノ怪

熱と寒さ。相反する二つに体を震わせて汗を流す。眠れない。横になっても眠りが浅くてすぐに目を覚ましてしまう。

寒さは全然おさまらないし熱も下がらない。薬とかあるなら飲みたいけれど、人間用の薬ってあるのかな。妖怪の薬なんて飲みたくないし、飲んだら逆に具合が悪くなるとしか思えない。

「ん」

先ほどから横で鬼さんがうなり声をあげている。わたしの顔や目を覗き込んだり首や腕を見ては、ふむと顎をさすっている。

「ただの風邪じゃあナイナァ」

「風邪じゃない？」

これだけ熱があつてだるいのには？

鬼さんはお医者さんじゃないけれど、わたしよりは色々知っている。だからこそ余計に不安になる。

「また妖怪に襲われていた、とかですか？　もしくは妖氣にあてられたとか……」

「ん」

鬼さんが考え込むなんて。そんなに悪い状況なのかな。

「それにしても、お前は意外と根性がないナァ」

は？ さりげなくなにを突然。根性がない？
時々鬼さんは前触れもなく変なことを言うけど……根性がないっ
て……

「まさかあつさり死のうとすると思わなんだ」

やれやれと首を振る鬼。なにそれ。それが追いつめた本人がいう
セリフ？ 冗談じゃないわ！

「だったら鬼さんは一度籠に入れられればいいじゃないですか！
ずっと籠の中に閉じこめられて話し相手もいなくて夢の中まで追い
回されれば誰だって頭おかしくなりますよ！」

「ハッ！ そりゃあ、鈴音が俺の言うこと聞かないからいけないン
ダ。自業自得力ナ」

は、鼻で笑われた。ああもう、いちいち腹が立つ！
早口でまくし立てたせいで息苦しさに拍車がかかり、少しばかり
胸が早く上下する。

「まあまあ、そう興奮するナ。すぐに参っちまうゾ」

言いながらしつとりと濡れた布をわたしの額に置いた。冷たつ。
キンキンに冷えた布に驚いて一瞬間が跳ねる。

それを見た鬼さんは、さも面白いと言いたげに満面に笑みを浮か
べた。

「夢ん中じゃあ怯えて逃げまどっていたクセに、ずいぶん威勢が良
くなっただじゃあない力」

「あれは鬼さんがわたしの話も聞かないで追い回したからですよ」

今だってちらりと覗く牙と妖しい紅がこちらに向くたびに落ち着かなかった。それでも熱のせいで朦朧とした意識なら、なんとか普通に鬼さんと話をする事が出来た。

「ハテ。話なんてしようとしていた力？」

もう。やっぱり話聞いていないんじゃないっ。なんだか頭まで痛くなってきた。小首をかしげて斜め上を向いている鬼に鋭く睨みつける。

「あのですね。誤解しているようなので言わせてもらいますけれど、琵琶の青年とは鬼さんが思っているような仲じゃないですから。もう一度、言・い・ま・す・が！」

色恋いうんぬんだなんて、どうしてそういう考えしかできないのかしら。それに鬼さんが直々に相手するとか言っていたけれど、鬼さんが相手じゃ恋愛すら御免だわ。絶対に無理だし絶対に嫌っ。

「ほお〜琵琶持ってたのか。そりゃあ知らなかった力ナ」

……え？

意外な言葉に驚く。青年はいつも琵琶を持っていたからてっきり琵琶の事は知っていると思っていたのに。まあ青年だって四六時中琵琶を持っているわけではないか。

「鬼さんは彼が琵琶を持っていること、知らなかったんですね」

「ああ。ソイツを見たこともないしナア」

……え？ 見たこと無い？

「あ、あの、鬼さん。見たこと無いって……。だって鬼さんの言う
想い人って鬼さん知っているんじゃない？」

「いんや」

ということは……

「ま、まさか」

狼狽えるわたしをみてニヤリと意地悪く笑った。

「ああ。カマかけただけカナ」

「なっ……なっ……！」

だ、だまされたっ。なんて、なんて鬼なの！ 今までのわたしの
苦労はなんだったのよ！ したり顔がさらに腹が立つ！

「勿論、俺の雀に手えだすとはけしからんと探したんだがナ、それ
よりお前が目に見えるぐらい日に日にしおらしくなっていく様が気
になってナア。ホッタラカシにしちまったカナ」

なんというか……言葉がでてこない。あ、でもそれなら青年に危
害が加わったわけではないんだ。怒りから安堵へと感情が移ると頭
に上った血も落ち着いてくる。

知らないのなら手の出しようがないんだし、それが分かっただけ

でも良かったというものだけれど……でもなにか腑に落ちない。なにか見落としている気がする。

「なあ鈴音。ここで誰かに会ったか？」

唐突に尋ねられて一度目を上げたけれど、すぐに逸らした。

「子鬼さんになら、その、あの時に会いましたけれど……」

どうしても『首を吊った時』と口にしたくなかった。思い出したくないしまだ気持ちの整理がつかない。もごもごしながら視線を手元に落とした。

「他のヤツには？」

「んー……いいえ。そもそも籠の中には誰も入れないと思いますよ。たとえば部屋入れても誰かしら気づくでしょうし」

一瞬青年を思いだしたけれど、あれは夢だった気がして口にするのをやめた。余計なことを言って、せっかく逸れてると分かった矛盾を彼に向けるのも良くないしね。言わない方が良いでしょう。

それにしても鬼さんのお屋敷の警備はどうなっているんだろう。蜘蛛の時と言い鬼女の時と言い……もうちょっとなんとかならないのかしら。

「なにか鼻にツクんだよナア」

鬼さんがぼつりと呟く。

形の良い眉を片方つり上げて顎に手をやっている。

「やっぱり風邪ではないんですか？」

「ああ。そんなんじゃあナイと思うんだが」

風邪でもないし鬼さんにも分からないだなんて。

正体が分からない物が自分を蝕んでいるイメージが頭に浮かんでわたしは怖くなった。自分を守るように両腕で体を抱き抱え、両膝を曲げて丸くなる。

「ナンだ？ マダ寒いのか？」

「ん……」

鬼に弱音を吐く気にもなれなくて曖昧に返事をする。

風邪じゃないならもつと悪い病気とか……妖怪の世界なら呪いと知らない間にかけられているのかも。どうしよう。怖い。

ガクガクと体が震える。心なしか手や足の先が冷たくなってきた気がしてくる。寒い。雪の中に裸で放り投げられた気分だわ。

「鈴音」

呼ばれて目を上げる。妖しくも端正な顔がいつの間にか鼻先にあつて、思わず硬直する。

「俺の鬼火を移してヤル」

あつ。

考えるよりも早く手が動いた。触れられる前に唇の前で手を重ねると、手の甲に鬼さんの口が当たった。

「……何してンダ」

「何って。口を塞いでいるんです」

手で塞ぎながら喋るので当然わたしの声はくぐもっていた。鬼さんの顔も不機嫌そうに曇る。

「どけろ」

「嫌です」

「楽になるゾ」

「でも嫌です」

「どうして嫌ナンだ？」

「生理的に無理だからです」

生理的って表現が通じるか分からないけれど、わたしは頑なに首を横に振った。そう簡単に何度もキスされたんじゃ耐まらない。

「他の場所から鬼火は移せないんですか？」

「口の中なら肉が軟らかいし他のヤツから分かりづらいしナ。一番良い」

「手とかじゃダメですか？」

「出来なくもないが、痛いゾ？」

「大丈夫です。するなら手にお願ひします」

「仕方ないナア」

ぶつぶつ文句を言う鬼さんに布団から差し出した重い手を差し出す。布団から出ただけで着物越しに寒さが絡みついてくる。

「じゃあガブリといくカナ」

大きく真つ赤な口を開けば鋭い牙が見えた。鬼の口が開けば開くほどわたしの血の気も失せていく。確かに手にしてくれとわたしは言っただけ。言っただけ。言っただけだ！

やっぱりダメ！

尖った先が肌に当たった瞬間、わたしはとても病人とは思えない俊敏さで自分の上体を強制的に起こさせ、鬼さんの肩に掴みかかった。

「待つて——」

「ん？」

制止の声の途中で牙が止まる。鬼さんは手に取ったわたしの指先をまじまじと見つめて牙を閉まった。

「……いつは……」

「どうか、したんですか？」

わたしの指がどうかしたのかな。不安にかられてわたしも白くなつた自分の指を眺めた。冷たい以外は特に変なところはないと思うんだけど、鬼さんはなにか感じたのかしら。

「鈴音」

「は、はい」

低く押さえた声に緊張する。鋭い眼差しが指先に痛い。

「誰かここに触れたか？」

「ここって——指にですか？」

籠の中にいたんだから誰も触れられるわけがないじゃない。子鬼だつて籠の中には入らなかったんだし。

わたしは否定の言葉を返そうとしたところではたと止まった。

そうだ。あの時。もしあれが夢じゃないのだとしたら。現実だったとしたら。

指先に触れたのは一人だけ。籠の外から手を伸ばしてくれた彼だけ。

紅い視線がわたしに注がれているのも忘れて、わたしは呆然と口にした。

「琵琶の……青年……」

八ノ怪

ピントの合わない視界。これじゃあほとんど見えないうに等しい。雲ひとつないのに薄暗い冬の空も、他の人が見えればさぞ眩しいんだろう。

旅の人が言っていた家々は粗末かもしれないけど、そこから豪快に笑うお爺さんや、憎まれ口を叩きあいながらも、背中合わせになった途端にくすりと笑う夫婦が居るのを知っていれば、暖かいものに見えてくる。

ここの村の人たちは寒い地に似合わず心の底から暖かい人ばかり。わたしは思わず微笑んで、それから一つくしゃみをした。うーん北風が強いわ。凍えちゃいそう。

「ねえねえ」

不意に声をかけられて振り返る。あつと。危ない危ない。そうだ、目は閉じておかないといけないんだった。不気味がられちゃうからね。

わたしは何気ないふうを装ってそつと目を閉じた。

「またお話しかせてよ」

この元気で生意気そうな声は吉太郎だ。でも妹の春ちゃんの声が聞こえないなあ。あの舌足らずな可愛らしい声が頭の中で再生される。いつも兄ちゃん兄ちゃんと吉太郎の背にくっついてる幼い声。耳を澄ませても聞こえない。

顔に出ていたのか吉太郎が元気な声を上げた。

「あ、春？ あいつはおつ母あのとこだよ」

へえ珍しい。でもまあ、甘えたい盛りだもんね。吉太郎だったまには子守から解放されたいだろうし。わたしがよしよしと頭を撫でてあげると、吉太郎が「何するんだよ」と手を払いのけてきた。でもその声はどこか照れていた。可愛いなあ。

「あー！ 吉太郎ずるいつ」

向こうの方からよく通る声。これは三吉だ。

「オイラにも聞かせてよ！ ずっと待ってたんだからな！」

どんと小さな身体が横つ腹に当たる。それからぎゅつと無邪気な温かさに掴まれて、わたしは笑いながら三吉の頭にも手を置いた。次から次に道の向こうから落ち着かない足音がこちらに走ってくれば、たちまち幼い声たちに囲まれて、歌をせがまれる。

嬉しいな。待っててくれたんだ。わたしは片手に持っていた琵琶を撫でて、子供たちに微笑んだ。

さあ今日は何を話そうかな……

・・・・・・・・・・・・・・・・

喉の渇きで目を覚ます。視界も体調も相変わらず最悪。浅く息を吐けば胸元の汗が浴衣との間に摩擦を起こして肌に張り付いてくる。

「良い夢だったな……」

元気で無邪気な子供たちの夢。顔こそ見えなかったけれど、声が聞こえるだけで笑顔をみたような気持ちになる。とても幸せだった。

「どうした？」

予想しなかった声にビクツと肩が跳ねた。び、びっくりした。

「鬼さん。なんでここに」

枕元に眠る前と同じ姿勢で座っている鬼さんの姿に目を丸くする。違うとするならいつもの晩酌セットがあるくらいだ。

「なにしてるんですか？」

お酒飲むなら自分の部屋で飲めばいいのに。わざわざ寝込んで人間の隣で飲まなくなつて。

「ナニって。お前の看病」

「お酒飲んで何言っているんですか」

また頭が痛くなってきた。

「目が覚めたならちようど良い。お前も飲んでみる。身体が温まるカナ」

「お酒ですか？」

「ああ。温めてあるからよく効くゾ」

ん。本当に大丈夫なのかな。温かいと言ったところから鬼さんが今飲んでるのは熱爛かしら。

「あの、その前にお水下さい。喉が渴いてしまつて」

鬼さんが近くに置いてあつたお椀を手にとるとわたしに差し出した。中にはいつもの透き通つた水が入っている。わたしはくらくらしながら体を起こして水を飲むと、鬼さんもまたお酒を飲んだ。

お互いに口から飲み物を口から離しても、黙つたままだつた。あの後一悶着あつたから仕方ないのだけれど、この手の沈黙は痛い。気まずさに、まだ濡れているお椀の中に視線を落とした。

わたしが何気なく琵琶の青年のことを言つてしまつたがために、鬼さんの機嫌がまた悪くなった。すぐさま籠から出て行こうとした鬼さんの脚にしがみついて引き止め、なんとか行なわれるであろう凶行を止めることには成功した。

これから鬼さんと向き合つて話をしないといけないのは分かつているんだけど、具体的に何を話せばいいのか全然わたしには分からない。

鬼様第一です！ って宣言すれば良いわけじゃないだろうし、いつものようにお酌だけすれば良いのも違うだろうし。……鬼さんについてなにか質問すればいいのかしら。

「あの」

「ん？」

紅い目がきょろりとわたしを捉える。

「鬼さんの趣味って何ですか？」

「趣味い？」

お見合いじゃないんだからって自分でも思った。だけど他に質問することが見当たらなかったんだから仕方ない。

「趣味ナア。色々したからナア」

「色々ですか？」

「前は天狗と蹴鞠したがスグに飽きちまってナア、ちよいと前には一つ目と将棋したんだがコレも飽きちまって。囲碁も牛鬼とやったんだが、あいつ俺が勝ちそうになった途端に碁盤ごとひっくり返しやがったから、頭ふつとばしてヤツタ」

「そ、そうですね」

「まあ囲碁もそれからやってないカナ」

結局どれも飽きてしまったのね。気まぐれな性格だから趣味も長く定着しないのかな。

ぐびりと鬼さんの喉が鳴ってまた沈黙してしまう。
えーっと……

「お酒いつも飲まれているみたいですけど、どれが一番好きなんですか？」

「お、そうだナア」

眉間にずっとあった山脈みたいな皺が消えて、嬉しそうに考え込み始めた。鬼さんはやっぱりお酒の話題が一番好きなんだ。覚えておこう。

「五月雨も良いガ……宵闇も良いナ。いや銀鳴きも捨て難い」

「今飲んでいるのは何ですか？」

「これか？」

そういつて徳利を振った。

「これはミチツキという名の酒だ」

「ミチツキ？」

「蔵主の話なら満月の光だけ浴びさせた酒らしいカナ」

「満月……」

口にして瞬時にあの時見えた光景がまたフラッシュバックする。青年の幻の後に見た夢。うつん、見えたと言うよりも感じた。わたしじゃない誰かの感覚を疑似体験した妙な感じ。

確か目の前は真つ暗だった。……いや、ちよつと違う。暗かったと言つよりも、何も見えなくて、部屋の暗さも分からない感覚だった。

頭で格子とその中に人がいるって何故が分かった。でも格子の向こうにいたのは誰だか分からない。頭で感じたのは籠の格子じゃなかった。どこか、別の場所。別の格子。それから何か思い出したんだ。

……そつだ。月だ。朧月つて。

それから朧村つて頭に浮かんだ。もしかしたら、あの感覚の主は青年？

だったら彼は記憶を少し思い出したのかも。それにさっき見たばかりの夢だつて彼のものかもしれない。

某探偵の、謎解きが解明したときに出る効果音が頭の中で高らかに鳴り響く。名推理だと確信したわたしだったが、次の瞬間には肩を落として頭を振った。

……待つて。ちよつと落ち着くのよ、わたし。

もしそつだとしても、どうして突然彼の気持ち分かるようになったというの？ 夢だつてわたしの脳が勝手な解釈をしてでっ上げた物かもしれないのに。

そもそもあの時見た青年だつて、わたしの見間違いかもしれない。部屋の中に誰にも気づかれないで入れるはずないんだし、錯乱状態のわたしが見たのを考えれば、ただの幻だと言つほうがまだ現実的だ。

もう少し整理していかないと――

「鈴音」

「あ、はいっ」

しまった。また考え込んだ。また。

慌てて顔を上げれば、再び眉間に山々を連ねた鬼の顔がこちらを向いている。

「またナニか悪巧みでも考えているの力？」

「ち、違います」

「ほお」

痛い視線を受けながらそそくさと布団の中に逃げ込む。また青年のを感じかれたら色々まずい。考えるなら一人の時でないとダメだ。鬼さんがいる時は鬼さんに集中しなくちゃ。

「待て鈴音」

低い声で言ってからわたしの襟首を鷲掴んだ。そしてそのまま引っ張られ、わたしは居心地の良い布団から引きずりだされた。

寒いっ。抗議よりも素足にまとわりつく冷気に体を抱えて震えた。

「そんなびっしり濡れていたら気分悪いダロウ」

「まあ、はい……とても」

「なら風呂に入れ」

「え？」

驚いて目を見開く。

「籠から……出してくれるんですか？」

「汗くさい雀にはそろそろウンザリなんです。ひとつ風呂浴びてこい」

やった！ お風呂に入れるなんて！ お風呂に入れば体の芯から温まれるし、何より汗を流せる。汗くさいは余計だけど、思わぬ言葉にわたしは素直に喜んだ。

「ありがとうございます」

傍にあったお椀の底に、破顔した自分の顔が映っている。やっぱりお風呂は大事だわ。喜んだ顔は汗で濡れてしっとりした髪がおでこに張り付いていた。

「そうやって笑っているんなら、いくらでも良くしてやるのにナァ」

呟いた声に目を移す間もなく、わたしの視界は目まぐるしく回転した。熱のクラクラしたものも加わって、籠から出た後も、しばらくは鬼さんの肩に担がれているという事に気が付かなかった。

目下に流れる薄暗い板目と暗さに、わたしはちよつと泣きそうになった。

籠から出られた。

その事實はわたしが思っている以上に、わたしの胸を震わせていたのだった。

九ノ怪

「あゝ生き返る」

檜ひのきの縁に腕を重ねて顎を乗せ、たゆたう湯気をぼんやり眺めた。

てつきり以前入れた露天風呂に通されるのかと思つたら、見事な木彫りの装飾に囲まれた木造りの浴室に連れていかれたのだった。深く息を吐いて天井を見上げると寄木細工の菱形がわたしの頭上に広がり、ぐるりと見渡せば、小川に似た雲の欄間と、壁ごとに華々しく咲き誇る木彫りの花がその美しさを競い合っていた。

「大きなお風呂が二つ。鬼ってお風呂入るんだあ。鬼さんはお金持ちなのかな」

我が家のお風呂はもちろん一つだ。こんな老舗旅館並のお風呂には家族旅行で一度しか体験したことがない。真四角の浴室の隅には翡翠の石桶と、柄に藤模様の木彫りがある柄杓があった。

先ほど体と髪を洗ったときに気づいた肩の痣。人間が常闇の妖気にあてられると現れる痣。鬼さんの話に寄れば、人によっては特別な能力が備わるが、この痣が目に行き届けば妖怪の仲間に近いってしまう、と言っていた。

初めて常闇にきた時、わたしに備わった力は『他人の視点』だった。

自分ではない他の人の考えや、視界を感じることが出来た。でもそれは自分の意志でしたわけじゃなくて、勝手に感じるような形となって現れた。

だからやっぱりあの時も。あの感覚は青年のもので間違いないはず。

でも、と水面下に口を沈めてぶくぶく空気の泡を作る。

いまいち自分の確証を信じきれない。自分の状態が状態だったし、第一どうやって彼が籠の部屋に入れたのが未だ分からない。それに今もその便利な能力が自分に備わっているのかも不明だ。……お風呂から出た後、鬼さん相手に試してみようかしら。

成功したら余計なことまで知ってしまうかもしれないけど、このまま何もしないよりは良いはず。何かしら情報を集めて、いざという時に、いつでも動けるようにしなくちゃ。

わたしは鼻から大きく息を吸い込んで、そのまま頭のとっぺんまですく浴槽に潜り込んだ。

.....

「風呂はどうだった？」

上機嫌に聞いてきた鬼さんに、わたしは頷いた。

「とても良かったです」

籠じゃない部屋で鬼さんと向かい合って話すのは久しぶりだった。着物は重いけれど暖かで、寒さを感じない。だるさや熱っぽさも嘘のように治まっていた。

「アレな、お前用に用意したんだ」

さらりと言った鬼さんに、わたしは持っていた湯呑を落としそうになった。

「わたし用!?」

「そうダ」

人間一人の為に風呂一個作るって。どういう発想なんだろう。庶民とはスケールが違うわ。

「鬼さんはお殿様なんですか?」

鬼さんはちょうど顔を上げてお酒を飲もうとしていたが、その姿勢のままで固まるなり、次第にひくひく肩が揺れ始めた。どうしたんだろう?

「どうかしましたか?」

ゆっくり酒瓶を傍らに置き、片手に額をやって俯くと、堰を切ったようにゲラゲラ笑い出した。

「鈴音は本っ当に面白いことをいうナァ!」

膝をバシバシ叩いてしばらくの間大きく笑って、やっと満足すると深く息を吐いた。

一体、なんだっていうのよ。

「殿様ねえ。いやいやそんな堅苦しいモンじゃないサ」

「でも偉いんでしょう？」

「まあナア」

そこは否定しないのね。

内心呆れながらも、いつになく機嫌が良いのに、わたしはホツとした。まだ鬼さんに追い回された感覚が抜け切らなくて、心のどこかで緊張してしまう自分がいたのだ。

「それじゃあ、鬼の元締め的な存在なんですか？」

「間違つてはないカナ」

常闇のことはよく分からないけれど、他の妖怪の態度や建物からして、位置的に偉い鬼ひとだとは思っていたけれど、人間一人の為に風呂一個作るとは思わなかったな。しかもあんなに凝ったお風呂作るなんて……いつから作っていたんだろう。

あ、そうだ。それはいいとして。

ちらつと鬼さんを盗み見る。今日は向かい合って話したいとかでお酌を自分でしている。

さっそく試してみようかな。

わたしは目の前にいる紅い鬼に神経を集中させる。

じーっと見つめて、相手の思考を探った。

.....。

.....。

.....うーん。

全っ然、分からない。

はつきりとしたものは端から期待していないとはいえ、まったく
と言って良いほど、なんにも感じ取れない。他人の視点が自分に流
れ込む感じも、相手に憑依する感覚も、何かしらの違和感もない。
何かコツがあるのかな。条件とか色々――

「おい」

「はっはい、何でしょう!？」

思い切り間拔けな声と一緒に顔を上げる。鬼さんがのんびり傍ら
に置いてあったお酒を選びながら、声だけをこちらに向ける。

「寒さはどうだ？ まだ熱っぽい力？」

どくどく鳴る胸を撫で下ろして、わたしは首を振った。

「いえ。お風呂に入って温まったのが良かったみたいで、ずいぶん
楽になりました」

「そうか。指先は冷たい力？」

指先？ 言われて恐る恐る自分の指と指を重ねてみた。触れてみ

るが、ほんのりと温かでなんともない。

なんでだろう。わたしは何故だか消えた冷たさに寂しさを覚えた。自分が籠の格子越しに、青年に会った確かなものが消えてしまったような気がしたのだ。

「その様子なら、もう平気みたいだな」

意味ありげな物言いに、目を上げた。口の中で青年という単語が転がる。

何か彼と関係があるの？ 聞きたいが、それは良くない方向に向かってしまう。今は耐えなければ。わたしは俯いて口を結んだ。

「よし。コレならお前も飲めるだろう」

一つのお酒を手にとってわたしの目の前にくると、わたしが持っていた湯飲を取り上げ、代わりに手の平ほどの朱色の盃を掴まされた。

「酒は百薬の長ってナ」

桃の形をした変った酒瓶を傾けて盃に注いだ。

「まあ一口飲んでみナ」

普通の人が鬼さん並に毎日飲んだら、百薬どころか百厄になるんだろうな。

中には薄桃色の液体がわたしの顔を映していた。ほのかに桃の甘い香りがする。んー、ちょっと抵抗あるけど、一口だけ、飲んでみようかな。

好奇心も手伝って顔に盃を近づける。

わたしはほんの一口と、恐る恐るお酒を口に含んだ。

「……美味しい」

「だろう」

とても甘いし、お酒特有の変な匂いも味も無い。本当にこれ、お酒なのかな。なんかジューズみたい。
も、もうちよつとだけ、飲んでみようかな。

「ナア鈴音」

「はい」

返事をしながらお酒を口にちびりちびり喉に流し込んだ。やっぱり、これ美味しい。本当にお酒なのかな。

「お前は琵琶の青年を好いているのか？」

どストレートな言葉に激しく噴出し、危うく鼻からもお酒が出そうになる。咳込みながら手を振った。

「で、ですから想い人じゃないですって」

「好いているか、いないのか聞いているんだ」

まっすぐ見つめられて気まずさに自然と視線が落ちる。薄桃色の滴を見下ろして、重い口を開いた。

「好き、だと思います」

口にした途端に鬼さんが息を吸った音が聞こえた。だからわたしは直ぐに顔を上げて、何か言われる前に口走った。

「でも人柄がいいとか、良い人っていう意味で好きなんであって、まだ男の人として好きだとかはよく分からないんです」

こうもハッキリ口にしてしまうと、ごちゃごちゃしていた気持ちがまとまってくる。わたしは自分の気持ちを探りながら話を続けた。

「だって、ちょっとしか知り合ってないし、他に気楽に話せる人がなくて。それにわたしのことを人として扱ってくれるのは青年しかいなかったから。……だからわたし、彼と話せて嬉しくて」

慰めてくれたのも、元気づけてくれたのも彼だけだった。見下すこともなく、優しく笑いかけてくれた。とても嬉しかった。

「わたしは青年が好きです。傷ついて欲しくありません」

だんだん目の前が霞んでくる。こんなに簡単に感情が昂るなんて、やっぱり今呑んでいたのはお酒だったのかな。

歪んで目元が熱いなって思ったときには、薄桃に透明な滴が混ざった。

「みっちゃんみたいに……闇に染まって欲しくない……」

頭が痛い。悲しい。認めたときにはぼろぼろ雨みたいに涙が落ちた。

鼻をすすれば、綺麗な指先が目尻をなぞる。

「泣くナ」

よく通る低い声に顔を上げれば、目の前に鳶色が広がった。熱い体温に包まれると、体の芯が氷点下に冷え、それと同時に温まったハズの指がまた凍えた。

十ノ怪

目の前がチカチカする。指が冷たくなればなるほど、目の前の鵞色が紅く染まり周囲が暗くなる。

寒い。真っ暗だ。しんしんとした静けさが肌に張り付く。

「……ね……」

どうして？ わたしは目が見えないのに、どうして紅いものが見えるんだろう。

「……ずね」

紅い下に、真っ白な二つの、二つの……

「鈴音」

カノジョの……ムスメサンノ……

「鈴音っ」

気がつくと激しく揺さぶられていた。訝しげな紅と視線がぶつかる。わたしはそれを理解するのに十秒ほどの時間を要した。

「鬼さん」

わたしがぼんやり声を発したのを見て、鬼さんが安堵と思える息を吐いた。いつの間にか畳に転がっていた盃を手に取り、わたしの手の中へ収める。

なんか、変な夢見た。頭がぼやけて覚えていないけど、なにか嫌な物を見た気がする。後味の悪い、怖い、嫌な夢みたいだな。

頬を撫でられて下がっていた視線をあげる。整った無表情な鬼の顔が、眉間にしわを寄せてわたしの顔を覗き込んでいる。な、なに？　なんで怖い顔してるの？

「お前もしかして……」

妖しい紅がゆらりと細められ、鋭く見下ろした。瞬時に緊張して、喉の奥が急激に締め付けられて体が強張る。

「ツカレているんじゃないのか？」

「……え？　疲れて？」

もおゝなんだあゝ。

すごく怖い顔するから、もっと大変なことを言われるのかと思っただ。拍子抜けしちゃった。

わたしの肩は可哀相なぐらいぐったりと下がった。緊張が解けたところで、下ろしている髪を撫でて苦笑いする。

「それはまあ、色々ありましたから、疲れも溜まっていたと思います。きつとお風呂に入ったからどっと、溜まっていた疲れが出てしまったんでしょうね。でもしっかりご飯食べたりますれば大抵はわたし、治っちゃいますから」

疲れの原因の大半は鬼さんにあるんだけれどね。わたしは心の中でこっそり、その事を付け足しておいた。

「……そうか」

珍しく複雑な顔をしながら立ち上がり、鬼さんは自分の敷物の上に戻った。

鬼さんが用意したお風呂が風邪に効くのか知らないけれど、寒さが一気に吹っ飛んでいるのは事実。体も心なしか軽いし楽だわ。さっきの白昼夢も、病み上がりなのに調子に乗ってお酒なんて飲んだから変な夢を見たんだわ。やっぱりアルコールっぽくなくてもお酒はお酒。これ以上飲むのは止めておこう。まだ未成年だしね。

「鈴音。酌してくれ」

何事も無かったかのように、紅い手がひらりと手招きする。正直横になりたかった。けど、せっかく籠の外に出られたんだし鬼の機嫌を損ねるわけに行かない。

お勤めはどれくらい長くなるのかな。早く終わることを祈りながら、わたしは手に持っていた盃を傍らに置いて立ち上がった。

それから毎日、鬼さんの他愛無い話を聞いたりしてお酌をする日々を過ごした。

籠の外に出ることは可能にはなったけど、鬼さん以外の誰かと話をすることは出来なかったし、誰かの思考をキャッチ出来たなんてことも無かった。

それでも以前のような閉塞間を感じないのは、鬼さんがいくらか配慮してくれているからか、精神的に追い詰められることもなく、日々の暇つぶしと鬼さんのご機嫌取りに時間を使っていた。

お風呂に入るようになってからは凍える寒さも、息苦しいだるさも次第に消えた。だけど治まらない微熱が続き、時折思い出すことのない悪夢は続いた。

眠っている時は無性に気分が悪いのに、目が覚めてしまえば夢の内容も胸の悪さも消えてしまい、そのせいでわたしは今日まで悪夢に悩むとは言っても、頭痛持ちの億劫程度にしか気にはしなかった。わたしは最初、鬼さんの嫌がらせだと思っていたけれども、鬼さんの反応を見た限りでは何もしていないみたいだった。いつもの人を馬鹿にした態度と発言はともかく、鬼さんなりにわたしの体調を気遣ってくれていた。

「具合はどうダ？」

就寝前。籠の中で鬼と向き合う。

「良いですけど、微熱がなかなかしつこいです」

ずいぶん経ったはずなのに微熱が一向に下がらない。寝つきも悪くて常に疲れている感じがする。そのせいか肩がこって仕方ない。

「んゝ。そう力」

「でも普通に生活が出来ますから、夢見が悪い以外は特に問題はな
いです」

「夢見ねえ……」

鬼さんは腕を組んで天井を仰いでから、静かに目を閉じた。何し
てるんだろ。首を傾げてしばらく見守っていると、おもむろに首
を元に戻して、わたしに顔を向けた。

「久しぶりに賭けをしない力？」

「え？ 賭け、ですか？」

また唐突に何を言うのかと思えば。
わたしは露骨に眉をひそめた。

「いや実は明日、出かけようと思ってナ。そこでキチンと俺の
雀として大人しくしれいれば良いだけなんダガ」

にいつと口角を上げて悪く笑い、

「ソコで行儀良く出来たら、お前の行きたい所に連れて行ってヤロ
ウ。例えば日の光がある所とか、ナ」

「え……」

どくと胸が高鳴った。

もしかして元の世界にも連れて行ってくれるの？

「賭けるなら、可愛い病み上がりの雀に高価な褒美をやらうと思つてナァ。どうする？」

面白そうに首を傾げてわたしの顔を窺ってくる。

帰れる。太陽の下に出られる。それが一時的なものだとしても、あの暖かな日差しの中にもう一度戻れるんだ。

……でも駄目だ。

一度深呼吸をして、手元から零れそうになった冷静さを取り戻す。背筋を伸ばして余裕の笑みを唇に乗つけた。

「どうするも、鬼さんはわたしが一時とは言え、あちらに戻つて良いとは思っていないんじゃないですか？　なのにそんなことを言うって事は」

小さく息を吐いて首を振る。

「余程の何かがあるかと勘ぐってしまいます」

これだけの事を条件に出してくるとするなら、恐らく出掛け先は今まで以上に禄でもない所なんだろう。今回もリスクを考えるなら、断るのが最善な判断だわ。

「あつちにはお前を知っている奴は一人もない。お前が好きな服とやらを着て街中を歩いたつて別に構わないサ。賭の内容だつて別段酷くもナイだろう？　ただ俺の横に座って大人しくしていれば良いだけなんだからナ」

飄々とした声に鬼さんの考えが探れないかと、耳を澄ます。絶対になにかある。こんな気前の良い条件があるわけがない。また何を企んでいるんだろう。

「一つ質問しても良いですか？」

上目遣いに見あげれば、鬼さんが首をかしげた。わたしはそれを肯定だと受け取って言葉を続けた。

「具体的に『どこ』に行つて『なに』をするんですか？」

ただでさえ情報不足な立場なんだから断るにしても、これはこれとしてきつちり訊いておきたい。話の内容によつては多少の危険を冒してでも行つた方が良いかもしれないし。

「蒼魔山そうまさんに耄碌もうろくした頑固ジジイがいてナア。俺が人間を飼っている
と信じていない」

「頑固なお爺さん？」

「前に行つた遊郭でバツタリ会つてナ。その時に酒盛りの約束をしたもんだから、ついでお前を連れていつて見せてやろうつてなワケだ」

「ただわたしを見せに行くんですか」

「酒のついでにナ。あのジジイに本物の人間とやらを見せてヤル」

鬼さんの眼がギラギラと光り、笑った顔は悪戯を思いついた子供そのものの表情だった。まだわたしが了解してもないのに、楽しみ

で楽しみで仕方ないと顔中に書いてある。

なんだ。ただの鬼さんの見栄張りかあ。そんなことなら凶悪な内容じゃあ無さそうだし、付き合っても良いかな。それでしばらくご機嫌良くなってくれば安いものだし。

はあとため息を吐いて頷いた。

「分かりました。一緒に行きます」

わたしの返事に、鬼さんが目だけをよこして細めた。

「そこなきやあナァ。なに心配するナ。ちよいと酒の席にお前で華を添えるだけカナ」

わたしの髪を一房手に取って、より一層笑みを深めた。折れてしまいそうな二つの紅い三日月が、妖しく不気味に光った。

十一ノ怪

牛車に揺さぶられながら長い時間を過ごす。車の外を覗くことを禁じられて、暇をどう潰すのか考えていたわたしに、鬼さんが巻物を手渡してくれた。

なにが書いてあるんだろう。

興味津々に唐草色の巻物の紐を解いて静かに開いた。そこには水墨画で描かれた海原。右上に達筆すぎる文面が流れるように書かれている。もちろん現代人のわたしには、このうにうにした文字が読めなかった。なんて書いてあるんだろう。

「うん？ 気に入らなかった力？」

難しい顔をしていたわたしを見て、鬼さんが声をかけてくる。

「あ、いえ。そんなことないです。ありがとうございます」

何もないよりは良つか。お礼を言って閉じようとしたら「待て」と鬼さんに手を止められる。不思議に思って首を傾げたわたしをよそに、鬼さんは長く細い息を巻物の表面に吹きかけた。

何したんだろう。閉じかけた水墨画に目を移すけど、特にさっきと変わったところはない。何をしたのか訊こうと口を開いたその時だ。

「あ……」

墨の部分が徐々に水気を帯びて、水面のようにゆらめく。文字が波紋に吞まれて消えると同時に、絵がゆるやかに動き出した。

「わあすごい。生きているみたい」

大海原に船が波間を縫って現れ、真つ黒な雲間に龍が顔を出す。現れた龍は風と雷雨を呼び、船を大きく揺さぶって水平線の向こうへ船をさらっていった。

墨闇が晴れると、画は一度まつさらになった。何も描かれていない巻物に墨が走ると、着物姿の男性がのつぺら坊に化かされている画が浮かんた。

男性が両手と叫び声を上げて一目散に逃げていく。それを見て腹を抱えて笑うのつぺら坊。そこに近づいてきた子供が、筆で凹凸のない顔に目、口、鼻を書いて背から鏡を差し出す。のつぺら坊は鏡に映った自分の顔を見て、さっきの男性と同じように両手を上げて逆方向に逃げていった。今度は子供が腹を抱えて笑い転げ、煙に包まれると狐の姿を現した。子供の正体は狐だったのだ。

へえなんか懐かしい。こういう昔話、小さい時によく聞いた気がするなあ。

化かしたばかりの狐が意気揚々と山道を歩いていく様子を見ながら、わたしは笑った。

「面白い力？」

降ってきた声に巻物から顔を上げる。右を見やればあぐらをかいて頬杖をする鬼が一人、ニヤニヤしながらわたしを見ていた。

「はあ……面白いです」

「鈴音は無邪気力ナ」

今にも鼻で笑う音が聞こえてきそうな嫌な視線と口元。鬼が怖くなければ『こっち見ないで！』くらいは言えるのに。相手が妖怪じやあ言いたいことも言えないわ。

わたしはこみ上がるものをぐっと堪え、巻物に目を戻そうとした。

「鈴音」

呼ばれたと同時に視界がぶれる。顎を掴まれて強制的に視線を合わされれば、妖しい紅がわたしを捉えた。

「これから行く場所について、ちよいと話がアル」

話？ いきなり顎を掴まれた不快感をとりあえず自分に我慢させて、僅かに動く顔の表情で問いかける。

「ナニ、難しいことじゃあ無い力ナ。酒の席に着いたら、俺が言うことに全て『はい』と応える。それだけナンだが……出来るナ？」

なんで今になって言うの。ここまで来て脅しのような視線を向けられたら、分かりましたと言うしかないじゃない。

不満を心の中で呟くが状況が状況だわ。わたしは難しい顔をしつつも、渋々頷いた。

「良い子ダ」

微弱な振動が止まった。着いたのかな。

鬼遊びをしていた座敷童子と袖引き小僧の決着がちょうど着いたところで、わたしは顔を上げた。

「降りナ」

鬼さんに促されながら、牛車の前から踏み台に足を乗つけて慎重に降りる。今日は単衣じゃなくて振り袖の着物だから、大変だと思われた乗り降りが思ったより楽だった。あんな裾を引きずった格好じゃあ移動するのも大変だわ。

無事に牛車から降りてほっとしながら顔を上げた。そしてわたしは、目の前の光景に表情と背筋を凍らせた。

巖つい跳ね橋の向こうに大きな岩山の要塞。そしてギヤアギヤアと鳥じゃない何かの鳴く声がこだまする暗黒の空。鬼ヶ島とかドラキュラ城とか、そんなイメージとぴったりの光景が目の前にそびえ立っていたのだ。

「な、な、なにが、誰が、どんなのが住んでいるんですか？」

「お前はビビると毎回ドモるんだナ」

橋の向こうにある大きな鉄の門が開くと、中から誰か出てきた。手には槍を持っている。

鬼さんはそれを見るなり跳ね橋を渡り、スタスタその人物に歩み寄った。片手をひよいとあげて気軽に挨拶をすると、一つ二つ言葉を交わしている。少ししてから槍を持った影がちらりと後ろで固まっているわたしを指さした。

振り返った鬼さんが手招きをしてわたしを呼んだ。

うゝ、行きたくないよお。

内心半べそをかきながら、そろそろと跳ね橋の手前まで来る。そこでやっと、その槍を持った人物の姿がよく見えた。

青い、真っ青な鬼だ。

顔は黒子みたいに変な模様が描かれた布を被せていて見えないけど、逞しい腕や足は長年青い絵の具にでも浸かっていたかと思うほど、青さが染み付いた色をしていた。

「なにしてんダ。さっさと来ないカナ」

鬼さんが人差し指を立てて曲げるとわたしを呼んだ。ガクガク震える足が妖しい紅に誘われて歩き出す。

どうか頭の前からつま先まで無事に出てくれますように！

必死に念じて紅い鬼の傍らにようやく立てば、青い鬼に導かれ門の中へ招かれた。

門をくぐった先に青銅かと思われる巨大な扉が姿を現した。青鬼が槍で扉を三回叩く。耳の鼓膜が震えるほど重い音を立てながら、重厚な扉がゆっくりと口を開けた。暗闇の向こうには、岩壁に青い鬼火がゆらゆらと、暗くて寒い道を照らしていた。

怖いし……気味が悪い。

紺色の岩畳の上で黙々と青鬼、紅の鬼、人間のわたし、の順で続いていく。三人の足音と鬼さんの鼻歌以外、音はない。鬼さんのお屋敷とは違って異様に静かだ。

目の端で両側を盗み見れば、岩壁に描かれている鬼や人の目が絡

みついてくる。本当に気味が悪い。幾つもの視線が集まり、まるで監視されている気分だわ。

どれだけ歩いたか分からないけれど、早く着かないかな、なんて思っていたら、やっと斧に蛇が巻き付いた大きな観音扉の前に行き着いた。

青鬼が扉を開けて端に控えると、鬼さんは片手をあげて案内してくれた青鬼に（意地悪く）笑いかけ、慣れたように足を進めた。慌ててわたしも青鬼に会釈をしてから、鬼さんの後にくっついて入っていた。

扉の向こうは先ほどと違って明るかった。高い壁や大きな襖一面に水墨画が描かれていて、虎や鷹、蛇に獅子と、どれも生き生きとして、牛車の中で見た巻物みたいに今にも動きだしそうだった。すごいなあ。あんなに高い天井にまで絵が描かれてる。どうやって描いたんだろう。思わず感嘆の息が漏れてしまうわ。

「こつちダ」

見上げていた顔を元に戻す。いつの間にか一番奥の襖の前にいる鬼さんに呼ばれて、わたしと駆け寄った。

「分かってるナ？　良い子にしてるヨ？」

そう言っでわたしに念を押しながら、鬼さんはいつもの行儀悪さで足の先を使って襖を開けた。

「待たせたナア、ジイさん」

口が裂けるほど笑う、紅い鬼の横顔。それがほんの一瞬だけ、わたしを追いかけた時の悪鬼の本性が見えた気がして、背筋に凄まじい悪寒が走った。

鬼さんが襖の向こうにいる人物と話しているが、恐怖に固まったわたしは聞き逃していた。

「男二人じゃあつまらんとってナア。俺の雀を連れてきてやっタ」
紅い鬼の顔を見て、立ち尽くしているわたしの腕を鬼さんが取った。やっと正気に戻ったわたしだったが、何かを口にする前に、開け放たれた襖の前に立たされた。

「ほお人間の小娘か。久方ぶりじゃのう」

しゃがれた老いた声。びくびくしながら、それでも声の主の顔を見ようとして、わたしはぎこちなく顎を上げた。

目に入ってきたのは窪んだぎよろりとした大きな目に、閉じた口から覗く大きな牙。着崩した着物から、肋骨が浮き上がった蒼い胴体が覗いている。

目の前でわたしを見下ろす鬼は、大きな体をした、老いた蒼い鬼だった。

十二ノ怪

「おお可愛らしいのう。こっちに来い来い」

わたしは濁った目に見つめられながら、その場に縫いとめられ固まっていた。

なんなのこの大きな蒼い鬼。げっそりして、皮が骨に張り付いているだけの大きなミイラみたい。足と腕は太いけれど顔も首元も骨ばっていて、見て分かるほど肌という肌が乾いていた。

ごくり。自分の喉から緊張を飲み込む音が鳴った。

「おいジイサンよ。こいつぁ俺の雀だ。はべらすんなら自分で用意してキナ」

鬼さんがわたしの腕をとって蒼い鬼の前に座った。わたしは震えるのも忘れて、穴があくほど蒼い鬼を見続けて突っ立っていた。

そんなわたしに蒼い鬼が目を細めた。もしかしたら笑ったのかもしれない。途端にわたしは紅い鬼の隣にペタンと座り込んでしまった。いや、座り込んだと言うよりも、腰が抜けてしまったというほうが正しかったかもしれない。

「おーい。酒と肴を持ってこい」

蒼い鬼が言い終わってすぐに全ての襖が開いた。

門番と同じ顔を隠した青鬼達が入ってきて、豪華な盛の刺身や肉やら不可解なものやらをわたし達の前に素早く、且つ丁寧に並べ始める。

一つ一つの料理を確認する暇もなく、それこそあつと言う間に目の前に様々な食事と様々なお酒が広がると、青鬼達は鬼二人に頭を下げ、即座に退室した。またしんと部屋の中が静まり返る。

「さあ飲め飲め。どれもこれもわしの気に入りじゃ。そこらじゃ飲めん銘酒ばかりじゃ」

「そう力。じゃあ遠慮なく……」

鬼さんが手前の昇竜の形をした酒瓶をとり、懷から取り出した朱の盃に注いでぐつと飲み干した。傍らにはぐい飲みの器が用意されているのに、わざわざ自分の盃で飲むなんて。普段使い慣れた器じゃないと嫌なのかな。鬼さんは結構神経質なのかしら。

「お前も可笑しな奴じゃのう」

一瞬でも忘れかけた存在に視線を引き戻される。乾いた声に驚きつつも蒼い鬼へ視線を投げれば、バリバリなにかを噛み砕いているところだった。口から何かの足みたいなのが見えたのはきつとわたしの気のせいだ。そうに違いない。まともに見ていなかった手前の料理に、わたしは今後なるべく見ないようにしようと思心に決めた。

「鬼を食つといて人間を食わんとわな。……して、名はなんとつけた？」

「なんでジジイに教えないといけないんだ」

前のめりになった蒼い鬼に、赤い舌をぺろり出してからいやらしく口端をつり上げ、鬼さんはまた盃に酒を注いだ。

「知りたいンなら当ててみナ。ま、当てるまでにお迎えが来ちまうかも知れンが」

「まあったく。相変わらず可愛げの無い奴じゃのう。老い先短いに教えてくれたって良かろうに」

蒼い鬼が口をへの字に曲げ、わざとらしく拗ねてみせた。それからちよつと顎を引いて上目遣いになると、鬼さんに負けないくらい、いやらしく口元を歪め笑った。

「それともまた、奪い損ねたのかのう？」

瞬間、酒から外れた紅い眼差しが殺気を帯びて、蒼い眼差しと静かに睨み合った。どちらも表情も動きも止まったまま、わたしの駆け足になりつつある胸の鼓動と時間だけが部屋の中で動いていた。

多分鬼さんにとって、一度わたしの名前を奪い損ねたことは、わたしが思っている以上に屈辱的な出来事だったんだろう。それを蒼い鬼が突っついたからこんな険悪な空気に……。

両鬼の表情を盗み見るが、二人ともさっきと同じ姿勢と目つきで固まったままだ。いつまでこの状態にいるつもりなんだろう。一分も時間は経過してないんだろうけれど、わたしはすでに嫌な汗が額に浮き始めていた。

お願いだから穏便に。暴力的なことにならないで。

祈るような気持ちで堅く目を閉じると同時に手に力が入った。気づけば無意識に膝をぎゅつと掴んでいたみたいで、手の中で布が崩れた感触がした。

隣から細く空気の抜ける音がした。

強く握っていた拳に大きな手が被さり、離れたら今度はわたしの頭をゆるやかに撫で始めた。

「鈴音」

ぶっきらぼうな声に目を開けて鬼さんのほうを見れば、ツンとした顔をしながらお酒を口に運んでいた。

「おうおう、そうか。可愛い名をつけたのう。この娘にぴったりじゃ」

「当たり前カナ」

ようやく空間に冷たい空気が流れ去って、わたしはこっそり胸をなで下ろした。

このまま何事もなく楽しくお酒を飲んでお開きにしてくれないかなあ。この調子で凍り付いていたら心臓がいくつあっても足りないわ。

またこっそりと溜息をついた。

「どうじゃ、わしにひとつ貸してくれんかのう」

えっ！ 声には出さなかったけれど、わたしは思い切り飛び上がって顔をひきつらせてしまった。動転しながらそれらを顔の表面からずり降ろし、なんとか鬼の不機嫌を買わないよう畏^{かしこ}まった。

「美味しいもの食わせて着飾らせて、存分に可愛がってやるぞ。どうじゃ？」

じよじよ、冗談じゃないっ！ 現状でさえ大変なのに得体の知れない（鬼さんだって充分得体は知れないけど）よその鬼だなんて、余計に危険極まり無いわ！

ぶんぶん左右に振りたい頭を、理性を総動員させて必死で抑えた。

「ああ、そりゃ出来ン相談力ナ」

いきなり肩を鷲掴みにされて、強く引き寄せられた。わたしの視界半分に鳶色の胸元が見えて、ようやく鬼さんに抱き寄せられたんだと気づいた。

「こいつぁ寂しがり屋で俺の側から離れたがらなくてナア。寝る前だって甘えてきて困ってるほどカナ」

……は？

「今日だってどうしてもどうしてももお供したいって聞かなくて……ナア？ 鈴音」

今度は思わず「は？」と声に出して言いそうになったわたしだけ、上から鋭い紅に睨まれて開きかけた口を閉じた。

返事の仕方は教えたろう？ 凄みを効かせた眼差しはそう言っていた。わたしは慌ててこくこく頷いて返事をした。

「は、はいっ」

「良い子カナ」

よしよしと頭を撫でられる。

はぁゝ危ない危ない。正直好きな場所に行けなくなることも、

鬼さんの不興を買って痛い目に遭うほうが嫌だわ。

「そんなに懐いているように見えんがのう」

訝しげに蒼い鬼がお酒を口に含もうとしながら言った。もちろんその見解は当たっているんだけど、今は当てないでくれた方がわたしは嬉しかった。

「なかなか初々しい奴でナア。人前じゃあ俺から誘わんと擦り寄って来ないんだ。なあ鈴音？」

違っけれど……

「はい」

「それじゃあ色々骨が折れるのう」

「なに二人きりなら自分から俺の腕に入り込んでくる力ナ。なあ鈴音？」

そんなわけないじゃない。何言ってるの。

口に出していないのに肩を抱いている手に力が込められる。痛い。

「……はい」

「ほお甘え上手なんじゃのう」

鬼さん、なんでこんな変な嘘をつくんだろ。人間に恐れられているって言うのならともかく、好かれているって鬼の間では重要なかな。それともそういう流行でもあるのかしら。

「最近では夢見が悪いみたいでナア。同衾したがってしたがって」
ピシッと自分のこめかみに青筋がたつ音が聞こえた。隣でやれやれと首を振る紅い鬼に軽く殺意が沸いてくる。

「ほお。それは真まことか？」

「本当さ。なあ鈴音？」

ちよつと……これも返事しなきゃいけないの？　ねえダメなの？
もうむしろこれって、平手打ちして良いレベルなんじゃないの？
セクハラじゃないの？

「鈴音。返事」

「……………はい」

文句ではなく溜息が口から零れた。切実にこの話題が終わることをわたしは祈った。

「ところで、愚痴の鬼姫は知つとるか？」

鬼さんの嘘連発が落ち着いた頃、蒼い鬼が思い出したように言った。

「ずいぶん美しい姫じゃそうだが」

「ああ知ってる力ナ。なんせソイツは最初俺が捕らえた小娘だからナア」

鬼さんの言葉に誰のことを言っているのかすぐに分かった。わたしは不快感と動揺が出ないよう気を配り、顔をほんの少しうつむき加減にして顔の表情を隠した。

「その話この老いぼれの耳にも入ってる。まさかお前さんが横取りされるとはのう」

「おいジジイ、馬鹿を言うナ。俺が捨てたのを腹黒い愚痴の奴が拾っただけさ。まったく迷惑な奴力ナ」

ふんと鼻を鳴らして、六本目になるお酒を喉に流し込んだ鬼さんを横目で眺めた。みぞおち辺りがざわざわする。彼女は今どうしているんだろう。

「実はのう、わしも最近人間を一人拾ったんじゃ。まあ見てやってくれ」

両手を一度叩いて蒼い鬼が「おい」と襖の向こうに呼びかける。ほどなくして襖が静かに開かれて、頭を下げて両手を着いた人物が現れた。もやもやしたものを抱えながらその人を眺める。体つきや服装からして若い男の人だ。

「人里でふらりふらり彷徨っていたのをわしが連れ込んだんじゃ。なかなかこれの弾く琵琶の音色が素晴らしくてのう。わしはすっかり気に入った」

……琵琶？

急速に暗雲とした思考が晴れた。

代わりにどこまでも広がる、冷たい闇が墨を零したように心に広がっていく。

「ジイさんそっちの気があったの力。ついに色ボケした力」

「琵琶の音色が良いと言っておるじゃろうがっ！」

鬼たちのやりとりが遠くで聞こえつつ、わたしは見えない汗をだらだら垂らしていた。心臓が痛いほど胸を叩いて血の気が引いた。

まさか、まさか！ ……そんなはず！

手を突いている人物に注目する。下げていた顔がおもむろに上がっていき、わたしは息を呑んだ。

いつも閉じられているはずの目が、真っ青になっているわたしの顔を、その朧げな蒼い瞳で見つめ返している。

琵琶の青年。

わたしは彼にぼうつと見つめられ、身動きもせずただ固まっていた。

「ふうん……人間ねえ」

見えないところで紅い声がぼつり呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0349t/>

妖しい旋律

2011年11月15日01時37分発行